Story

「わたしの赤ちゃんになって下さい!!」
憧れの巨乳な先輩・桜沢ともみの秘密――それは生まれつき母乳が出ちゃう特殊体質!?
精液を飲ませては、乳搾りしてあげる放課後射乳サポート学園生活！
「ヒカルくんの、ビクビクしてる。わたしも初めてだけど、中に入れていいんだよっ♡」
ともみの爆乳に顔を埋めながらの童貞&処女喪失。全身を母乳まみれにしながら、二人は絶頂へと達していく。
「もう、ミルクが止まらないのぉ♡　お願い、ヒカルくんの熱いの、わたしに注いでっ！」
蜜肉の蠕動に搾り上げられるまま、ヒカルはともみの胎内めがけて精液を迸らせた。
強気な陥没ちゃん妹・甲斐すずかも押しかけて、ミルクハーレムなイベントが満載！

電子書籍がスマホでもPCでも読める！
美少女♥文庫 WEBサイト
https://www.bishojobunko.jp/
Twitter 始めました！ フォローよろしくお願いいたします
@bishojobunko



美少女文庫 既刊絶賛発売中！

上原りょうの本

優等生 綾香のウラオモテ …… 原作・illustration○ひさまくまこ
催眠恋。
純愛幼なじみ、生意気義妹、高慢教師を独り占め！ …… illustration○愛上 陸
異類婚姻譚
―狐嫁と結婚しました。― …… 原作・illustration○ユキパスターZ
救国征戦記
首輪の剣姫と鬼の王 …… illustration○おにぎりくん（アリスソフト）
催眠授業
女教師・春宮綾華は絶対堕ちない …… illustration○掃除朋具
教え子は実は狐
（略してＪＫ） …… 原案・illustration○ユキパスターZ
優等生 綾香のウラオモテ
アヤカのナカにぜんぶちょーだい♡ …… 原作・illustration○ひさまくまこ
異類婚姻譚
―狐嫁と春夏秋冬― …… 原作・illustration○ユキパスターZ
ボクの理想の異世界生活
❀せいっぱいケモ耳ハーレム！ …… 原作・illustration○イチリ
母乳ちゃんは射したい。
先輩と妹、ミルクハーレム …… 原作・illustration○ひつじたかこ

母乳ちゃんは射したい。
先輩と妹、ミルクハーレム
2021年　7月30日　第１刷発行

Novel● 上原りょう（うえはら・りょう）
原作・Illustration● ひつじたかこ
発行所● 株式会社フランス書院

母乳ちゃんは射したい。
先輩と妹、ミルクハーレム

novel○上原りょう
原作・illustration○ひつじたかこ

美少女文庫
TRANCE NOVEL

母乳ちゃんは射したい。
先輩と妹、ミルクハーレム

NOVEL 上原りょう
原作・ILLUSTRATION ひつじたかこ

フランス書院
2145


先輩と妹
おっぱい独占！
illustration©TAKAKO HITSUJI



母乳ちゃんは射(だ)したい。
先輩と妹、ミルクハーレム

上原りょう
原作・illustration◎ひつじたかこ

美少女文庫
FRANCE SHOIN



第一章 巨乳先輩のお願い事～わたしの赤ちゃんになって下さい！ 11
第二章 強気妹の陥没乳首～あたしの処女、兄貴にあげちゃう♡ 37
第三章 文化祭で3P祭～おっぱい止まらなくなっちゃう！ 69
第四章 二人きりの体育祭～用具倉庫で特別競技おっぱい搾り 104
第五章 夏休みは水着母乳と～先輩と妹、ビーチで夢の競艶！ 131
第六章 おっぱいナース～母乳ちゃんは看護したい。 161
第七章 冬は温泉旅行～新婚さんみたいに先輩と…… 189
第八章 夏祭りの夜は～浴衣姿の先輩と妹を交互突きで 222
第九章 兄として～妹ちゃんと恋人デートの予行演習 255
第十章 催眠術～陥没ちゃんは兄と付き合いたい。 289


校内トップの人気を誇る美少女
桜沢ともみ先輩
男子なら誰もが吸ってみたい
そのデカ乳推定Hカップ!!
でねヒカルくん
そんな先輩と俺はどうしてか
秘密の課外活動をしている
その活動とは……
今日も……いいかしら?


母乳
ちゅ…
ちゅぱ
母乳セックス活動——
あ…♡
ひ、ひかるくん
そんなに吸ったら
おっぱいが
ちゅぱ♡
ちゅう♡
ぢゅ〜〜♡
ヒク♡
ヒク♡
セックス、および乳弄りをして
先輩のパンパンに張ったおっぱいから
母乳を出してあげること——！
ミルクがはちきれちゃうっ…♡♡♡
あ あっ…♡
ぷしゃ
あ
あぁあっ…♡
なんで俺と先輩がこんなエッチで甘い関係になったのか
それを今から話そう——
——ちょっと
はぁ…
はぁ…



第一章　巨乳先輩のお願い事～わたしの赤ちゃんになって下さい！

朝日を浴びながら、甲斐ヒカルは目覚めた。
スマホのアラームを止め、ベッドから起き上がった。
今日から起こしてくれる人は誰もいない。
今ヒカルは、実家の京都を離れて、一人暮らしをしている。
どうしても行きたい学校があって、それが関東の方だったのだ。
関東行きは自分で決めたが、妹に起こされずこうして一人で目覚めるのと、外から帰ってきた時に誰もいないのは少し寂しくもあった。
と、スマホが鳴った。画面には『甲斐すずか』と表示されている。妹だ。
一瞬出るか出まいかを考えつつ、電話に出た。
「すずかちゃん。朝からどうしたの？」

「へえ。起きてたんだ。感心感心」
「寝坊してなくって残念だったね。まさか起きられるように電話をかけてきたの？」
「どーでしょー？……また遊びに行ってあげるから、部屋は綺麗にしておいてよ。汚部屋なんて嫌だから」
「もう切るよー」
「ああちょっと――」
電話を切った。
爽やかな気分が台無しだ。妹のすずかは、実家のある京都にいる。
「ちっちゃな時はもっと素直で可愛かったのになぁ……。これが思春期というものか」
そんなことを考えながら、さっさと制服に着替えた。

ヒカルは教室で友人たちと挨拶を交わし、自分の席につく。
と、友人の一人がヒカルの元にやってくる。
「なあなあ、あの生徒会長、さっき見たんだけどすごかったぜ？」
「本当に？」
「マジ！　マジ！　歩くたびに、おっぱいがぽよんぽよんってまるでボールがバウンドしてるみたいだったんだよな。くっそー！　あのおっぱい、揉みくちゃにしてえ！」
「そういうこと言うなよ」
「なんだよ。ノリ悪いなぁ。お前だって始業式の時の会長にぞっこんだったろ？」
「そりゃそうだけど、あんまりそういうことを言うのは、失礼な気がするっていうか……」
「ってか、新入生の男は全員、その話しかしてねえけど」
そこで、クラスの女子がヒカルを呼んだ。
「甲斐君、先輩が呼んでるよ」
「先輩？」
顔を出したのは、友人が噂していた生徒会長。
桜沢（さくらざわ）ともみ。この学校では知らない人がいないという有名人。
ショートカットのヘアスタイルに、円らな瞳。
年上であることは分かっていても、童顔のせいでとても幼げに見えた。
スタイルがとてもよくて手足が長いのはもちろん、制服の胸元が大きく膨らんでいる。女子の制服のデザインは学年問わず同じはずなのに、別物のように思えてしまう。
しかしともみを覚えているのは、その抜群のスタイルのせいだけではない。
そう、それは始業式の日。

一年生（特に男子）をざわつかせた生徒会長、桜沢ともみ、その人だった。

――みなさんは、今日からこの学校の生徒の一人です。この学校は様々なカリキュラムを生徒自身が選択でき、生徒一人一人が自分の目指したいこと、成したいことに向かって頑張ることができる場所です。一年生の間では色々と悩むことがあるでしょう。その時は先生やわたしたち上級生に是非、相談して下さい。皆さんの三年間の学校生活が有意義なものになることを期待しています。

今も、あの澄んで軽やかな声は耳に残っている。

なにせ校長の長話で沈みかけていた意識を拾い上げてくれたのだから。

ともみに手招きされ、人気（ひとけ）のない場所にやってきた。

「先輩、どうしたんですか？」

「甲斐ヒカルくん！　わ、わたしの赤ちゃんになって下さい!!」

ともみは思いっきり頭を下げる。

その躍動具合に、おっぱいが大きく上下に跳ねたことは言うまでもない。

「え？」

「せ、正確にはおっぱいを吸うお手伝い……ううん、バイトと言ってもいいわ」

（何言ってんの、この人――――っ!!）

突然すぎるし、前もって心の準備をした状態で言われたとしても、頭が混乱せずにはいられないお願い。

「赤ちゃんって……俺はもう義務教育を修了してまして……ってそうじゃなくって！話がぜんぜん見えないんですが……」

「そ、そうよねっ。いきなりすぎるものね……。でもあなたじゃなきゃ駄目なのっ！吹奏楽部でもかなり指折りの肺活量の持ち主でなきゃ……」

「お、おっぱいって……赤ちゃんの飲む母乳のことですよね。ということは先輩、にんし――」

ともみは「違うのっ！」と慌てた。

「生まれつき母乳が出ちゃう体質で……。だからあなたに助けてほし――」

「分かりました！」

「え……っ。ほ、本当？」

ともみの驚きように、ヒカルは笑ってしまう。

「先輩がお願いしたんじゃないですか。困ったことがあるなら、お役に立ちたいと思って……」

「じゃあ、放課後に四階の角部屋に来て」

「喜んで！」

足取りも軽やかに、先輩は去っていった。
（ああ、そんなに走ったらおっぱいが服の裏地と擦れちゃいますよーっ）
そんなくだらないことを、ヒカルは思うのだった。

友人たちからともみとどんな話をしたのかとしつこく聞かれながらも、最後まで言わなかったヒカルは、なおもしつこく聞こうとしてくる友人たちを振りきり、待ち合わせの空き教室にやってきた。
（こ、これから先輩の母乳を吸うんだよな……）
ゴクッと生唾を呑み込み、空き教室の扉を開けると、そこには保健室にあるようなベッドが一つ置かれ、そのベッドにはともみが腰かけていた。
「あ、いらっしゃい。ヒカルくん……」
「先輩、そのベッドどうしたんですか？」
「これはもう古くなったベッド。処分するのにもお金がかかるみたいで、ここにしまわれてるの。ここは荷物置き場としても使われてるから」
「そうなんですね……。そこでするんですね？」
「うん。ちゃんとシーツは綺麗にしてあるから。さ、座って」
ともみは緊張しているのか、笑顔が少しぎこちなかった。

「……先輩。聞いてもいいですか？」
「な、何？」
「どうして俺のこと知ってたんですか？　面識はないのに……」
「私も吹奏楽は昔から好きで、同級生と一緒によく大会に遊びに行ってて。うまくないから部活には入ってないけどね。あなたは中学時代から有名だったから、覚えてたの」
「あはは。なんか、照れます……」
特にともみのように文武両道の優等生に言われればなおのこと。
と、ともみがちらっとヒカルを上目遣いで見た。
「そ、それじゃあ、ヒカルくん……」
「分かりました。で、でもどうしたらミルクが出るんですか？　普通に揉めばいいんでしょうか？」
すると、ともみは頬を桜色に染め、これからすることを考えるとあまりにも初々しい反応を見せ、モジモジした。
「……あ、あなたの精液が必要なの。精液を飲まないと、わたし、おっぱいが出なくって……」
「ええっ!?」

「……びっくりさせて、ごめんね？」
「ということはつまり？　俺が自分でしてそれを先輩に？」
ともみは首を横に振った。
「わたしとエッチなことをして、出してほしいの」
「でも俺、そういうことは初めてなんで……」
ともみも目を伏せる。
「……わ、わたしも、初めてだから……」
「初めてなのにこんな大胆なことを……」
ともみはこくりとうなずいた。
「それくらいつらい、から……」
緊張で心臓がバクバクしていた。
ともみと目が合う。すでに股間は痛いくらい張り詰めて、中腰気味。
「まずわたしから見せるね」
「へ？」
間抜けな声を上げたヒカルの前で、ともみは制服のボタンを一つ一つ外していく。
そして、ピンク色のシンプルなブラに包まれたおっぱいをこぼした。
（ブラが大きい……！）

女性の下着はグラビアアイドルのビキニ水着くらいだと思っていたヒカルにとって、おっぱい全体を包み込むようなフルカップブラというのは衝撃だった。
しかしそれでも彼女の深い谷間はバッチリ見えている。
「んっ……んっ……」
ともみは両手を後ろに回すと、かすかに身動ぎながら何かをしている。
ブラが外れ、重量感をたたえた豊乳がぶるるんっと波打った。
「ヒカルくん、み、見すぎ……っ」
「ご、ごめんなさい！」
慌ててヒカルは目を逸らしたが、目の端で彼女がブラを外す様子はばっちり見ていた。
「……見て、いいよ」
ヒカルは恐る恐るという風に首を動かす。
「っ！」
ゴクッと生唾を呑み込んだ。
ともみが、二つの膨らみをこぼしていた。
グラビアアイドルのように綺麗な形で、もちろん大きい。
お椀を伏せたような形をしていて、ぜんぜん垂れていない。

ソフトボール大の白い胸は重力に逆らって、ツンと上を向いている。
乳輪は小さめで、乳首は哺乳瓶の先っぽくらいの控えめな大きさ。
「わたしのおっぱい、どう？」
「す、すごく綺麗だと思いますっ」
「本当？　そう言ってくれると嬉しい……っ」
ともみは恥ずかしそうにモジモジする。
「お、おっぱい、触っていいですか？」
「あ、う、うん……。ど、どうぞ」
ともみはおっぱいを突き出せば、ぷるんっと双乳が重たげに揺れた。
「先輩、いやらしいです……」
ヒカルは下から支えるようにおっぱいを握った。
「ん……♡」
「わっ、ごめんなさい……っ」
「大丈夫……。ちょっと敏感になっちゃってるだけだから」
ヒカルは、再び水風船のように弾力感と柔らかさを兼ね備えた美巨乳を、優しく握った。
「ぁあっ♡」

ともみは鼻にかかった声をこぼし、うっとりとした顔をした。
「先輩、気持ちいいですか？」
「え、ええ。気持ちいいっ。ヒカルくんの手、おっきくてゴツゴツしてて……童顔なのに、男の人の手なのね」
「初めて言われました。先輩のおっぱいは本当にミルクが詰まっているのが分かる気がします。少し握ると押し返される感じが……」
「う、うん……。ここに本当は赤ちゃんに飲ませる母乳がたっくさん詰まっちゃってるの……っ」
「乳首、触っていいですか？」
「いちいち聞かなくても大丈夫。わたしが頼んでるんだから」
本当に乳牛の乳首を思わせるくらいツンと勃っている。
二つの乳頭をそっと抓んだ。
「ああっ♡」
これまでで一番の反応。ともみは眉をひそめ、頬を赤らめてモジモジした。
「どうですか？」
「はぁっ、ああっ……♡　気持ちいい……っ♡」
ヒカルはあまり強く刺激しないよう気をつけていたが、

「ひ、ヒカルくん……っ♡」
「先輩、どうされたんですか……!?」
「そ、そろそろ……♡」
ともみは『赤ちゃんになってほしい』と大胆なことを言ったのとは打って変わって、口ごもった。
「先輩、パイズリをしていただけませんか？」
「パイズリ……？」
「先輩のおっぱいで僕のものを挟んで扱くんです……」
「ヒカルくんはそういうのが好きなの？」
「はい！　も、もちろんやってもらったことはありません……」
ヒカルはベルトを緩め、下着ごと下ろす。
「わ、分かったわ……」
ともみは言われた通り、おっぱいでヒカルの逸物を挟んだ。
「う！」
重量級の二つの膨らみが織りなす乳圧に、今にもペニスがぺしゃんこにされてしまいそう。いきなりのことに、ヒカルの腰がビクビクと震えてしまう。
「ああっ♡　おっぱいの間で、ヒカルくんのち×ぽがビクンビクンって震えてるの分

かるわっ♡」
「先輩の胸、熱々で火傷（やけど）しちゃいそうですっ！」
「や、火傷してもいいよ……♡」
ともみは胸を上下にゆっくりと動かしてくる。亀頭の笠をすべすべした胸の内側で擦られてしまうと、ビリビリッと快感の電流が走った。
「ともみ先輩の胸、俺のに吸いついてきて、気持ちいいっ！　先輩のおっぱい、ツルツルスベスベで！」
ヒカルは腰をビクビクさせた。
「はあっ♡　ああっ♡　そ、そう？　ヒカルくんのち×ぽこそ、ビクビクしながら膨れ上がって、わたしのおっぱいを押してくるっ♡」
ともみはくすぐったそうな顔をした。
「わたしの胸の谷間から、ち×ぽの先っぽがひょこっと顔を出してる♡」
「な、舐めて下さい！」
「……うん。今すぐしゃぶってあげるねっ♡」
ともみは「あむっ」と先っぽをしゃぶってきた。
「先輩いいいいっ！」
ともみの温かな口の中に包まれ、我慢汁がこぼれてしまう。

「あぁ♡　ヒカルくんのいやらしいお汁がいっぱいこぼれてきたっ♡」
ともみはくんくんと臭いを嗅ぎながら、甘いため息をこぼした。

（ヒカルくんのち×ぽ、ゴツゴツしてて気持ちいい……っ）
おっぱいを上下に動かしただけで肉棒と擦れて、背筋がゾクゾクしてしまう。
谷間から顔を出した陰茎。
ヒクヒクしている尿道を掃き清めるように舌をくねらせる。
「えろっ♡　れろっ♡　ちゅぴぃっ♡　れろれろっ♡　ヒカルくんの匂いがするよ……♡」
口の中いっぱいにホルモン臭が広がっていく。
子宮がキュンッと疼いてしまい、慌てて太腿をぎゅっと閉じ合わせた。
ともみは小鼻を膨らませて臭いを堪能しつつ、一生懸命舌を動かす。
「あぁ……チュパッ♡　あぁぁ、ビクビク震えちゃって、いやらしぃ……っ♡」
「せ、先輩のお口、バキュームみたいですっ。吸い尽くされるっ！」
ともみは大きな口を開けて、ペニスを咥え込んだ。
「んんっ……♡」
肉の味と臭気がなだれ込んでくるのが堪らない。

ともみは目尻を緩めながら、ますます亀頭冠に吸いつく。
「先輩っっっ！」
じっとはしていられなくなったヒカルが腰を突き出してくるが、ともみは唇の輪っかを窄め、甲斐甲斐しくしゃぶってくれた。
「んぢゅるるっ♡　ぢゅっぽっ♡　んぐぅっ♡　ぢゅぷっ♡　れらぁっ♡　ぢゅるぅうっ♡」
ともみは頬をへこませながら、ますます逞しいペニスを貪った。

（先輩、とんでもなくエロいっ！）
ヒカルの股の間に顔を埋めている人が、新入生の前で立派な挨拶をした生徒会長と同じ人物とはとても思えない。
そう思うと同時に、どんなに下品なことをともみがしても、全然下品にならないような気がした。口腔の熱気が、敏感な逸物に染みてくる。
ともみはショートヘアを掻き上げながらも一心不乱にしゃぶってくれる。
「んっ♡　ちゅっ♡　れろっ♡　れろっ♡」
ピンク色の綺麗な唇の端に、唾液のあぶくが滲んでいた。
それだけ激しく、ヒカルの肉棒を頬張っている証拠だ。

（下品な姿のはずなのに、昂奮するっ！）

肉棒は素直にビクンッと戦慄く。

それと同時に、尿意にも似た感覚が盛り上がった。

「せ、先輩ぃ！　もうっ！」

「んぎゅっ♡　ぎゅぷぅっ♡　こ、このまま出してっ♡　わたしの口の中に精液、ちょうだいぃっ♡」

「ううううう！」

強い吸引に促されるがままに、びゅるびゅるっ！　と精液を、ともみの口内めがけ撒き散らした。

「んんっ……ごきゅっ、ごきゅっ、んんっ、ぁあっ……♡」

喉を鳴らし呑み込んだともみは、全身を痙攣させる。

「あぁぁぁぁっ♡」

「せ、先輩、どうしたんですか!?」

「で、出ちゃう……っ！」

瞬間、膨れ上がっていた乳頭から白いものがプシャッと勢いよく噴き出す。

「うわあ!?」

ヒカルは、その白い体液を浴びてしまう。

その白い体液はほんのりと温かく、甘い香りがした。

「先輩……こ、これ……」

ともみは肩で息をしながら、うなずく。

「う、うん……。おっぱい……っ」

ヒカルは、自分の身体に張りついた母乳をぺろっとしゃぶってみる。

「お、美味しい……♡」

「へ？」

「先輩のおっぱい美味しいです！」

「えへへ♡　気に入ってくれて嬉しいっ♡」

「先輩！」

「ヒカルく……きゃっ」

今度ベッドに寝るのはともみの番だった。激しい体勢の変化に、おっぱいがぶるんっぶるんっと出来立てのゼリーのように大きく波打つ。

「俺、先輩の赤ちゃんになってもいいかもしれません！」

「あんっ♡　ヒカルくん、来て……っ♡」

「はいっ」

ヒカルは、仰向けに寝そべっているともみにのしかかる。

もちろん、ともみに体重がかからないように気をつけた。
「いただきますっ」
（吹奏楽部の意地を見せる！）
ヒカルが右胸の乳首に吸いつけば、すぐにプシャッと母乳が勢いよく噴き出し、甘い香りと匂いがした。
「ああぁんッ♡　ひ、ヒカルくぅんっ♡」
先輩が艶めかしい声を漏らす。
（これ、赤ちゃんの匂いっ！）
昂奮しながらチュパチュパと吸いつき、さらに左胸を手で搾る。
左乳首からもすぐにプシャッと水っぽい音がすれば、やっぱり母乳。
左手の匂いを嗅ぐと、ミルキーな香り。
「先輩！　俺、本当に幼児退行しちゃいそうですっ！」
「い、いいよっ♡　わたしの赤ちゃんになってっ♡　だって最初はそうしてあなたにお願いしたんだからっ」
ともみに、よしよしと頭を撫でてもらえる。
しかし赤ん坊になりきれない部分がある。
それは股間。そこは先輩の艶めかしい姿を前にして、いやらしく昂ぶっていた。

ヒカルは、ともみのスリットに男根を押しつけた。
「あっ♡　ひ、ヒカルくんのおち×ぽ、ビクビクしてるねっ。わたしには分かるよっ♡」
「先輩のここも、すごく温かくて……ぬ、ぬるぬるしてるっ」
「ヒカルくんのち×ぽを、わたしの中に入れていいんだよっ♡」
「で、でも……入れ方が……っ」
「わ、わたしも初めてだから手伝うからっ……♡」
「うっ！」
ともみの手が、遠慮がちにペニスに触れてきた。
ビクンビクンとペニスがしなってしまう。
「お、おっきいね……っ♡」
ともみに促され、ゆっくりと入るべき場所に導かれた。
「んっ……♡」
窪みのような場所に至れば、ともみはピクンと肩を跳ねさせる。
「ここなんだ」
たわわな豊乳からミルクをこぼしながら、ともみはウンウンとうなずく。
股間にゆっくりと力を入れながら進む。



「んううっ！」
少し入れにくさを感じながらも、一番奥に達する。
ベッドがギシンギシンと軋んだ。
「あああああっ……ひ、ヒカルくぅんっ！」
プチャプチャと勢いよく母乳がしぶく。
ヒカルはそれを全身で受け止めた。
全身がミルクで、ぽかぽかと温かい。
「先輩、ど、どうですか？　女の人は初めては痛いそうですけど……」
「よ、よく分からないよ。でも痛いって感じはないかも……♡　お腹の辺りがぽかぽかしてて……っ」
「先輩！」
「あああんっ！」
ヒカルは、ともみの爆乳に顔を埋めた。
今度は左乳首だ。ヒカルの全身が母乳まみれになってしまうくらい出たというのに、まるで湧き水みたいにどんどんミルクが出てきた。
「ひ、ヒカルくンっ♡」
ともみがヒカルの頭に両腕を伸ばし、ミルクたっぷりのおっぱいに顔が埋まるくら

い抱きしめてくる。
驚きながらも、ヒカルはせっせと勃起乳首に吸いつき、母乳を出す。
「いいぃっ♡　自分でやっても全然出なかったのにっ♡」
「ぴゅっぴゅっ出ますよっ。先輩のミルクを吸ってると、どんどんいやらしい気持ちになってきちゃいます……っ」
「こ、腰を動かしてもいいよっ♡」
「ほ、本当ですか？」
「うんっ♡」
ヒカルは股間に広がるジクジクとした疼きに急かされるように、腰を動かす。

ともみは胸に吸いつかれるたび、全身に走る痺れた甘美に溺れていた。
これまでおっぱいが溜まりすぎてモヤモヤしていたことが嘘のように、ヒカルに吸ってもらうと、母乳が溢れんばかりに噴き出してしまう。
吸われることで生まれるのは、解放感ばかりではない。
下腹の辺りがキュンと甘く痺れるように疼く。
だからこそ、ヒカルに動いてほしいと言ったのだ。
ゆっくりとヒカルが腰を前後に動かす。

「あああっ♡」
腰を往復され、膣内を掻き混ぜられながらおっぱいを吸われてしまうと、母乳がヒカルの口から溢れた。
「んんっ!?　せ、先輩!?　さっきよりもミルクの量が……っ！」
腰を引かれ、そしてすぐに深い部分にヒカルのペニスが突き刺さるたび、痛みとは無縁な感覚が下腹で弾けた。
（これがエッチの気持ちよさ、なんだ……っ）
母乳を出す時とはまた違う、もっと何かが満たされるような感覚。
自然と膣内が収縮し、ヒカルの股間を締めつけた。
「ううう!?　そんなに締めつけられたら……！」
「ご、ごめんねっ！　で、でもわたしの意思じゃないのっ♡　か、勝手に締めつけちゃうのっ♡」
ヒカルは腰をゆっくりと動かしながら、おっぱいにしゃぶりつく。
「で、出ちゃう！」
股間で深い部分を押されると同時におっぱいを揉みしだかれてしまうと、さらに勢いよく母乳が噴いた。
（これもさっき飲んだ精液のお陰？　そ、それともエッチしてるからっ？）

ともみは泣きじゃくりつつ、陶酔感に陥った。

ヒカルは腰に走る快楽に顔をしかめた。

「先輩、そんなに締めつけられちゃったら長持ちしませんっ！」

「だ、大丈夫だからっ。このまま出してっ♡」

ヒカルは激しく腰を前後に弾ませれば、ヌチャヌチャと繋がっている秘処から生々しい音がこぼれた。

「あんっ♡　あなたのち×ぽが奥を擦ると、おっぱいが溢れちゃうっ♡　も、もっとあそこを掻き混ぜながらおっぱいを搾ってっ♡」

ヒカルは左右の乳首を摘みながら、腰を激しく動かす。

「ミルクが止まらないぃっ♡」

柔らかく、こぼれる蜜でぬるぬるしているヒダ肉で擦られ、腰がヒクヒクした。

「先輩！　俺……もうっ！」

ともみが昂奮すればするほど、膣圧も高まった。

二人の絡み合った場所は、蜜汁でぬるぬる。

「ヒカルくん、きてっ！」

「うおおおお！」

蜜肉の蠕動（ぜんどう）に搾り上げられるがまま、ヒカルはともみの胎内めがけ精液を迸（ほとばし）らせた。

「ああっ♡　あ、熱いのがきちゃうっ♡　ヒカルくんの熱いのわたしの中めがけて……！　イクぅぅぅ♡」

びゅるっ！　どぴゅっ！　びゅぶっ！

ザーメンをどんどん、ともみの膣内に送り込み、ヒカルの頭はクラクラしてしまう。

「せ、先輩……ぃっ」

全身から力が抜け、おっぱいに顔を押しつけるようにしがみつく。

「よしよし、わたしの赤ちゃんっ♡　頑張ってくれてありがとう♡　すごく母乳が出せて満足したわっ♡」

頭を撫でてもらうと、不思議と元気が湧いて起き上がれた。

「せ、先輩のお役に立てたのなら本望ですっ」

腰をゆっくりと抜く。

「きゃっ♡」

ともみが上擦った声を漏らせば、ゴポゴポ……と泡立った精液が逆流してきた。

ヒカルとともみの身体は、精液と母乳と汗でベトベトだった。

「ヒカルくんっ♡」

「はい？」

ともみはそっとほっぺにキスをしてくれた。
「ちゅっ♡」
「先輩っ！」
「これからもよろしくね♡　はい、タオル。しっかりと拭いて。風邪を引いたら大変だから」
「あ、ありがとうございますっ」
ヒカルはキスをされたほっぺを撫でながら、これからもともみのおっぱいが堪能できると知ってだらしない顔になった。

第二章　強気妹の陥没乳首〜あたしの処女、兄貴にあげちゃう♡

すずかが学校の廊下を歩いていると、声をかけられた。
「ねえねえ、すずかちゃんっ！」
クラスメートだ。
「何かしら？」
「すずかちゃんのお兄さんって、吹奏楽部の強豪校に行ったって本当!?」
「まあね」
すずかは小さく肩をすくめた。
「羨ましいなぁ。あたし、吹奏楽のコンサートに行くの大好きで。すずかちゃんのお兄さん、あの業界じゃ結構有名なんだよ？」
「そう？　あたしは吹奏楽に興味ないから」

すずかは、腰まで届く艶々とした黒髪を掻き上げながら言った。
「クールだね、すずかちゃん！　あたしが、ヒカル先輩の妹だったらぜーったいブラコンになっちゃってるのにぃ！」
少しイラッとしてしまう。
（ヒカル先輩とか、慣れ慣れしい）
しかし本性を出さないように努める。
「そう？　家ではただのぐうたらよ」
「そっかぁ。大会のこと聞いたら教えてねっ」
そう言うと、クラスメートは去っていった。
（吹奏楽部ってそんなにいい？　だってたくさんいるうちの一人ってだけなのに……。調子に乗りすぎてるみたいだから、そろそろ活を入れてあげないといけないかも）
すずかはまるで通い妻のように、月一でヒカルの元へ行っていた。

「ふうん、この学校が兄貴のね……」
舐めるような視線で、甲斐すずかは校舎を眺めた。
どこからどう見ても、そこらへんにある学校だ。
（あたしの学校にだって吹奏楽部くらいあるのに……）

しかし確かに校舎には『吹奏楽部、全国大会出場おめでとう！』という垂れ幕が下がっている。
と、周りの学生がちらちらと、すずかを見る。
すずかはとにかく、どこにいても目立つ。
なにせ、身長が百七十センチある。
さらに、我ながら胸が大きい割に形もいいのは自慢で、スタイルだって完璧。
すずかは、そっと学校に侵入した。
と言っても、十代のすずかが怪しまれることはない。
咎められたら、それこそヒカルの名前を出せばいい。
下駄箱で来客用のスリッパに履き替え、校舎内を散策してみる。
土曜日ということもあって、残っている生徒は少ない。
（吹奏楽部が強いって言っても、別に普通ね）
そんな当たり前の感想を抱く。
（兄貴は音楽室よね）
見かけた生徒に音楽室の場所を聞いて向かう。
しかしすでに部活動は終わったらしい。居残っている生徒に聞くと、ヒカルなら練習が終わると、ともみ会長と一緒に出かけたという。

（ともみ会長？）
「あの、ヒカル……さんは、生徒会役員なんですか？」
「違うよ」
「ありがとうございました。探してみます」
教室を一つ一つ覗くが、どこにもいない。
（っていうか、ともみ会長なんていう人、ぜんぜん聞いたことないんだけど）
と、その時、ガタガタという音を聞いて、立ち止まった。
（な、何？）
音の発信地は少し行った先にある教室。
ただ教室というわけではないらしく、他の教室にかけられている『一年一組』などというプレートは見当たらない。
「ヒカルくん……はぁはぁ、く、苦しいよぉ……」
「っ！」
びくっとした。
（え？　ヒカル？）
今のは女性の声。
（ともみ会長っていう人？　兄貴、一体何してるの？）

「ともみ会長、今出ますからっ」
（兄貴！）
驚きながら部屋を覗く。
「っ！」
危うく声を上げそうになった。そこにはなぜか保健室にでもありそうなベッドが置かれ、そこでヒカルとともみがエッチしていたのだ。
ヒカルが、仰向けに寝た会長の胸を握る。
（え、嘘!?）
胸から噴き出したのは白いもの。
（嘘!?　なんで母乳!?　学生が、母乳!?　ま、まさか……あ、兄貴が妊娠させた……？）
ショックを受け、胸が痛くなった。全身から血の気が引いてしまう。
（う、そ……）
それでも二人の姿をスマホで撮影するや、すずかは走っていた。

あれからどう歩いたのか自分でもよく分からないけれど、気付けば、すずかは兄の暮らすマンションの前に来ていた。

それまでの記憶はないが、すでに夕暮れ時。
兄のマンションを見ていると、腹が立ってきた。
（どうしてあんな女なんかと……っ）
静かな怒りを胸に秘めながら、エレベーターに乗り、目的の階へ。
まっすぐ伸びる廊下を歩いて、目的の部屋の前に立つ。
表札を確認して、チャイムを鳴らす。

休日の夕暮れ時。
そろそろメシを食べなきゃなと思いながらも、ベッドから出るのが億劫。
（ともみ会長のお手伝いができたし……）
一体何度、ともみのおっぱいを揉み続けたのか。今でもはっきりと、手には、ともみのおっぱいのまるでマシュマロみたいな柔らかさとほどよい弾力感が残っていた。
と、チャイムが鳴った。
（セールスか？）
ヒカルは、友人にもまだ一人暮らししていることを黙っていた。
友人に言えば、あっという間にこの部屋が溜まり場になることは明らか。
一人暮らしライフを満喫したかったのだ。

覗き穴を見て、ぎょっとした。
「すずかちゃん!?　どうしてここにいるのっ!?」
「……兄貴、開けて」
チェーンを外して鍵を開ける。すずかは無言で部屋に入ってくる。
「すずかちゃん、何かあったの？　顔色、悪いけど……」
「あたしね、ここに来る前、兄貴の学校に行ったんだよね」
「いい学校だっただろ？」
すずかはヒカルの言葉を無視して、スマホの画面を突き出す。
「そうしたら、こんなの見ちゃったんだ」
「っ!!」
スマホの画面に映っているのは紛うことなき、ともみと自分の姿。
「そ、それ……」
「兄貴、まさかここに吹奏楽を頑張るためじゃなくって種付けに――」
「誤解だよ！」
「言うに事欠いて……」
「先輩はミルクが出ちゃう体質なの！　妊娠なんてないから！」
「そんな体質聞いたことがないわ」

「か、かもしれないけど！　俺も初めて聞いたし！　本当なんだよ！」
こんなことが広まったら大変な事態になる。
ヒカルは必死で妹を説得しようとする。
「で、付き合ってるの？」
「え？」
「あの人……ともみ会長とは付き合ってるの？」
「どうしてともみ会長の名前を？」
「兄貴を探してたら、吹奏楽部の人が教えてくれたの。――はぐらかさないでちゃんと教えて。付き合ってるからセックスしてたの？」
「すずかちゃん！　女の子がセックスとか言うのは、はしたないから！」
「……じゃあ、この画像はなに？　付き合ってもいないのに、セックスしてるわけ？」
「嘘じゃない！　でも俺と先輩が恋人じゃないっていうのも残念ながら、本当なんだ……」
すずかは唖然とした顔をすると、こめかみを揉んだ。
「わけが分からなさすぎて、頭痛くなってきちゃった……」
「とにかく先輩には俺が必要なんだ。俺としては先輩の期待にどうしても応えたいっていうか……。頼む、すずかちゃん！　このことは親には内緒に……。なんでもするからっ！」
ヒカルは手を合わせて、頼み込んだ。

一方のすずかは、不満たらたらだ。
（むかつくっ。妹のあたしを差し置いて、赤の他人にそんな献身的に尽くすだなんて）
もちろんそれは自分がヒカルに対してなかなか素直になれない、というのも原因の一つだとは思うけれど。
でも兄なら妹の気持ちに気付いたっていいのではないか。
いつも頼りになる兄だったのに、すずかのことなんて少しも考えないまま、「すずかちゃん、夏休みとか冬休みにはまた帰ってくるから」そんな風にさっさと一人暮らしを決めてしまうなんて。
月一通ってても、ぜんぜん一緒にいる時間が足りない。
（たぶん、ともみ先輩はお兄ちゃんのこと、好きだと思うけど）
あの二人のやりとりを覗き見している時、そんな風に感じた。
（じゃなかったら、ともみ先輩が兄貴に抱かれて、あんなに幸せそうな顔をするはずがないもの）

これはまるでノロケではないのか。
でもヒカルははっきりと、ともみとは恋愛関係にはない、と言った。
たぶん、ともみという人も、自分の気持ちを認識してないのではないか。
（二人そろって、ニブいのかなんなのか……）
でも教えてやらない。
自分を捨てて他の女とよろしくやっているヒカルなんかに。
「本当にあたしの言うこと、なんでも聞いてくれる？」
「もちろん！　すずかちゃんとは血の繋がった兄妹なんだから、嘘なんて絶対につかないから！」
「じゃあちょっと待ってて。呼んだら来て」
「あ、うん……」
困惑するヒカルを置いて、すずかは足早にヒカルの部屋へ入った。
（よしっ）
すずかは覚悟を決めた。

「――入って」
すずかの声が聞こえると、ヒカルは早速、扉を開けた。

「すずかちゃん、一体何をしようと……」
目の前の光景に、唖然とした。
すずかは、下着姿で大きく股を広げるように座り込んでいた。
「すずかちゃん、何してるの!?」
「あたしともセックスしてっ」
「いや！　できないよ！　兄妹なんだよ!?」
「……兄貴がともみ先輩とセックスしてるって、父さんと母さんに言う。あの画像とかメッセージに添付して……」
「それだけは！」
「どうする？　あたしの言うことを聞く？」
「っていうか俺はいいけど、す、すずかちゃんは本気なのっ？」
「え、ええっ、本気よっ。それともあたしがビビってるとでも言うつもり!?」
「ビビってるんだ」
「言う！」
「分かった！　すずかちゃんのお願いを聞く。だから約束は……」
「……守ってあげるわよ」
ヒカルはそっと、すずかに躙り寄った。

と、すずかはピクンと身体を震わせた。
「緊張してる？」
「し、してないっ」
すずかが強がってるのは、明らか。
そのお陰で、ヒカルにも多少余裕が出てきた。
「キス、するよ」
「き、す……っ」
すずかは、首筋を真っ赤にしながら呟いた。
「し、していいわっ」
すずかのぷるんとほどよい弾力感を帯びた唇を塞ぐ。
「ンッ」
小刻みな震えが伝わる。
「怖がらなくていいから」
「……こ、怖がってないぃ……」
舌を這わせると、すずかが「ンッ♡」と上擦った声をこぼした。
「ちゅぴっ♡　んんっ♡　れろっ♡」
ヒカルが舌を這わせると、すずかも不器用ながら応じた。

怖々とした触れ合い。
（すずかちゃんの唇、気持ちいいっ）
全身に鳥肌が立って、ゾクゾクしてしまう。
ともみより唇は薄いけれど、それでも吸いついてくる感触は最高だった。
（ディープキスって気持ちいい……っ）
まさかそれを、実の妹としてるなんて驚きだった。
（それにしても、すずかちゃんの胸、いつからこんなに大きくなったんだろ）
実家にいた時は妹を見ているようで見ていなかったのだと実感した。
（先輩よりは小さいけど、それでも充分すぎるくらいだな……）
我が妹ながら、生唾を呑み込んでしまう。
白のブラを、重たげに押し上げる右胸をやんわりと握った。
「ぁあ！」
すずかは肩を揺らす。
ブラのカップのごわごわした感触の向こうに、豊満な質感を手に覚えた。
（こうして触ると、すごい大きいって分かるっ）
「手つきがやらしいっ……ああっ♡」
「すずかちゃん、ブラを外すよ」

「ん……っ♡」
背中側に手を回し、ホックを外す。
「だめ！」
すずかは胸を両手で守る。
ヒカルは困惑した。
「駄目？　でもそうじゃないとセックス、できないよ？」
「そ、それでも……駄目なものは……っ」
「セックスしたいなら、前戯は必須だよ。濡れてないと痛いだろうし」
「そ、そんなことといちいち言わなくてもいいからっ。こ、心の準備っていうものがあるの！」
「じゃあ、セックスはしなくていいんだね」
「そう言ってないでしょ。や、やるわよっ」
すずかがおずおずと両手を外すとブラが落ち、たわわな乳肉がこぼれた。
ツンと上向いたおっぱいは、ロケットのように突き出している。
が、とあることにヒカルは気付く。
「すずかちゃん、陥没してるんだ」
「……う、ううう」

すずかは恥ずかしげにうつむく。
知らない間に、豊満に育った美巨乳。
その先端の乳首はまるで太った子みたいに陥没していた。
「ごめんごめん。悪口じゃないよ。陥没も可愛いって思っただけだから」
「ぜんぜん嬉しくないんだけどっ！」
「じゃあ、舐めるね」
「いちいち言わなくても……ぁあっ♡」
乳輪をなぞる。
「ンンンンっ♡」
すずかの両方の足指が、きゅっと丸まった。
左右を優しく吸いながら、歯を立てる。
「ち、乳首ないんだからぁっ、そ、そこばっかり責めないで！　なんか恥ずかしいぃっ♡」
「待って。こうすればもしかしたら……」
ヒカルが左右の乳首を優しく吸いつつ、自動販売機のコイン投入口みたいになっている陥没部分を刺激すれば、
「出たっ」

両方の乳首がピンと勃起しながら飛び出した。
「へ？　う、嘘……っ♡　兄貴に舐められて、乳首が飛び出しちゃってるぅ……♡」
すずかは嬉しそうにはにかんだ。
「これですずかちゃんも立派な乳首持ちだねっ」
「な、なにそれぇ……。変な呼び方しないで……ああんっ♡」
右乳をしゃぶりながら左乳首を摘み、くすぐった。
「ひいいいんっ♡」
すずかは、足をジタバタさせながら、身悶える。
そこにさっきまでの強気な態度はなかった。
瞳を潤ませ、腰まで届く長い髪を振り乱す。
二つの膨らみが、ぶるんぶるんと悩ましく波打った。
太腿をすりすりと擦り合わせ、全身を小刻みに戦慄かせる。
「はぁっ、ああっ♡　て、手がやらしいぃっ♡」
「ほんと、いやらしい陥没乳首だな。でもしゃぶりがいがあるっ」
「今は陥没じゃないしぃ♡　ああ♡　い、イジメないで……っ♡」
「こんなに硬くなっちゃって、嫌も何もないだろ？」
「んんんんっ♡」

すずかは全身にじっとりと汗をかく。
おっぱいを入念に揉みしだく。
さらに顔を出したばかりの乳首も、入念に刺激する。
「ひいいんんっ♡　だめっ♡　ち、乳首、コリコリらめぇっ♡」
陥没から飛び出したばかりのせいか、乳首がすっかり敏感になってしまっているらしい。
乳首を少し弄るだけで、すずかが何度も昇り詰めているのが分かった。
「ああっ♡　そ、そんなにおっぱい弄らなくても大丈夫だからっ♡」
「すずかちゃん、ここがいいんだねっ」
（これだけ大きいのに母乳が出ないとか不思議だ）
「ひぁっ、あああああ……っ♡」
すずかはビクビクと痙攣したかと思えば、全身から力を抜いてぐったりする。
「イった？」
「い、いってないっ……ンン♡」
すずかはいやいやと首を横に振ったが、その顔はすっかりだらしなくなってしまっている。
「へえ、じゃあ、これは一体何？」

「ひぃぁんっ♡」
ぐっしょりと濡れ染みの浮いたショーツのクロッチをくすぐれば、すずかはあられもない声でよがった。
「んん……っ♡」
ヒカルの手の痕がつきまくった美巨乳が、ぶるんぶるんと上下に跳ねた。
「こんなにビチョビチョじゃないかっ」
「……あぁ、う、うそぉ……♡」
「こうすれば、もっとはっきりするね」
下着を脱がせれば、長い糸がいくつも引いた。
「いやぁっ♡」
目を閉じたすずかは、いやいやと首を横に振る。
「ここもしっかり捏ねてやらないとっ」
ヒカルはすずかの後ろに回ったかと思うと左腕を握り、乳首を転がしながら淡いピンク色の割れ目を撫でる。
「ひゃあああっ♡　りょ、両方はだめぇっ♡」
強気な妹が見せたのは、悩ましい牝顔。
すずかの秘裂は蜜にまみれ、指先でくすぐればクチュクチュと糸を引くような淫ら

な音が弾けた。
「ひいいいんっ♡　だ、だめっ♡　指でコネコネしないで♡」
すずかは手足をジタバタさせながらも、表面をくすぐる刺激に対して、恥骨をくいっくいっと揺らしながら身悶える。
「すずかちゃん、見て。こんなにビチョビチョにしちゃって。なんてはしたない妹なんだっ」
ヒカルは、すずかの愛蜜にまみれた右手を見せる。
指の間で生々しく糸を引いた。
「いやあっ♡」
「嫌なんて言っても、すずかちゃんのおま×こから出てるんだから」
ヒカルは右手で、秘裂の上の方にある粒に優しく触れた。
「ぁあああああんんっっ♡」
すずかは、たちまち昇り詰めてしまう。
モデルのように長い足を爪先までピンと伸ばしながら、全身をピクピクと痙攣させた。
「いやらしい妹だ。実の兄にクリトリスを触られて、いやらしくよがるなんてっ。育て方を間違えたかな？」

「あ、兄貴に育ててもらってな――ひぁっ♡」
すずかはピクンと反応する。
ヒカルが膣穴の入り口を中指で、そっとタッチしたのだ。
「ここ、入れるよ？」
「あぁっ……♡　んっ……♡　す、好きにすればぁっ♡」
すずかは、湿った呼吸を繰り返す。
右手の中指をゆっくりと挿入する。
クチュクチュッ！
「あ、ああっ……あ、兄貴の指、刺さるぅっっ♡」
第一関節くらいまで入れると、柔らかく蜜でベトベトになっている膣肉でぎゅっと締めつけられた。

すずかはまるで、お腹にとんでもなく大きな異物を挿入されたような違和感に襲われてしまう。
実際はただの中指なのだが、入れられている方からすれば、呼吸をするのも大変だった。
（や、ヤバすぎっ！　兄貴、どうしてこんなあたしの弱いところを分かってるの!?

これも、ともみ先輩のせい!?）
いつもは自分が優位に立っているはずなのに、翻弄されっぱなしだ。
「すごい締めつけてる。すずかちゃんのおま×こ、やらしいなっ」
「っ！」
自然とさらに締めつけてしまえば、指の感触が膣肉に刻まれる。
「やらしくないっ♡　あ、兄貴がやらしいだけで……ひぁっ♡」
指がさらに奥へ押し入れば、あっという間に根元まで埋まってしまう。
「すずかちゃん、見なよ。ぜーんぶ、入っちゃったぞー？」
「う、うそ……っ。兄貴の指が、あ、あたしの中にぃっ……」
不思議な感覚だった。
入ってしまったと思う一方、指を入れられただけで腰全体にじりじりとした焦燥感が生まれてしまう。
ほとんど無意識のうちに腰をくねらせていた。
「すずかちゃん、もしかして動いてほしいの？」
「ち、違う！」
「へえ。腰をクネクネさせてたからてっきり……」
優越感を孕んだヒカルが、憎たらしい。

（さ、さっさと動かしなさいよ！）

入れられただけで、じっとされるとつらい。

「すずかちゃんが『動かして下さい、お願いします、お兄ちゃん』って言ったら、動かしてあげるよ？」

「はあっ!?　ど、どうしてあたしが……ヒャッ♡」

突然、指が抜かれてしまう。

「だ、だめっ！　待ってっ！」

すずかは胸をぷるんぷるんと弾ませながら、ヒカルの右手首を両手で摑み、抜くのを食い止めてしまった。

「じゃあ、言って」

すずかはごくりと生唾を呑み込んだ。

「動かして、くださいぃ……♡　お、お願いしますぅ……♡　お、お兄ちゃん……っ♡」

（言っちゃった……）

しかしそんな後悔はすぐにどうでもよくなった。

ヒカルが指を前後に動かしてくれたのだ。

「ひいあぁんんっ♡」

ただ指を前後に動かすだけではない。

指を曲げて鉤のようにしながら、膣壁を擦るのだ。

身体を突き上げられるような快感に、すずかは兄に背をもたせかかるように、全身をビクビクと痙攣させてしまう。

「は、激しいっ♡　兄貴いっ、そ、それヤバいっ♡　ヤバすぎるぅ♡」

目尻に涙を浮かべるが、それは悲しみではない。

想定していた以上の快感に、感情がおかしくなってしまっているのだ。

「すずか、気持ちいいかっ」

「い、イィッ♡　気持ちいいっ♡　あ、兄貴の指、あたしのいやらしい部分に当たって……ひゃぁ♡　あ、あたし、またぁっ！」

いつまでも兄のもたらす快感を前に、とても平常ではいられなかった。

兄が指を動かすたび、恍惚とした想いがこみ上げる。

「イクッ♡　やだやだっ♡　指で兄貴にグチュグチュされちゃいながら、イクウウウウウッ♡♡」

プシャッ！

勢いよく潮を吹きながら、昇り詰めてしまう。

同時に指が抜かれた。

（あぁっ……今の今まであたしの中に入ってた指ぃっ）

ヒカルが、すずかの顔の前に愛液まみれの右手を見せてくる。

「すずかちゃんの中から、こんなにいやらしいお汁が溢れちゃったんだぞ……わっ！」

すずかは迷うことなく兄の指を咥え、まるで赤ん坊がミルクを吸うようにチュパチュパと音を立てながらしゃぶった。

自分の身体から漏らした蜜汁をまんべんなく味わう。

「れろっ♡　ちゅぴぃっ♡　は～ぁっ♡」

しかし絶頂したとはいえ、まだまだ昂奮の熱気が冷めやらなかった。

「あ、兄貴ぃっ♡」

すずかは、物欲しげな目をヒカルに向けた。

「すずかちゃん、お願いする時はどうするんだっけ？」

「え、エッチ……して下さいぃっ♡　お兄ちゃんのあそこを、あたしの、中に下さいっ♡」

ヒカルに媚びることもぜんぜん気にならなかった。

今は一刻も早く、兄と一つになりたかった。

ヒカルは全裸になると、ペニスを露わにした。

（す、すごい……。デカチ×ポ……）

小さな頃とはまったく違う。

まるでそこだけ、他の人に入れ替えたみたいだった。

皮が剝けて、亀頭冠が露出してビクビクッと戦慄いている。

「さすがに兄妹同士、ナマでするのもアレだしね」

ヒカルは、コンドームを装着した。

「それじゃ、いくぞ、すずかちゃん」

「う、うん……っ。あたし、どうしたらいい？」

「そのまま横になって、おまたを大きく開いて」

すずかは、言われた通り仰向けに横になり、大きく脚を開いた。

さっき兄に散々掻き混ぜられた膣穴がヒクヒクっと戦慄く。

「お兄ちゃん、きて……っ♡」

ヒカルはしおらしいすずかを見て、感動していた。

（すずかちゃんが昔のすずかちゃんに……！）

お兄ちゃんと、よちよち歩きでヒカルに身体を寄せてきた時のことを思い出して、少しジーンとしてしまう。

ペニスを握り、すずかの股の間に身体を入れる。

「お兄ちゃん……ひぁっ♡」
ペニスをすずかの入り口に念入りに擦りつけ、蜜をたっぷりとゴムに馴染ませる。
「じ、焦らさないで……っ♡」
「ごめん。いくよっ」
「ん……っ♡」
すずかの秘処に、ゆっくりと挿入していく。
ヌチャヌチャッ。
「ひうううぅっ！」
さすがに初めてだけあって、全体的に生硬かった。
「すずかちゃん」
「んんっ！」
すずかの唇を奪い、激しく舌を絡めながら、下半身を密着させた。
「ンンンン!!」
一番奥まで達した。
亀頭が、柔らかな膣壁に当たっている。
「はぁっ……♡　ああっ……♡　んふっ……♡　お、お兄ちゃん……っ！」
すずかは首筋までねっとりと紅潮させ、肩を大きく上下させた。



切れ長の瞳は潤み、長い黒髪は扇のように床に広がっている。
「すずかちゃん、平気？」
すずかは少し気怠げな表情をする。
「んんっ……へ、変な感じっ♡　痛いと思って身構えてたのに……っ♡」
「痛くない？」
「ん……っ♡　き、きっとお兄ちゃんがキスしてくれたから、かも」
ヒカルは、すずかの胸を握りしめ、乳首をくすぐった。
「ひぁんっ♡」
「つらかったらいつでも言ってよ」
と、すずかは「ねえ……」と遠慮がちに聞いてくる。
小生意気さは消えていた。
「お兄ちゃんのそのテクって、ともみ先輩から教えられたの？」
「いや、ともみ先輩も初めてみたいだったから」
「なのに、お兄ちゃんに頼むとか、すごくない？」
「それは俺も思った」
二人で笑みを交わすと、すずかは下半身をモジモジさせた。
「動いていいよっ……ううん、動いてっ♡」

「よし」
ヒカルはすずかの乳首をまさぐり、ゆっくり腰を引く。
「ひいいいんっ♡」
すずかは、目元を赤らめながら激しく反応した。
（今の声の具合、気持ちいいってことかっ）
ヒカルはさらに、ペニスを奥へ挿入する。
「ひあぁっ♡　ああんっ♡　お兄ちゃん……！」
ヒカルが腰を前後に動かすたび、たわわに実った乳丘が大きく弾んだ。
乳首が残像を描く。
繋がった部分からは腰を抽送するだけで、ブチュブチュと下品な音が弾けた。
「すずかちゃんのおま×この締めつけもいいよ！　俺のをグイグイ締めつけて……ううっ……すぐに搾り取られちゃうかも……っ！」
腰を動かすたび、温かく狭い肉壺にペニスのあちこちを抉られ、腰がヒクヒクと反応していた。
すずかは胎内を掻き混ぜられ、「ああんっ♡」と身悶えた。
膣内に嵌まった陰茎がビクビクッと戦慄く。

硬く逞しい逸物の感触に、呼吸が上擦った。
「イィッ♡　もっと、もっと動いてっ♡」
「よし！」
ヒカルはこれまで以上に激しく腰を前後に動かす。
さっきまでなんだかんだすずかに遠慮していたみたいだったのに、今では腰を叩きつけ、膣内を蹂躙する。
パンパンパンパン！
「ひゃ♡　ぁああんっ♡　ひいいっ♡」
子宮口を激しく突かれれば、いやらしい声が止まらない。
「ぁあっ♡　は、激しすぎぃっ♡」
息もつかせぬ抽送に、すずかはそれまで以上の快感に惑わされた。
子宮口を押し上げる陰茎が、ビクビクと引き攣った。
すずかの心まで満たされる。
「も、もっとっ♡　もっと激しくして、お兄ちゃんっ♡」
すずかは身体を起こすと、ヒカルにぎゅっと抱きつく。
キスをするような余裕はない。
秘処を貫くペニスが大きく膨れ上がる。

「お兄ちゃん♡」
「す、すずかちゃん！　出すぞっ！　おま×こにドクドク精液を出すからっ！」
「来てっ♡」
快楽が堰を切ったように流れ、舌が回らない。
ビュルッ！　ドピュ！　ビュルルッ！
滾るような迸りを、コンドームごしに感じる。
放たれる勢いも、じっとりと汗ばむような熱気も、ゴムごしとは思えないくらい生々しい。
「イクイクッ♡　お兄ちゃんとエッチしてイクゥッ♡♡」
頭の中が真っ白に塗り潰され、何も考えられないまま、全身を浮遊感に襲われてしまう。
「はぁっ♡　んっ♡　ぁあ……♡　すごぃ……♡」
すずかがバランスを崩すと、ヒカルに支えられたが、その拍子にずるりっとペニスが抜ける。
「ふぁ……お、お兄ちゃん……♡」
すずかは、コンドームに溜まった子種を見る。
「見て。すずかちゃんのせいでこんなに……」

ヒカルはコンドームを外すと、すずかの目の前に突き出した。
「……あぁっ♡」
すずかは熱っぽい眼差しを向けると、ゴクッと生唾を呑み込んだ。
「責任とって精液、飲んで？」
「ふぁいっ♡」
渡されたコンドームにしゃぶりつき、中身をこくこくと呑み込む。
むっとした青臭さと、ドロッとした感触にゾクゾクしてしまう。
（これ、お兄ちゃんの匂いと味。あたしのあそこに出されたお汁……っ♡）
幸せな気持ちになれた。
「すずかちゃん美味しい？」
「美味しいっ♡」
すずかはだらしない笑みを浮かべた。
「もっと飲みたい？」
「飲みたいっ♡」
「だったらもっとエッチなことしないとねっ」
「お兄ちゃん……っ♡」
覆い被さってくるヒカルを、すずかは満面の笑みで受け入れた。

第三章　文化祭で3P祭〜おっぱい止まらなくなっちゃう！

文化祭当日。
晴天に恵まれ、最高の文化祭日和（びより）。
ヒカルは思いっきり伸びをした。
（最高の日になりそうだ）
なんと言っても、ともみのクラスが喫茶店をやるのだから。

数日前、ともみと会った時。
——よかったら、わたしたちのクラスに来てね。喫茶店をやってるから。
——絶対に行きます！　ところで先輩は何を？
——ウエイトレス。

——本当ですか！
期待していただけに、喜んでしまうくらい嬉しかった。
——それに専用のコスチュームも今作ってるから、楽しみにしててねっ。

そんなやりとりがあっただけに、期待もひとしお。
ちなみにヒカルのところはたこ焼きの出店。
「よし、行こうっ」
ヒカルは家を出た。

午後二時。
ヒカルは売り子を友人と代わると、大慌てでともみのクラスへ急いだ。
校舎は来場客でごった返している。
近隣の住人や生徒たちを押しのけ、ともみのクラスを目指す。
（うわ！　すごい人……っ）
行列の最後尾には男子がいて、
「あと、三十分待ちでーすっ！」
と、呼びかけている。

（さ、三十分……）
しかしともみのウエイトレス姿は、絶対に見たい。
諦めて最後尾で待つ。
と、喫茶店の入り口からウエイトレスが顔を出す。
「ともみ先輩！」
自然と笑顔になった。
先輩はフリルのついたカチューシャに、ワンピースに白いエプロンをしている。
スカートやエプロンの裾、袖口にフリルがふんだんに使われて、ウエイトレスのコスチュームというより、ビスクドールの衣装みたいだった。
ドレスのすそは太腿の半ばくらいの長さ。
ともみの白く肉感的な足が見えた。
何より胸の襟ぐりが大きく開いて、深い谷間が強調されている。
どうしたって胸に視線が向いてしまう。
しかしヒカルは理性を総動員して、ウエイトレスコスによってより貞淑度合いが増したともみの笑顔を見る。
「ヒカルくん……いえ、ご主人様。ようこそいらっしゃいました。席を取ってありますので、どうぞ」

（ご主人様……）

ともみからの呼びかけに、感動してしまう。

「ご主人様、さあ」

「は、はいっ」

ともみに促され、羨望の眼差しを向けられながら、教室へ。

窓際の一人用の席に案内される。

教室は半分に仕切られ、教壇側がキッチン——お茶やケーキを用意する場所になっているようだ。

「メニューでございますっ。何になさいますか？」

ともみは知ってか知らずか、前傾姿勢になる。

当然その格好だと、二つのたわわな膨らみが今にも襟ぐりからこぼれんばかりになってしまう。

「えっと、紅茶とチョコレートケーキを下さい……」

「かしこまりました。お待ち下さい、ご主人様」

深々と頭を下げたともみが仕切りの向こうに消えていく。

その間、歩くたびに揺れるフリル、そしてスカートごしにちょっと弾む桃尻の具合が最高だった。

他にも同じ格好の女子生徒はいるものの、

（ともみ先輩が一番だっ）

そう強く確信できた。

しかし、ともみは当たり前だが、ヒカル専属ではないので他のお客さんへの配膳も行う。

家族客はまだしも、大学生風の男子グループに配膳する際は、連中が気安くともみに話しかける姿に、イラッとしてしまう。

ともみのおっぱいをめちゃくちゃにするのは自分だ——そんな思いがあるせいだろうか。

しかし、ともみは下ネタトークをふっかけてくる客をお客を簡単にあしらう。

（さすがはともみ先輩！）

こういう状況だと、ともみと恋人でないのが心底悔やまれてしまう。

ともみの搾乳のお手伝いをしているとはいえ、自分たちはあくまで恋人ではない、先輩後輩の仲。

（……悲しいぜ）

そんな悲しみに暮れていると、

「ご主人様、お持ち致しましたっ」

ともみが注文の商品を持ってきてくれる。
「ありがとうございます」
「……楽しんでね」
ともみがこそっと囁いてくれる。
「先輩、おっぱいの方、どうですか？」
「うん、今のところ大丈夫。ありがとう」
「あ、あの、先輩……！　先輩の仕事が終わったら一緒に回りませんか？」
ともみは微笑んでくれる。
「喜んで」
「じゃあ、またあとでね」
ヒカルはテーブルの下で、軽くガッツポーズをした。

ヒカルが店を出て、人気（ひとけ）のない場所で待っていると足音が近づいてきた。
「ヒカルくん、お待たせっ」
「先輩!?」
さすがにびっくりした。
ともみはなんと、あのウエイトレス姿のままだった。

走ると余計に、胸元から豊満なおっぱいがこぼれそうになる。
「その格好……」
「ヒカルくん、この格好が好きそうだなって思ったんだけど……違った？」
「ぜんぜん違いません！　う、嬉しいですっ！」
ともみは微笑む。
「よかったっ♡　それでどこに行くの？」
「えっと、軽くこの辺りを見て回ってみようかと」
ヒカルがプログラムを見せると、ともみが覗き込んだ。
「っ！」
もうすでにエッチまでしているというのに、ちょっとしたともみの香りを嗅ぐだけでどぎまぎしてしまった。
「それじゃあ、行きましょう」
「は、はい！」
今さら緊張してしまうのだった。

まずは射的。
五メートルほど先の景品に、コルクでできた弾を当てれば賞品ゲット。

当たり前だが、突然入ってきたウエイトレス（露出過多）なともみの姿に、お客や店員もドキッとしたらしい。

一方、ともみはそんな周囲の反応には気付いていない。

「まずは俺がっ！」

ヒカルは袖をまくった。

「ヒカルくん、頑張ってっ」

「先輩、何が欲しいですか？」

「わたしのことはいいわ。ヒカルくんが好きなものを……」

「いえ、先輩に何かプレゼントしたいんですっ」

「そ、そう？　えーっと……。それじゃ、あの招き猫のキーホルダーがいいかな？」

「了解っ！」

ヒカルは銃を右手に、ぐっと身を乗り出して引き金を引く。

しかし、十センチほど向こうに弾は飛んでしまう。

「あー……。よし、今度こそっ！」

弾は全部で五発だが、すべて外してしまった。

「すみません、先輩……」

「よし、次はわたしの番っ」

「先輩、射的やったことあります？」

「実は初めてなの」

「だったら俺が教えます。こー、右手に銃を持って、こうして身を乗り出させるようにしてー……」

「こうね」

「そーそー。姿勢、いいです――」

ヒカルははっとした。

ともみが身を乗り出すと、自然とスカートがずり上がり、下着が見えそうになってしまう。

ちょうど、ともみの後ろには順番待ちの男たち。

ヒカルはともみの背後にさっと回り、目隠しになる。

男たちが舌打ちする。

「やったっ！」

ともみが歓声を上げる。

「おめでとうございまーすっ！」

店員が招き猫のキーホルダーを、ともみに渡す。

「ヒカルくん、やった！　ヒカルくんの教え方がうまかったからよ！」

「先輩、おめでとうございますっ！」
「ありがとう。それじゃ、ヒカルくんにあげる」
「いえ、俺はいいですっ。先輩が欲しいものですし……」
「でもヒカルくんが教えてくれたから取れたんだから。ね？」
「あ、はい……。ありがとうございます」
ヒカルは礼を言って、カバンの肩紐部分にキーホルダーをつけた。

それから運動場に出ている店を冷やかした。
屋台にあるようなものは、一通り揃っている。
ヒカルとしては、ともみに何か奢ってあげたいと思っているのだが、さっきの射的と同様、ともみに奢られてしまった。
「先輩、俺が奢っても……」
「それは駄目。後輩に奢らせられないわ」
こんな感じだ。
それでも文化祭を恋人ではないとはいえ、女性と一緒に回れて嬉しかった。
「賑やかでいいね。こういう雰囲気、好き」
「俺もそうです。縁日とかもウキウキしちゃって」

「分かるわ。わたしも朝から浴衣を選んでるもの」
（先輩の浴衣姿……）
ヒカルはともみの浴衣姿を思い描いて、少し昂奮した。
（是非、見たい！）

運動場の一角に設けられた飲食コーナーで、食事を済ませる。
「先輩、俺、喉渇いたんで何か買ってきます。先輩は何がいいですか？」
「……」
「先輩？　どうしたんですか？」
ともみはうつむきながら胸を押さえ、息を荒くしていた。
「先輩!?」
「……ヒカルくん」
ともみが顔を上げる。
頬が熟れたリンゴみたいに、真っ赤だ。
「……ひ、ヒカルくん。ごめんなさい……。わ、わたし、おっぱいが……」
「本当ですか!?　それじゃあ、こっちに！」
ともみの手を引き、校舎裏へ。

今日はいい天気だが、この辺りは日陰のせいで、ジメっとしていた。
先輩を座らせる。
「先輩……っ」
ともみは眉間に皺を刻み、悩ましい顔をしている。
「はぁっ……♡　んんっ♡　ヒカルくん……お、お願い……っ♡」
「失礼しますっ」
ヒカルは窮屈そうな胸元を、開放した。
「ぁああっ♡」
たわわな豊乳が暴れながら、こぼれ出る。
ミルクが溜まって、パンパンにはちきれんばかり。
乳首も、いつもより勃起しているように見えた。
「やっぱりおっぱいは揉んだだけじゃ、出ませんか？」
「え、ええ……っ。やっぱりあなたの精液が欲しいの……っ」
（っ！）
ストレートな言葉に、ドキッとしてしまう。
苦しんでいるはずなのに、ヒカルはともみのその悩ましい表情に、思わず劣情を覚えてしまう。

ズボンが窮屈になった。
「先輩っ」
ズボンと下着を脱ぎ下ろし、ペニスを解放する。
青筋を浮かべ脈打ちながら、反り返った。
「あぁ……っ♡」
ともみは大きな口を開け、ペニスを咥えた。
「ううっ！」
中腰姿のウエイトレス姿は一層、エッチだ。
「んちゅっ♡　ちゅぴぃっ♡　ぁあっ……ヒカルくんのここ、すごくビクビクして震えちゃってるね♡　気持ちいいの？」
「も、もちろんです！　だって先輩にしゃぶってもらってるんですからっ」
可憐な唇と舌による愛撫に、腰がガクガクしてしまう。
ともみの小さな手が、ゴツゴツしたペニスを握りしめてくれる光景にも、昂奮を禁じ得なかった。
ともみの口の中で、ペニスがビクンビクンと戦慄いてしまう。
「んん……♡　わたしの口の中で、ヒカルくんがビクビク暴れちゃって……♡　可愛い……っ♡」

ペニスを頬張るともみ。
彼女が「ンッ、ンッ」と喉を鳴らしながら、身体をゆっくりと前後に揺らせば、豊満な乳房がたぷったぷっと揺れた。
「んちゅっ♡　れろっ、れろっ♡」
「先輩っ」
亀頭冠を舐り回される肉悦に、膝がガクガクしてしまう。
「な、なあに？」
「おっぱいを揉んでいいですかっ」
「え、ええ……っ♡　お願い……♡」
ヒカルは右胸を握りしめる。
力いっぱい握っても、ともみが悦ぶのをこれまでの経験で分かっていた。
「ンンンンッ♡」
ともみの唇が、きつく窄まった。
イってしまったらしい。
ともみの柳眉がたわみ、瞳が切なげに濡れた。
しっとりと汗に濡れたおっぱいが手の平に吸いつき、気持ちいい。
まるでマシュマロみたいにふにゅふにゅと柔らかいのに、指を食い込ませると気持ちいい弾力感が返ってくる。
「淫乱ウエイトレスさんのフェラチオ、最高ですっ！」
「あ、ありがと……っ♡」
おそらく男性客の大半が頭の中でめちゃくちゃにしていたであろう、ともみのおっぱいを好きにできている優越感。
さらに左の乳房も同じように、左手で弄ぶ。
「ンンゥゥッ♡」
ともみが鼻にかかった声をこぼす。
柔らかいおっぱいの中にあって、痛そうなくらいカチカチになった乳頭。
そこを指先で摘みながら、搾り上げる。
「んんんっ♡　ひ、ヒカルくん、おっぱい激しいぃっ♡　ま、ますますあそこもピクピクするぅ♡」
ともみは恍惚とした顔をする。
しかし、舌や唇はしっかりとペニスを刺激し続けていた。
「先輩！　俺、出ます！」
肛門を締めても、こみ上げる放出感を止められない。
「だ、出してっ♡」

ともみの口内めがけ、子種を迸らせた。
ビュルルルッ！　ビュルウッ！
「ンンンンンン!!」
ともみは、子種をごきゅっごきゅっと喉を鳴らして飲んでくれた。
ヒカルも射精の余韻で乳房を鷲摑めば、プシャアアアッ！　と勢いよく母乳がしぶきを上げた。
「あああああっっ♡　お、おっぱいたくさん出ちゃうぅぅっ♡」
母乳が勢いよく飛び散れば、真っ赤な乳首が白く濡れた。
「ああぁ♡　ひ、ヒカルくん……っ♡　あ、ありがとぉっ♡」
ともみは大きく肩で息をした。
その時、人の気配を感じてそちらを見た。
「すずかちゃん……!?」
そこにいたのは、妹のすずかだった。

「――ちょっと兄貴……何してるの？」
ともみははっとして胸を隠す。
「どうしてすずかちゃんがここに!?」

「文化祭だから遊びに来たの。連絡入れたでしょ？」
「あ……忘れてた……」
「もうっ。ぜんぜん返信ないし。兄貴たちを見つけたから、あとを追いかけてきたの。そしたら……」
すずかは思いっきりため息をついた。
「でもこんなたくさんの人がいる日にするなんて、危なすぎない？」
ともみがやんわりと言う。
「わたしがどうしてもって、ヒカルくんにお願いしてしまったの……」
「あなたがともみ先輩？」
「桜沢ともみ、です……。こんなところで自己紹介なんてごめんなさい」
「妹のすずかです」
ヒカルが言えば、すずかは頭を下げる。
「ともみ先輩。実はすずかちゃんは俺が先輩のおっぱいを搾ってる現場を見ちゃったみたいで。俺たちのことを話したんです」
ともみは頭を下げる。
「すずかちゃん。お兄さんにはお世話になってます」
「こちらこそ……ってか、兄貴、ズボン穿いてっ」

「ごめんっ」
ヒカルは、いそいそとズボンを穿き直す。
ともみも胸をしまう。
「兄貴、ともみ先輩。そういうことを楽しめる場所がありますよ？」
「ど、どこ？」
ヒカルが聞くと、
「ついてきて」
すずかは歩き出した。
ヒカルとともみは、顔を見合わせながらもあとをついていく。

到着したのは、体育館。
「体育館を丸々使ったお化け屋敷をしてるの。ここなら、ね？」
「ここならって、ここで何をするの？」
ともみも不思議そうな顔をする。
係員に案内されて、体育館の中へ。中は本当に真っ暗。
ヒカルが、ともみに話しかける。
「ともみ先輩、お化け屋敷はどうですか？」

「あんまり得意じゃなくって……」
「何かあったら俺にしがみついていいですからねっ」
「あの、ヒカルくん……っ」
ともみは、ヒカルの耳元に囁く。
「……実はまだ出し足りないの」
「分かりました。任せて下さいっ」
「ごめんなさい。気を遣わせてしま……きゃっ」
「先輩!?」
「い、今……顔に冷たいものが……」
ともみの声に目を凝らせば、糸でぶら下がったこんにゃくだった。
「安心して下さい。ただのこんにゃくですから」
「そ、そうなんだ。ごめんなさい。驚かせてしまって……」
「いいんです」
「――兄貴。さっさと行くわよ」
すずかが、先を促してくる。
「すずかちゃん、機嫌悪い？」
「別にっ。こっち」

すずかは、暗幕を堂々とめくった。
「すずかちゃん!?」
暗幕の向こうは、体育館の角に当たる。
すずかが、ヒカルに抱きついてきた。
「すずかちゃん!?」
「……ここなら、安心してできるよね、兄貴っ」
「他のお客さんだっているんだよ……」
「大丈夫。ちゃんと声を我慢すれば。——ね、先輩」
すずかに呼びかけられたともみは、うつむく。
「……ヒカルくん、お願いできる……？」
「はいっ。先輩の頼みでしたら」
「あたしの頼みはどうでもいいわけ？　——まあ、いいけど。それじゃあ、あたしもお願いね、お兄ちゃんっ」
すずかは、スカートをめくってみせた。
暗い中でもその白いショーツや、きゅっと引き締まったお尻はよく見えた。
そして先輩も、すずかの右に並び、同じようにスカートをめくれば、ぽよんとした大きなお尻がのぞく。

背後で人の気配。仕掛けで驚いた女子の悲鳴。
（この騒がしさならいけるか？）
「まずはともみ先輩からどうぞ」
「んっ……♡　ご、ごめんなさい、すずかちゃん……っ」
逆ハート形のともみのお尻を、むんずと握りしめる。
「んん……っ♡」
ともみは右手で口を塞ぎ、喘ぎを押し殺した。
「パンツ、脱がしますね？」
「んっ……♡」
ともみの同意を確認すると、下着を下ろしていく。
つーっと糸が伸びた。
「先輩、もう準備万端なんですねっ」
「……い、いやらしい女の子でごめんなさい……。あ、あなたのを舐めていたら、身体がいやらしく火照って……っ」
ともみは、本当に罪悪感を抱いているようだった。
「謝らないで下さい。それ、俺に対する褒め言葉ですからっ。——それじゃあ、胸の方も……」

ヒカルが、ウエイトレスコスの胸元を下ろそうとすると、すずかが興味津々で近づいてきた。
「すずかちゃん、どうしたの？」
「兄貴が日頃から褒めてる先輩のおっぱいはどんな感じかなーって……」
「す、すずかちゃん!?」
ともみははっとして、恥ずかしそうにモジモジする。
「先輩、やめますか？　でもそうしちゃうとおっぱいが……」
「だ、出して。お願い……っ♡」
ヒカルは、おっぱいを丸出しにした。
ぶるんぶるんと二つの膨らみが弾みながらこぼれる。

（どうせ大きい大きいなんて言ったって大したことは……って、デカ!?　う、嘘でしょ!?　あれはメロン？　スイカ？）
あまりの大きさに驚いてしまう。
すずか自身が胸の大きさ、形の綺麗さには自信があっただけに、ともみへの驚きはひとしお。
ともみが恥ずかしそうにモジモジするたび、二つの膨らみが悩ましくぶるっぶるっ

と弾んだ。
同じ女のすずかまでいやらしいと、思わず生唾を呑み込んでしまう。
（あ、あれ？）
暗闇に慣れた目で見たのは、こぼれ出たおっぱいの乳首から垂れる雫。
（もしかして母乳……？）
一方、ヒカルはそのおっぱいをむんずと握れば、弾んだおっぱいからプシャッとミルクがしぶく。
「あぁっ……♡」
思わずと言った風に、ともみが身悶えた。
「さっきの精液の効果、残ってるみたいですね」
「あぁ、そ、そうみたい……っ♡」
ともみは身悶えながら、ちらっちらっとすずかを気にしている。
「すずかちゃん、先輩が恥ずかしがってるから……」
「あたしも協力するっ」
「えっ」
ヒカルとともみは、同時に声を上げてしまう。
「ほら、お兄ちゃんはエッチに専念して。あたしがおっぱいを出すのをお手伝いする

から……っ」
「す、すずかちゃん、わたしのことは……」
「そうだよ、すずかちゃん。先輩のおっぱいはすごく繊細……」
「ぁあっ♡」
すずかが問答無用とばかりに左のおっぱいに吸いつけば、口の中いっぱいに温かくほんのりと甘いミルクがこぼれた。
「んんんんっ!?」
すずかは、目を白黒させてしまう。
口の中に溢れるさらさらしたものを、呑み込んでいく。
(せ、先輩のミルク、本当に飲んじゃってるんだっ!)
「す、すずかちゃんの舐め方、いやらしいよぉ……っ♡」
ともみが恥じらう姿も、もっとイジワルしたいという気持ちに火をつけた。
「先輩ってエッチなんですね」
「えっ」
「こんなに大きなおっぱいを揺らしながら、ミルクを出して……。それなのに、処女みたいに初々しい雰囲気で。男の人が好きそうなタイプ」
すずかは挑発しつつ、乳首を甘噛みする。

「ひぃぃぃ……♡」
ともみが大声を上げかけたので、慌ててすずかは口を手で押さえる。
すると、暗幕の向こうから声。
「あれ? 今、なにか聞こえた?」
「そう? ……気のせいじゃない?」
「そっかぁ。まあ、みんなキャアキャア言ってるしねー」
声が遠ざかっていくと、すずかはほっと胸を撫で下ろした。
「先輩、見つかったらとんでもないことになっちゃいますから」
「ご、ごめんなさい……っ」
ともみは涙ぐみながら、鼻をスンスンと鳴らした。
「先輩、俺、そろそろ入れますっ」
ヒカルが言う。
(兄貴のあそこ、でっかい……っ。あんな大きいのがあたしの中に入ったんだ……)
下品とは自覚しながらも、生唾を呑み込んでしまう。

ヒカルは女性二人のやりとりにドキドキしつつ、後背位の格好で脈打つペニスを秘裂へ押し当てた。

「あぁっ♡　ひ、ヒカルくん、そのままお願い……っ」
ともみは声を上擦らせながら、独りごつ。
ともみの割れ目は熱気をたたえながら潤み、ペニスの気配を察知するとヒクヒクといやらしく戦慄いた。
ヌチャッ。
「んううぅっ♡」
ともみが肩をぴくっとさせながらも、喘ぎを殺すように下唇を噛んだ。
ズブズブッと、ペニスを行き止まりまで呑み込ませる。
「ンンンンンン……♡」
ともみは、緩く弓なりに背中を曲げると身悶えた。
ぬるぬるの肉の輪っかが収斂（しゅうれん）して、男根を食いしめてくる。
同時に、プチャッと母乳が噴く。
それを受け止めるのは、すずか。
「先輩ってば、おっぱいが止まらないみたいですねっ♡」
「う……先輩、締めつけがすごいっ」
「あぁっ♡　い、言わないでぇ……♡」
胸をぶるんぶるんと弾ませながら、ともみはますます身悶える。

（もしかして先輩、いつも以上に気持ちよくなってる？）
それはこの声を出してはいけないという状況のせいか、それともさっきから挑発的な態度を取り続けるすずかのせいか。
どちらにしろ嫉妬してしまう。
（先輩を気持ちよくするのは俺だっ）
妹に対する妙な対抗心が芽生えた。激しく腰を動かす。
「ひ、ヒカルくぅんっ⁉」
ヒカルは腰を打ちつけながら、おっぱいを揉みしだく。
そのたびに、こぼれる母乳が両手をいやらしく濡らした。
「あぁっ♡　ぁああっ♡　だ、だめっ♡　ヒカルくぅんっ♡　同時に責められたら、感じすぎちゃうっ♡」
ともみが精いっぱい、快感をこらえようとする健気な姿が、ヒカルの劣情をくすぐる。
肉棒でさらにともみの膣内を抉れば、その反応に合わせておっぱいが弾み、母乳が溢れた。
「お、おっぱい止まらなくなっちゃう……♡」
「大丈夫ですよ、溢れたおっぱいはどんどんあたしが飲んであげますから」

すずかが、妖しい笑みをたたえた。

「ふ、二人とも、ゆ、許してぇ……♡」

ともみは二人からの責めに、身悶え、どうしようもなく感じてしまう。

誰に見つかるか分からない状況なのに、声を我慢しなければいけないのに、こぼれてしまう。

さらにヒカルの男根もともみを追い込もうと、激しく動くのだ。

「ああっ♡　ヒカルくんのち×ぽ、突き刺さっちゃう♡　アアアッ……こ、声、出しちゃいけないのにぃっ♡」

「先輩、声は出さずおっぱいを出して下さいね」

ヒカルがさらに腰の律動を激しくしながら、おっぱいが瓢箪（ひょうたん）みたいな形になるくらい握りしめてくる。すずかは頬を染め、いやいやとかぶりを振った。

「そ、そんなに激しくされちゃったら、わたし、もう……っ♡」

敏感におっぱいをしゃぶられ、子宮口を痛いくらい突かれてしまっている。

こんな状況で抗うのは、ともみには無理な話。

こみ上げる激情と比例するように、胸がさらに疼く。

（おっぱい、たくさん出ちゃう……♡）



「あぁっ♡　イク、イクッ、イくうう……ンンンンンン……♡」
ヒカルはともみの口を押さえつつ、中にドロドロの精液を流し込んでくる。
（イクイクイ、クゥゥゥッ♡♡）
同時に、これまで以上におっぱいが激しく噴き出した。
「きゃっ」
その勢いの強さに、すずかは尻餅をついた。
彼女はすっかり、ミルクまみれ。
「ふぁっ……♡　ぁああっ……♡」
絶頂と搾乳の両方を体験したともみは、心身共にぐったりしてしまう。
にゅるんっとペニスが抜ければ、身体を支えてくれている芯がなくなって、崩れ落ちてしまう。
（い、今の気持ちよすぎちゃうよぉ……♡）
肩で息をしているともみの目の前で、すずかがヒカルに抱きつく。
「あ、兄貴……っ♡」
胸をしきりに押しつけ、発情顔をさらす。
「すずかちゃん、ここではまずいよ……っ」
「ど、どうして？」

「だって準備が……」
「それなら大丈夫。ちゃんと持ってるから、コンドーム」
すずかは、ヒカルのいきり勃ったペニスに、ゴムをはめる。
一方のすずかは、いつの間にかスカートやショーツを脱ぎ捨てて、あられもない格好だった。
「兄貴、きてっ」
「いくぞ」
ヒカルがすずかを貫く。
「んんんんん……っ♡」
すずかはヒカルに抱きつき、幸せそうな顔をする。
「あぁっ♡　兄貴のが深いところまで来てくれるぅぅっ♡」
兄妹でエッチする二人の姿に、ともみの秘処はジクジクと疼いてしまう。

すずかは、ヒカルの身体にマーキングするみたいに身体を擦りつけた。
「すずかちゃん、先輩のミルクの匂いがするねっ」
「う、うん♡　先輩のミルク浴びたからぁ♡　す、すっごくいやらしかったよっ♡」
「今のすずかちゃんも充分すぎるくらいエロいよっ。それに、すずかちゃんのあそこ

もベチョベチョに濡れちゃってるし」
「あ、兄貴っ♡　貫いてっ♡　あたしを貫いてっ♡」
すずかは、腰をくいくいと前後に動かす。
膣肉がざわめきながら、ヒカルの男根に絡みつく。
ゴムごしでも腰が抜けそうになるくらい気持ちよかった。
ヒカルは、すずかの服をたくし上げると、ブラに包まれたおっぱいを露わにするや、下着も取り払う。
メロンサイズの大ぶりのおっぱいが、ぶるんぶるんと弾みながらこぼれ出た。
汗をかいているせいか、甘酸っぱい匂いがした。
「いやらしいおっぱいだね、すずかちゃん」
ヒカルはおっぱいに吸いつく。
「ンゥッ……♡」
硬い乳首が、ヒカルの口の中でますますいやらしく戦慄いた。
「あ、兄貴、誤解しないで♡　あ、あたしぃ、ミルク出ないけど失望しないでっ♡」
「こんなにいやらしい妹で、お兄ちゃん、心配だよ」
「も、もっとち×ぽ、ちょうだいぃっ♡　あたしのおま×こ、兄貴のチ×ポでグチャグチャにしてぇっ♡」

腰を叩きつけ、すずかの膣内を蹂躙する。
パンパンと音を響かせるたび、愛蜜の飛沫が弾けた。
「気持ちいいっ♡　兄貴ぃっ♡」
すずかはますますペニスを締めつけ、悦に入る。
と、ヒカルは視線を感じてそちらを見る。ともみだった。
「ともみ先輩、見て下さいっ。すずかちゃんの乳首」
「っ！」
すずかははっとして胸を隠そうとするが、すかさず子宮口を突き上げた。
「〜〜〜〜っ♡♡」
すずかは、綺麗な黒髪を振り乱しながら、絶頂した。
その間に、ともみが乳首をしげしげと見れば、
「あ……そ、その乳首……」
はっとした顔をする。
「陥没乳首なんです。先輩のとは全然違うでしょ？」
「え、ええ……」
「だ、だめ、先輩、見ちゃだめえっ♡　それは兄貴にしか見せないのぉっ♡　見せられないからぁっ♡」

「でも可愛いと思うわ。すずかちゃんにピッタリ」
「ちょ、ちょっと先輩、それどういう――ひっ♡」
ヒカルは乳首に吸いつくと、舌を穿るように動かす。
「先輩、見てて下さい。陥没乳首もこうしてやれば……」
弄くってやれば、両方の乳首があっという間にピンッと勃起した。
「すごい……っ」
ともみは、本当にびっくりしている。
「ち、乳首、先輩の前でムキムキらめえっ♡」
すずかは再び、呆気なく昇り詰めた。ますます膣肉が締まる。
「すずかちゃんはドMだからこういうの喜ぶんですよっ」
「兄貴……っ♡　あ、あたしぃ……っ♡」
「俺もそろそろ……っ」
「イクゥッ……♡　兄貴、イっちゃうぅっ……♡」
すずかが背中に爪を立てた。
「出るっ」
呻くと同時に、樹液を注ぎ込む。
「んんんん……イクウウウウッ」

すずかは陥没乳首を弄られながら、派手に絶頂を遂げた。
ゴムごしの射精はヒカルとしては物足りないが仕方ない。
「ぁあっ……♡　兄貴ぃ……っ♡」
すずかはうっとりとした。
「……すずかちゃん、すごくエッチだったね」
ともみがそう呟いたが、絶頂したすずかの耳には入らないようだった。

文化祭が終わると、すずかはうーんと伸びをした。
「最高の文化祭だったね♡」
余裕そうなすずかを尻目に、ヒカルとともみは少々ぐったり。
「すずかちゃん、もうあんなことは……。心臓に悪いよ。ね、先輩」
「え、ええ。そうね……」
「へえ。二人は楽しんでいるように見えたけど？」
「い、いや、それは」
ヒカルが慌てる一方、ともみは恥ずかしげにうつむいてしまう。
そんな二人を、すずかは面白そうに眺めるのだった。

第四章　二人きりの体育祭〜用具倉庫で特別競技おっぱい搾り

晴れ渡る空の下、体育祭が行われる。
昼花火が打ち上げられ、朝から保護者たちが集まって賑やかだ。
まるで夏のような陽気で、軽くストレッチするだけでも全身が汗ばむ。
「先輩！」
ヒカルは本格的に競技が始まる前に一度挨拶しておこうと思い、生徒会のメンバーが勢揃いしているテントに向かった。

「ヒカルくんっ」
ともみと二人きりになる。ともみは体操着と紺のハーフパンツ姿。
ハーフとはいえ、ともみの肉感的な太腿に目が向く。

そして柔軟性のある体操着のせいで、先輩のおっぱいの形が服ごしにもバッチリ見えてしまっていた。
正直、本当にブラをしているのだろうかと変な心配をしてしまうほど。
ともみの姿に見とれているのは、ヒカルだけではない。
他の男連中まで、チラチラとともみを見ている。
しかしともみはそんないやらしい視線には気付いていない。
「ヒカルくんはどの競技に出るの？」
「俺は個人で出るのは借り物競走くらいです。あとは団体競技で……。先輩は何かするんですか？」
「ううん、わたしは運営。借り物競走、頑張ってね」
先輩からそう言われれば、やる気が出る。
「がんばります！」
「ふふ、ヒカルくん、元気ね」
「……ところで先輩。おっぱいの方はどうですか？」
「う、うん。今は大丈夫」
「つらかったらいつでも呼んで下さいねっ。俺、そっちの方も頑張りますから！」
ともみは頬を染めながら、こくりとうなずいた。

「……うん、お願いね」
というところで、最初のプログラムの準備を知らせる放送がかかった。
「じゃ、先輩っ。またあとで！」
ヒカルはともみに別れを告げて、走り出した。

いよいよ、ヒカルが参加する借り物競走の順番になる。
ヒカルが所属する青組から、応援の声がかかった。
しかしヒカルはといえば、ともみにいいところを見せたいと思って、生徒会のテントばっかり気になってしまう。
「よーいっ」
パンッとピストルが鳴るや、ヒカルは駆けだした。
どうにか一番先に、借りる物の書かれた紙を拾う。
紙を開いてお題を確認する。
「っ！」
そのお題に呆然としている間に、他の走者たちはどんどん散らばっていく。
（よ、よし！）
ヒカルは、生徒会のテントに駆け込んだ。

「ヒカルくん？」
「先輩、お願いします！」
「う、うん……！」
ともみは戸惑いながらも、承諾してくれる。
一緒に走り出す。
ちらっと、ともみを振り返る。
（す、すごい……っ）
思わず生唾を呑み込んだ。
一生懸命走ってくれるともみ。
そんな彼女の胸も、彼女の走りに合わせてぶるんっぶるんっとダイナミックに大きく弾んでいた。
（これはある意味、暴力的……）
ヒカルは股間が痛くなるのを感じながらも、走り続ける。
そして無事、一番にゴールを切った。
係員に紙を渡して、ともみを示す。
「……お、オッケー、です……」
係員はぎこちなく言った。

「ねえ、ヒカルくん。お題はなんだったの？　生徒会長？」
「えーっと……これを」
ヒカルはともみにおずおずと紙を見せた。
『ママ』
そこにはそう書いてあった。
ともみは耳まで真っ赤にした。
「ヒカルくん!?」
「すみません、先輩っ！　今日、うちの親は来てないし。ママで思いつくのは先輩が言ってくれた『わたしの赤ちゃんになって下さい』って言葉だったもので……。最近はおっぱいもよく吸ってますし」
「もうヒカルくんってば……。でもあなたのお役にたてたのならよかったわ……。いつもはお世話になってばかりだし」
物分かりのいいともみに助けられ、ヒカルはほっと胸を撫で下ろした。

昼休みを迎える。
クラスの大半が親の元へ向かう。
ヒカルは人気のない場所で、昼食用に買ったコンビニパンでも食べようかと思って

場所探しをしていると、
「ヒカルくん！」
声がかかって振り返れば、ともみだった。彼女はバスケットを抱えている。
「先輩、どうしました？」
「今日のお昼はどうするの？　ご家族、来てないのよね？」
「えーっと、どこかでパンでも食べようかと」
「もし一人で食べるなら一緒に食べない？」
「いいんですか!?」
「うちも親が来てないから。一緒に、ね？」
「嬉しいです！」
適当な場所を探して、一緒に食事をする。
「それにしてもそのバスケット、一人で食べるには少し……ってか、だいぶでかくないですか？」
「たくさん作りすぎちゃって」
ともみはちらっと舌を出す。
バスケットにはたくさんのサンドイッチに、タコさんウィンナーに玉子焼き、唐揚げなどボリュームいっぱいだった。

「ヒカルくんもどうぞっ。わたしだけじゃ食べきれないし」
「ありがとうございます！」
ヒカルはサンドイッチをいただく。
具はタマゴだ。
「他にもサンドイッチはシーチキンとか野菜とか、色々あるからね」
「はいっ！」
「ふふ。ヒカルくんってば。そんなに詰め込まなくても、サンドイッチは逃げないよ？」
「分かってるんですけど、美味しすぎて手が止まらないんです……っ」
「そう言ってくれると、嬉しいわ」
ともみもお上品にサンドイッチを食べ始める。
微笑ましい姿を見ているつもりが、目線は自然とともみの胸に。
ちょっとした仕草にも、おっぱいはまるでヒカルを挑発するように揺れた。
（やばい。今すぐ先輩のおっぱいを握りしめて、めちゃくちゃにして、たくさんの母乳を搾りたい……）
「――ヒカルくん」
「へ、変なことは何も考えてません……！」

ヒカルは馬鹿みたいに動揺してしまう。
ともみはきょとんとした顔をした。
「ん？　そうじゃなくって、ここ」
ともみが右の頬の辺りを示す。
「ここが、ですか？」
「あー、そっちじゃなくって……。ちょっとごめんね」
ともみが身を乗り出せば、すぐ目の前に迫力満点の美巨乳が迫った。
というか、少しおっぱいが顔に当たった。
「はい、取れた」
ほっぺから取ったタマゴのかけらを、ともみはぱくっと食べる。
「……あ、ありがとうございます」
ともみからは、ほんのりと柑橘系の香りがした。
「ふふ。ヒカルくん、子どもみたいなところがあるのね」
ともみは柔らかく笑った。
と、その顔が少しつらそうに陰る。
「先輩……？」
白い頬に赤みが差す。

「ん……っ♡」
ともみは胸を押さえるように、息を吐く。
「……ひ、ヒカルくん」
その顔ですぐに分かった。
「おっぱい、出したくなったんですね？」
「ごめんね。しょ、食事中なのに……っ」
「いいんです。えっと……」
辺りを見回すが、保護者や子どもの数も多く、こんなところでしたら見つかってしまう。
（どこで……）
今は盗難防止のために、校舎の出入り口は施錠されている。
と、ヒカルはある場所を見つけた。
「先輩、こっちです」
ともみの手を引いて向かったのは、
「体育倉庫……？」
「そうです。ここでしましょう」
「だ、大丈夫かしら……」

「でも他に適当な場所も見つからないので、とにかく頑張りましょう。……それとも体育祭が終わるまで持てますか？」
ともみは首を横に振った。
「……そ、そうね」
しっかりと扉を閉める。
埃っぽいが文句は言っていられない。
ともみを、出入り口から死角にある跳び箱に座らせた。
（確かに先輩のおっぱい、さっきよりちょっと大きくなってる気がする）
色々とともみのおっぱいを見たり、しゃぶったりする経験から分かった。
「それじゃ、先輩……。早速、お願いします」
「え、ええ……」
ともみの体操着をたくし上げると、ピンク色のフルカップブラに包まれた胸が露わになった。
ミルクが溜まって少し大きくなっているせいか、ブラが乳肉に食い込んでいた。
「ブラ、外して下さい」
ともみはつらそうな顔をしたままブラを外してくれた。
「ふぁっ……♡」

ブラを外した解放感に、ともみは身動いだ。
たわわな豊乳が、ブラの下からのぞく。
大きく膨れたおっぱいに、乳首が痛そうなくらい張っている。
（ただ、ここだとスペースが限られてるよな……）
フェラチオをしてくれるのにも、もし見つかったら大変だ。
と、ある名案が浮かんだ。
ヒカルはともみに囁く。
「えっ……そ、そんなこと？」
「この方法なら大丈夫だと思うんですっ」
「……え、ええ。分かったわ……っ」
ともみは悩ましい顔でうなずく。
ヒカルがすでにギンギンになっているペニスを解放すれば、跳び箱から下りたともみは、ヒカルに後ろ姿を見せる格好で肉棒を太腿で挟んだ。
「う……！」
ヒカルは呻いた。
「だ、大丈夫、ヒカルくんっ!?」
「すみません。気持ちよすぎてつい声が……」

しっとりと汗をかいた肉感的な太腿が、脈打つペニスをさらに圧迫する。
「あぁっ♡　あなたのが、ドクドクいってるの感じちゃう……♡」
「でももっと、先輩との密着が欲しいですね」
「ど、どうすればいい？」
「ハーフパンツを脱いで下着姿になって下さい」
「……わ、分かった」
ともみは恥ずかしさに声を震わせながら、ハーフパンツを脱ぐ。
汗をかいた身体に張りついたショーツはおま×こにも、お尻の割れ目にも食い込み気味。
「もっと俺のち×ぽと下着とが密着するように……。先輩のあそこに当たるように」
ヒカルの言葉に昂奮を覚えたのか、ともみは息を上擦らせた。
「こ、これ、まるで……エッチ、みたいね……っ♡　入れてないのに……♡」
「でもこれが素股の醍醐味なんですっ」
「す、すまた……っ♡　やらしぃ呼び方……っ♡」
ともみは肩で息をした。

ショーツにいやらしい熱気が染みてくる。

ビクビクとペニスが戦慄く。
（ヒカルくんのち×ぽの震え、伝わっちゃう……っ）
鼓動が高鳴り、下腹がしくしくと疼いた。
「はぁっ♡　あああ……っ♡」
「先輩、すごくいやらしいですっ」
ヒカルが首筋に口づけをして、汗を吸う。
「ひああっ♡　ヒカルくん、汗の匂い、嗅がないで……っ♡」
「先輩の匂い、昂奮するんですっ」
股の間の勃起肉が、ビクンビクンと震えるのを感じた。
ヒカルの息遣いが首筋に当たると、背筋がゾクゾクしてしまう。
（うそ……。ぬ、濡れてきちゃうっ）
ジュワッと、熱いものがショーツに染みてしまう。
（絶対ヒカルくんに気付かれちゃうっ）
ますます太腿を強く締めた。
「先輩！」
ヒカルに胸を搾られれば目がちかちかして、ゾクゾクした喜悦が背筋を駆け上がる。
「イクゥッ……♡」

絶頂したことを理解しているはずのヒカルはおっぱいに指を食い込ませながら、乳首を痛いくらいぎゅっと締めつける。
「ぁあああっ♡　ち、乳首ビリビリしちゃうっ♡」
ともみは悩ましい声を上げた。
「先輩、太腿で締めつけて下さい。動きますから」
「う、動く？」
戸惑っているともみをよそに、ヒカルは腰を前後に動かしてくる。
大きく張り出したカリが、ともみの蜜で濡れているクロッチを引っ掻く。
「ひいいいいんっ♡」
全身をビクビクさせながら、勝手に太腿を締めつけた。
「先輩のあそこ、すごく濡れちゃってますね」
腰を激しく前後に動かすたび、クチュクチュと糸を引くような音が弾けた。
「ぁあんんんっ♡」
ともみはシナを作ってしまう。
（こ、これ本当にエッチっ♡　わたし、入れてないけど、エッチしちゃってるっ♡　素股エッチに溺れちゃってる♡）
熱々の男根が太腿の内側を擦るたび、いやらしい我慢汁がなすりつけられた。

ヒカルの息遣いがどんどん荒くなる。
「ああっ♡　ひ、ヒカルくぅんっ♡」
胸を揉みしだかれ、ショーツごしの膣肉を男根で擦られる。
「そ、それだめぇっ♡」
小鼻を膨らませ、ともみは仰け反る。
「ううう、せ、先輩……」
ヒカルの余裕のない声。
「ひ、ヒカルくん、出してっ♡」
「出るっ！」
ペニスははっきりと射精の前兆を見せていた。
圧迫している太腿を押し返されるような膨張感。
「わ、わたしも……イクゥッ」
二人が昇り詰めると同時に、精液がびゅるっびゅるっと勢いよく噴いてしまう。しかしそれは床を濡らすだけ。
「あぁぁっ……ひ、ヒカルくぅんっ……♡　飲ませてくれなきゃ駄目なのにぃっ……♡」
ともみは舌っ足らずに身悶えた。

何度も絶頂してしまったことで、ますますおっぱいの疼きが強くなってしまう。
「すみません、つい……っ」
「つ、ついは駄目だからぁっ♡」
ともみは無意識のうちに、自分でおっぱいを揉んだ。
「ごめんなさい。でも先輩はもう準備万端ですよね」
「ひゃんっ♡」
愛液を吸いすぎてオムツのようになってしまっているショーツを、ヒカルに撫でられてしまう。
「んんんんーっ♡」
ともみは喘ぎを押し殺すために、右手の親指を噛んだ。
ヒカルはショーツごしだというのに、秘裂はもちろん敏感な秘芽まで的確に刺激してきた。
（わたしの身体。ヒカルくんに把握されちゃってる……っ！）
全身の肌が粟立ってしまう。

（ともみ先輩のあそこ、ぐっちょり濡れてる……。まるでお漏らししたみたいだ……）

ヒカルの中で、驚きと嬉しさが混ざり合う。
驚きはここまでともみが濡れてくれたことで、嬉しさはここまで感じてくれたこと。
「ともみ先輩、僕が下になりますから、腰の上に跨がって下さい」
「えっ！」
「大丈夫です。俺が下になりますから、先輩は汚れません」
「そういうことじゃ……」
「先輩、ミルクを出したくないんですか？」
「……分かったわ。ごめんなさい」
本当は、今すぐヒカルのペニスにむしゃぶりつきたいくらい身体が昂ぶっているはずなのに、ともみはこんな状況でもお淑やか。
ともみは胸をぷるぷると揺らしながら、ショーツを脱ぐ。
糸を引くのが見えた。
（先輩のあそこ、やっぱりすごく初々しい色してる……。それがまた余計にエッチなんだけど）
ともみは、ヒカルのペニスを見て生唾を呑む。
「えっと……わたしが上？」
「はい。俺がサポートしますからっ」

「……は、はぃ……っ♡」
目元を赤らめたともみが、ゆっくりと腰を下ろしてくる。
ちょうど、和式便器に跨がるような体勢。
ペニスの切っ先と秘処が、触れ合う。
「あひぃ♡」
ともみはピクンと肩を震わせ、腰を反射的に上げてしまう。
「先輩、それじゃあ……」
「わ、分かってるんだけど……じ、自分から入れるなんて……っ♡」
「俺がお手伝いしますから」
「……う、うんっ」
ともみは再び恐る恐る腰を落とせば切っ先と秘処が触れ合う。
「やっぱりだめぇ……！」
しかし今度はヒカルが、ともみのくびれを摑んで、持ち上がった腰を戻す。
「ああぁっ♡」
M字に開いた両足をピクピクと震わせたかと思えば、ズブッズブッとペニスが埋まっていく。
「ぁああ……♡　ひ、ヒカルくんのち×ぽがくるぅっ♡」

ともみはショートカットの毛先を躍らせながら、身悶えた。
一番太い亀頭冠がぬるりと押し入れば、あとはともみの重みともあいまって、あっという間に根元まで収まってしまう。
「ふぁっ……♡　ぁああっ♡　ひ、ヒカルくんのが深いィッ……♡」
ともみは泣きじゃくるような嬌声混じりに悦に入りつつ、潤んだ眼差しで繋がっている部分を見た。
「はぁっ……♡　ヒカルくんのち×ぽ、奥まできてる……っ♡　こんな格好、恥ずかしいのに……♡　よりヒカルくんを深い場所で感じてるっ♡」
「動けますか？」
ともみは肩を大きく上下させ、切なげな顔をした。
「や、やってみるね……♡」
両足で踏ん張り、腰を持ち上げる。
「ぁあンンンッ♡」
ずるずるっと遅いペースながら、ペニスが露わになってきた。
ピクピクと幹肉が脈打つ。愛液まみれで、てらてらと淫靡に光っていた。
「だ、だめ……っ♡」
しかし半ばくらいで、ともみは力尽きてしまう。

「ひぃぃんっ♡」
再び奥に突き刺されば、ともみが喘ぐ。
「先輩、どうですか？」
「あぁっ……♡　ヒカルくんのが、わたしのお腹に引っかかっちゃって……っ♡」
ともみは、お腹をさすった。
「じゃあ、俺が動きますっ」
「ま、待ってっ♡　わたしもする、わ……っ」
ともみはゆっくりと腰を上げた。

（ヒカルくんのち×ぽが、わたしの中に食い込んじゃうっ♡）
ともみは息を荒げながら、「んんんっ……♡」と嗚咽した。
腰を引っ張り上げれば、ヒカルのペニスの存在感を否応なしに感じてしまう。
「ぁあああんっ♡」
柳腰に甘い電流が迸り、上半身を緩やかに弓反らせた。
滲んでいた愛液が絡みつき、ぶぢゅぶぢゅと悩ましい音を弾けさせる。
ともみが頑張るたび、胸がたぷたぷっと重たげに揺れた。
（は、早く母乳を出したい……っ）

と、ヒカルの手がおっぱいを搾る。
「ヒカルくぅんっ!?」
不意打ちすぎる責めに、腰がガクガクしてしまう。
「イクッ♡」
乳首をひねられて昇り詰めると、腰が落ちた。
硬く逞しい亀頭冠が奥に当たると、またも極まってしまう。
「あぁっ♡　い、イっちゃうの止まらないぃっ♡」
ともみは悶える。
悶えながら、膣肉がヒカルのペニスを締めつけるのを自覚した。
絡み合った場所から、ニチャニチャと糸を引く音が弾ける。
「はああっ♡　んんっ♡　ひぁん……っ♡」
ヒカルの手の中でますます、ともみのおっぱいが揉みくちゃにされる。
彼に握りしめられ、まさぐられるだけで快感が弾けた。
「はぁっ♡　ぁああっ♡　ん……っ♡」
（わたしの身体、ヒカルくんとエッチするようになってから、どんどんいやらしくなってるぅ……っ♡）
それでも卑猥な想いはやまない。

もっと激しく動きたい。
（こんないやらしいことを考えちゃ駄目なのに……っ）
そんなともみの心を、ヒカルは見抜いていた。
「先輩、動いてもいいですよ」
「……で、でもっ」
「先輩が動きたいように動いて下さいっ」
乳首をぎゅっと抓られる。
「アアアンッ♡」
全身に快感の電流が走り抜ければ、もうじっとはしていられない。
ヒカルに胸を弄ばれながら、腰を前後に動かす。
「気持ちいいっ♡　ヒカルくんのち×ぽにズンズンって奥を突かれるのイィッ♡」
絡み合っている部分で、ニチャニチャと卑猥な音が奏でられた。
そんな音すら、ともみの昂奮を高めてくれた。

ヒカルは、ともみの柔らかな重みを感じ、有頂天だった。
ともみが悩ましい顔で、ヒカルの肉棒を貪ってくれているのだから。
「先輩、俺もそろそろ動きますっ！」



「ん……っ♡」
ともみは目元を潤ませながらうなずく。
ヒカルは腰を突き上げた。
「あああああんんっ♡」
ともみは、いやいやとかぶりを振りながら、身悶える。
腰を叩きつけるたび、蜜汁の飛沫が弾けた。
ヒカルは腰を遣いつつ、さらにともみのおっぱいを搾った。
「ぁああんっ♡　ひ、ヒカルくんの手つきも腰つきもいやらしいよぉっ♡」
「すみません！　でも先輩がいやらしすぎるからっ！」
切れ切れに、外の放送が聞こえていた。
すでに午後の競技は始まっている。
「先輩、俺たち、みんなには内緒ですごくエッチな競技をしちゃってますよね！　先輩のおっぱい搾り、みたいな……」
ともみは目尻に涙を浮かべ、「ひぃんっ♡」と鼻にかかった嬌声をこぼす。
「だ、だめっ♡　そんなエッチな競技じゃないのっ♡　わ、わたしは母乳が出ちゃう体質で……♡　ヒカルくんの精液を飲まないと、ちゃんとおっぱいを出せないだけっ♡」

いやらしい肉穴は柔らかく締めつけてくる。オスに訴えてくる問答無用な搾取の本能に抗うように、ともみの中で激しく動く。

「ひぁっ!?」

突き上げが強すぎたのか、ともみがバランスを崩して、前のめりになった。

「ヒカルくんっ♡」

おっぱいが、ヒカルの胸板で潰れる。

ともみはヒカルに抱きつくような格好になったまま、腰を動かす。

ヒカルは、ともみの肉感的なお尻に指を食い込ませ、さっきよりも距離が近くなった子宮口を叩く。

「あああああっ♡　だめっ♡　か、感じすぎちゃうっ♡　ヒカルくんのち×ぽ、気持ちいい♡」

「ううう！　せ、先輩のあそこに吸い込まれる……っ！」

温かくぬるぬるした蜜肉に包み込まれ、長く保つはずもない。

「先輩！　俺……っ！」

ビクビクとペニスが引き攣り、下半身全体に疼きが広がっていく。

ともみは、うんうんとうなずく。

「だ、出して……っ。あなたのをちょうだいっ♡」

「出る!!」

熱い迸りが、ともみの子宮を直撃する。

「ンンンンンンン……♡♡」

ともみは上半身をもたげた。

ヒカルがおっぱいを握りしめれば、プシャアアッと母乳がしぶく。

「あああああんっ♡　ひ、ヒカルくんの熱いのがわたしの深いところにまで届くぅぅっ♡　イクゥッ♡　イくのぉっ♡　イっちゃうぅぅッ♡♡」

それまで溜まっていた母乳が堰を切って、迸った。

ともみはゾクゾクと全身でシナを作ったかと思えば、糸の切れた人形のように脱力してしまう。

夕日を浴びながら、生徒全員で解体作業に勤しんでいると、ヒカルのもとへともみが走ってきた。

今はジャージの上着を羽織っているので、胸がよく見えなくて残念だった。

「……ヒカルくん」

「あ、先輩！　ど、どうも。……閉会式の挨拶、すごかったですっ」

「そう？」

「だって、ちょっと前まで体育倉庫で……」
「！」
ともみは恥ずかしそうにうつむく。
「も、もう……」
「それでどうしました？」
「あ、ありがとうって言いに……。う、うん。それだけっ。それじゃまた来週ねっ！」
「は、はい！」
走り去る先輩の背中を、ヒカルはいつまでも見ていた。

第五章　夏休みは水着母乳と～先輩と妹、ビーチで夢の競艶！

夏。一年で一番、やばい季節。
じっとしているだけで汗が吹き出すし、頭が痛くなる。
しかし、悪いことばかりではない。
夏服。やぼったい冬服を脱ぎ捨てて、誰もが覚醒するのだ。

そんなことを考えながら、ヒカルが下敷きをぺらぺらと動かして涼んでいると、教室の出入り口のところにともみがいることに気付く。
薄手の夏服のブラウスが、はちきれんばかり。
当然、クラスの男子の視線も集中。
「おい、お前ら。なにエロい目で見てるんだ。先輩に失礼だろ！　……先輩、俺にご

用ですか？」
「そう」
「それじゃあ、行きましょう！　さぁ。こっち、こっち！」
クラスの男子全員のブーイングを背中に受けるが、そんなのまったく気にならない。
ともみの背中を押しながら、ちらっと見る。
やっぱりブラ線が透けていた。ブラの向こう側も、ともみのあられもない姿も見ているというのに、夏服のブラ線にどぎまぎしてしまう。
二人きりになれたところで、
「それでご用というのはなんですか？」
「実はね、うちの親戚が海の家を夏休み中に出すんだけど、その手伝いを頼まれたの。他にも友達も一緒に誘ってもいいって言うから……。どうかな？」
「行きます！　先輩と一緒に働けるんですよね!?」
ヒカルの勢いのよさに、「う、うん」とともみは少しびっくりした様子。
「でも安心して。働いたあとは海で遊べるから。お小遣い稼ぎ兼海水浴って考えてくれていいわ」
（先輩の水着姿……っ）
ともみのような可憐な女性が水着姿でビーチを歩けば、それこそさっきの男子たちの比ではないだろう。
（もしビキニだったら、セクシーだ……。いや、ワンピースタイプも捨てがたい！　先輩の可愛らしさが一層強化されて……）
頭の中で色々と考えながらも、外面は真面目にうなずく。
「是非、手伝わせて下さい！」

というわけで最高の一日にするべく、電車の時間など綿密なスケジュールをヒカルは立てた。
駅前で待ち合わせれば、ピンク色の可愛らしいワンピース姿のともみが駆けてくる。
「先輩！」
笑顔で手を振る。
ともみは大きく肩で息をした。
「だ、大丈夫ですか？」
「ごめん。遅れちゃって……」
「いえ。俺が早すぎただけですから。予定よりまだ二十分くらい時間は余ってますから。どうします？　先にホームに行ってます？　それともどこかで時間を……」
「ううん。待ち合わせをしてるから、ここにいましょ？」

「待ち合わせ？」
誰を待っているのかと聞いても、「来てのお楽しみ」と言われて、なかなか教えてくれなかった。
「――先輩、お待たせしました」
「っ!?」
その声に驚きながら振り返った。
「すずかちゃん!?」
「兄貴、おはよ」
「おはようって……え、どうして、すずかちゃんがここにっ!?」
「先輩から海の家のバイトを手伝わないかって話をもらったから、受けたの」
「どうやって連絡を？」
「前に会った時に、連絡先を交換してたから」
（い、いつの間に……）
ぜんぜん気付かなかった。
相変わらず、すずかは要領がいい。
ともみは時計を見る。
「さ、ホームに行きましょう」

電車で揺られること二時間。
身体の節々がいい加減硬くなってきた時に、ようやく目的地に着く。
「うわあっ！　きれー……っ」
すずかは嬉しそうに声を弾ませる。
ホームから、白い砂浜と海を臨むことができたのだ。
「二人とも、こっちよっ」
ともみのあとに続いてホームを下りて改札を抜ければ、本当に目と鼻の先に海がある。
海から吹きつける風は、潮の香りがした。
ビーチにはパラソルの花が咲いて、渚では子どもたちが遊んでいる。
そんな賑やかなビーチに、海の家があった。
造りは簡素で、まだ営業前のせいか静かだ。
ともみが、海の家に入る。
「おじさん、着きました。ともみです」
奥から恰幅のいいおじさんが現れる。
「ともみちゃん、いらっしゃいっ！　そこの二人が言っていた子たちだね。もうすぐ

店を開けるから奥の部屋で着替えてきて」
かき氷やフランクフルト、焼きそば、ラムネにビールなど品物を書いた短冊が飾られた壁を横目に、奥の部屋へ。
「ストップ。ヒカルくん。まずは私たちが着替えるから」
「あ、そ、そうでした」
「……先輩、兄貴になら別に見られてもよくないですか？」
「すずかちゃん、だ、駄目よ……。そんなこと言ったら……」
どこまでも初々しいともみはすずかと一緒に部屋の中に消える。
ヒカルは、ごくりと生唾を呑み込んだ。
（ともみ先輩、どんな水着なんだろう……）
ドキドキしながら待っていると、そっと障子が開く。
「お、おまたせ。ヒカルくん！」
「先輩！」
ともみは、パーカーの下に緑のセパレートタイプの水着姿。
トップスは布地が多めで、ボトムスにはパレオをまとう。
露出度は控えめながら、しっとりとしたセクシーさをまとうともみに、見とれてしまう。

「ちょっと兄貴。あたしもいるんだけど」
「あ、ごめん、すずかちゃ――ええ！」
思わず声を上げてしまう。
「な、なによ、変な声出しちゃって……」
「すずかちゃん、だ、大胆すぎない？　お客さんには男の人もいるんだぞ？」
すずかは、黒い上下のビキニ。
トップスもボトムスも、どちらも布地が削減されすぎてる。
裸でいる方が、まだ恥ずかしくなさそうだ。
「平気。こうしてエプロンをすれば……」
さらに唖然とした。
ただでさえ水着の布面積が少ない状態でエプロンをすると、まるで裸エプロンみたいだった。
ともみがヒカルを促す。
「さ、ヒカルくんも着替えてきて」
「あ、はい！」
ヒカルは慌てて部屋に入った。

店は開店してからずーっと忙しかった。
ヒカルは、ティーシャツに海パン姿で給仕役。
注文を聞き、ともみのおじさんが作る料理を持っていく。
ともみとすずかも給仕。
こっちは男たちが隙あらばナンパしようとしてくるので、そこをともみやすずかに用事を作って割り込むことでブロック。
ヒカルはそれだけでなく、おじさんに言われて店頭でフランクフルトを焼いたり、氷水に浸かった大量の飲み物の注文もこなさなければいけなく、目が回るような忙しさだった。

「つ、疲れたぁ……」
夕暮れ時、ようやく店が終わった。座り込みそうになるヒカルの両脇を、右にともみ、左にすずかが現れて支えてくれた。
「ヒカルくん、さあ、海に行きましょう」
「そーそー。せっかく終わったんだからさっ」
「あ、でももう夕方ですし……」
すずかが脇を突く。

「兄貴。人が少なくなったんだから、遊ぶにはもってこいじゃんっ」
ともみもすずかに同意する。
「そうよ。海に来たのに、海に入らないで帰れる?」
ともみの言葉が引き金になった。
「帰れません！　行こう！」
走り出そうとして、腕を引っ張られた。
「うわ!?　すずかちゃん!?」
「待ってよ、兄貴。日焼け止め塗ってよ」
「い、今さら?」
「早くしてっ」
シートを敷いた上にすずかが横になると、日焼け止めクリームをヒカルに渡し、背中の紐を取った。
(う)
ヒカルは、妹の横乳にごくりと生唾を呑んだ。
「何してるの?　早くして」
「わ、分かった」
クリームを手に出し、背中に塗っていく。

「あ……っ♡」
すずかは上擦った吐息をこぼす。
その声は妙に色っぽい。
潮騒を聞きながら、すべすべした背中に塗り広げていく。
すずかの肌は、モチモチして触り心地は最高だった。
「さあ、これでいいよね？」
「待って。背中側だけじゃだめ。お尻にもしっかりお願いね」
「お、お尻……っ」
「足もね」
「よしっ」
ヒカルは両手にクリームをまぶすと、布地が薄い、ティーバックのようになっている水着を脇にどけ、豊満なお尻を両手でむんずと握りしめた。
「んんんん……っ♡」
手の中で、むにゅっむにゅっと綺麗な形をした桃尻が艶やかに形を変える。
「あ、兄貴……っ♡　手つきがいやらしぃっ♡」
「でもすずかちゃんは、これをしてほしかったんでしょ？」
「あぁっ♡　そ、そんなこと……ひぃん♡」

どれだけ強がっても、すずかの耳は真っ赤だった。
「じゃあ、これで……」
「待って、兄貴っ。次は……っ」
と、そこに、すずかの左隣にともみが仰向けの格好で寝そべった。
「先輩!?」
ヒカルとすずかはびっくりした。ともみは目を伏せる。
「ヒカルくん……わたしにも塗ってもらえる？」
「もちろん！」
「兄貴！　あたしが先なんだけどっ！」
「ごめん、すずかちゃんっ。先輩が終わったらするからっ」
ヒカルは舐めるように、ともみを見る。
「失礼します」
パーカーを脱がせる。
「おぉっ」
パーカーの下にあった、たわわな胸に感嘆の声を上げてしまう。
「……ひ、ヒカルくん……お願い……っ♡」
ヒカルは日焼け止めクリームを直接的に、ともみの身体に垂らす。

「ンッ♡」
ともみの身体がピクンッと震えた。
「あぁっ♡　つ、冷たいぃっ♡」
ともみは眉をひそめた。胸から下腹にかけて、ピクピクと震える。
「先輩、それじゃあ塗りますね？」
「お、お願い……っ♡」
胸をむんずと握りしめる。
「ひぁあっ♡」
胸を揉めば、今にもビキニからこぼれそうになった。
真っ白い肌に、ヒカルの手の痕がつく。
それがなおさらいやらしかった。
「ああっ♡　んんっ♡　ひ、ヒカルくん……う、うまいね……っ♡」
「はいっ。先輩のおっぱいは揉み慣れてますから」
「何言って……ひいいいんっ♡」
ともみは目の端に涙を浮かべ、鼻にかかった嬌声をこぼす。
「先輩、おっぱい出したいですか？」
「んんっ……ちょ、ちょっと……っ♡」

ともみの肌はしっとりと汗をかいて、胸から手を離すと、「あっ♡」と声を漏らした。
「先輩？」
「な、なんでもない……っ」
そんな強がるともみも可愛らしい。
ヒカルは、日焼け止めを今度は彼女の下半身に垂らす。
「ひぃぁっ♡♡」
不意打ちの刺激に、ともみは身悶えた。
「ここもちゃんと……んっ？」
ヒカルはパレオを外し、ボトムスをずらす。
すると、明らかに日焼け止めとは違うとろりとした蜜がこぼれた。
ともみの秘裂は、いやらしくヌメ光っている。
「先輩、感じてくれてたんですね？」
「ああ、そ、それは……ンンッ……♡」
ともみはモジモジしながら、赤面した。
「――兄貴……！　勝手にじゃれないでよね。あたしもいるんだから、忘れないで」
すずかはともみの身体を跨ぐと、ヒカルと向かい合う。ぶるんっぶるんっと美巨乳

を振り子のように弾ませながら、ヒカルに抱きついてくる。
「兄貴ぃ……ん……っ♡」
「すずかちゃん!?」
すずかは腰に足を回してくると、下半身をすりすりと密着させ、テントを張った股間を擦っていく。
「ううっ！」
「あああっ♡　兄貴のち×ぽ、おっきぃ……っ♡」
すずかはマーキングをし、頬を染めた。
「兄貴のここ、ビクビクしちゃってるっ」
水着ごしにすずかの秘裂を意識する。
「兄貴、これ、ちょうだいっ♡」
すずかは潤んだ眼差しで、誘惑してくる。
「すずかちゃん！」
ヒカルは海パンを脱ぎ捨てるや、急角度に反り返った逸物を露わにする。
それをすずかの水着ごしの秘処に、ぴったりと押し当てる。
「あ、熱いっ♡」
たちまち我慢汁でぐっちょりと濡れそぼり、割れ目が透ける。

「兄貴のビクビクしてるの伝わるよっ♡」
ますます腰を擦りつけられる。
「すずかちゃん、水着脱がせるよ？」
「きてっ♡」
ヒカルはすずかの下の水着を取り払った。
鮮やかなサーモンピンクの割れ目がヒクヒクしながら、とろりと蜜を垂らす。
まるで飢えているみたいだった。
「兄貴、早くあたしの中にぶち込んでっ♡」
「すずかちゃん、すっかり淫乱になっちゃったんだね」
「そ、そうっ♡　あたし、淫乱になっちゃった♡　でもそれは兄貴のせいなんだからっ♡」
準備万端、コンドームをはめたペニスを押し当てた。
抱え込んでいるすずかの太腿に、なおさら指を食い込ませる。
ズブッ、ズブッ……。
ゆっくりとすずかの秘処に挿入する。
根元まで嵌まれば、
「んんん……っ♡」

すずかは長い黒髪を揺すりながら、身悶える。
柔らかく温かな膣肉が、ニュルニュルとペニスを締めつけてきた。
「すずかちゃん、すごく締めつけてくるねっ」
ヒカルの下半身に、鋭い電流が走る。
「うう……っ！」
腰を少し動かすだけで、ニュプッギュプッと悩ましい水音が弾ける。
「兄貴のち×ぽ、すごいぃっ♡　最高ぅっ♡」

（兄貴の汗の臭いを嗅いでると、クラクラしちゃう……っ）
すずかは、ヒカルの逞しい身体に全身をすりすり押しつけつつ、お腹の芯がムラムラと火照る。
すずかは美脚に力を入れながら、クネクネと下半身を揺する。
深い場所にまで達するヒカルの肉棒に貫かれ、幸せな心地だ。
「ン……ッ♡」
上半身を緩やかに仰け反らせる。
ヒカルが胸に顔を埋めて、左右に振りたくりながら揺さぶってきた。
「兄貴ぃっ!?」

ヒカルを誘惑するために選んだ裸も同然な布地しかないトップスがずれ、陥没乳首がこぼれてしまう。
「いやらしい妹だ。お兄ちゃんを誘惑するためにこんなはしたない水着を身につけてるなんてっ」
「兄貴、嫌いじゃないでしょ？」
「そうだねっ」
ヒカルが右の乳首を弄り回し、あっという間に勃起させてしまう。
「あああああん♡」
（じ、自分ではどうやっても勃起させられないのに、兄貴がやったら一発なんて！）
背筋に電流が迸り、ゾクゾクと肌が粟立った。
すずかは、ヒカルの頭に爪を立てて髪の毛を掻き混ぜる。
ヒカルの熱く弾んだ息遣いが、敏感になっている肉体に染み込む。
全身がますます過敏になり、ヒカルの男根を咥え込んでしまう。
「んんっ……♡　ううううん……っ♡」
鼻にかかった声を漏らす。
（兄貴、どうして動いてくれないの？）
まるで焦らされているような心地に、愛蜜が滲んだ。

「あ、兄貴ぃっ」
つい声にも懇願の色がこもった。
「すずかちゃん、動いてほしいの？」
「わ、分かってるくせにぃ……ッ♡」
「動いてほしいなら、どうすればいいのか分かるだろ？」
「兄貴のち×ぽ、欲しいのぉっ♡　あたしの一番奥をぐいぐい押してほしいからぁっ♡」
すずかはますますヒカルに身体を密着させて、おねだりした。
「いい子だ、すずかちゃん！　動くねっ！」
「ん……っ♡」
すずかは、こくこくとうなずく。
ヒカルは、すずかの桃尻を握りしめると、突き上げた。
「ひいいいいいんっ♡」
湧き上がる恍惚感に、小さな絶頂を覚えてしまう。
「イクゥッ♡」
人のいなくなったビーチに、すずかの啜り泣きが響く。
ヒカルが、リズミカルに腰を前後に動かす。

「ぁああっ♡　はぁんっ♡　ひぃぃんっ♡　あンッ♡」
掻き混ぜられるたび、グチュグチュと淫らな音が爆ぜた。
柳腰に快感電流が弾ければ、すずかは息を荒げる。
「兄貴っ♡　兄貴ぃっ♡　アアッ、すごいぃっ♡　イィッ♡　い、イィッ♡」
掻き出された蜜汁が、砂浜に黒い染みを点々と作った。

ヒカルはすずかのお尻を握りしめ、ますます激しく腰を動かした。
すずかは、ヒカルの右肩に顔を埋めながら、いっそう荒々しく腰を蠢かせる。
熱い愛液が絡みつき、男根が糸を引く。
「あ、兄貴ぃ……ふぁあぁあ……っ♡」
ヒカルの首に回されていたすずかの腕から、力が抜ける。
「すずかちゃん!?」
危うく落ちそうになったすずかを抱きかかえ、やんわりと地面に寝かせるが、その拍子にズルッとペニスが抜けた。
「ひあああんん……っ♡　あ、兄貴ぃ……っ♡」
もう一度入れ直そうとしたその時、
「ヒカルくん……っ♡」

ともみがモジモジと股を擦り合わせながら、立っていた。
「先輩！　今はすずかちゃんと……」
「ごめんね、すずかちゃんっ。でもあたし、お、おっぱい出したくなっちゃって……っ♡」
すずかが反発する。
「兄貴、まさかあたしを見捨てるの!?」
「ごめん、すずかちゃん。ともみ先輩は母乳を出さないと苦しいからっ」
ヒカルはコンドームを脱ぎ捨てた。
「ヒカルくん、こんな我が儘なことを言ってごめんなさい……っ」
ともみに潤んだ眼差しを注がれながらお願いされたら、なんでもしてあげたくなる。
「先輩、四つん這いになってこっちにお尻を向けて下さい」
「……え、ええ」
瞳を濡らしながら、ともみが四つん這いになった。
水着が、お尻の割れ目に食い込んでいる。
ヒカルは、ともみの水着のボトムスを膝まで下ろす。
「んんっ……♡」
ともみは悩ましい息遣いをこぼした。

「先輩、この格好嫌ですか?」
「い、嫌というわけではないけど、い、イヌみたいだなって……やっぱり恥ずかしい……っ♡」
「でもこっちの方が普通の格好より、挿入感が得られやすいってエッチな本に書いてありましたから！」
ペニスの切っ先を押し当てた。
物欲しげにヒクヒクしている割れ目が、嬉々としてラブジュースをこぼす。
「入れますね」
「アアアンッ♡」
ズブズブッとペニスを埋めれば、すぐに行き止まりにぶつかった。
「ひぃぃんっ♡」
ともみはショートカットの髪を振り乱して、身悶える。
「はぁっ♡　ぁあんっ♡　ヒカルくんのち×ぽがすごく刺さって……あぁん♡」
「先輩、いつもより浅くないですか?」
「んんっ♡」
ともみは恥ずかしげに身悶える。
「先輩?」

「し、子宮が下りてきちゃってるのっ♡」
ともみは、胸をたぷたぷと前後に揺らしながら呟いた。
「動きますね、先輩っ」
ともみの膣内を大きい律動で掻き混ぜる。
「あんんっ♡　ひぃぃんっ♡　ヒカルくんのち×ぽ、わたしの中をすごく掻き混ぜてくれるの……っ♡」
絡み合う男根と蜜肉。
滴り落ちる愛蜜で、綺麗な砂浜がべっとりと黒く汚れていく。
「先輩、本当に先輩のおっぱいはいやらしいですっ！　く、くううっ！」
ともみの膣内で搾取され、ビュルビュルッと呆気なく達してしまう。
「えっ!?」
絶頂すると同時に、ともみのおっぱいから母乳が噴いた。
「ふぁあ……っ♡　い、いきなり出しちゃらめぇっ♡」
「すいません、先輩！　実はすずかちゃんとしてた時、イきそうだったので。先輩でイっちゃいました……。でも安心して下さい」
ヒカルは、肉棒を子宮口に押し当てた。
「ヒカルくんのち×ぽ、逞しいまま……っ♡」

膣内でビクンッとペニスが力強く戦慄けば、「ひぁっ♡」とともみは声をこぼす。
「先輩っ！」
ヒカルは胸を握りしめ、搾乳をしながらパンパンと腰を叩きつけた。
「ひあああんっ♡」
蕩ける顔を見せたともみが、本当に犬のように両足をバタバタさせて、砂を撒き散らした。
腰を叩きつけるたび、逆ハート形の肉感的なお尻が波打った。
ぷるんっぷるんっとすごくいやらしい。
「ひ、ヒカルくぅん、お、おっぱいそんなにいじめないで♡　乳首グリグリされちゃったらおっぱい、止まらないのぉっ♡♡」
プシャアアッッ！　勢いよく母乳が出た。
腰を激しく前後に動かせば、ついさっき中に解き放った子種が掻き出されて、ドロドロと溢れる。
おっぱいを揉みしだいているヒカルの両手は、おっぱいでベチョベチョ。
それでも搾乳はやめないし、子宮口を突き上げ続けた。

パンパンパン!!

勢いのいい破裂音と共に、ともみは快感に溺れてしまう。
おっぱいも、あそこもどちらも敏感で弱い部分。
そこを同時に責められてしまう。
（ヒカルくんの手の中で、わたしの胸、すごくいやらしい形になっちゃってるっ）
「だめ、だめっ♡　イクウゥゥゥッ♡♡」
ともみは全身を快感の電流に貫かれ、仰け反った。
プシャッ！
「ああっ♡　ひ、ヒカルくぅんっ♡　も、もうらめっ……あんっ♡　これ以上気持ちよくされちゃったら、おかしくなっひゃうぅっ♡」
ともみは堰を切って押し寄せる怒濤の快感に、何も考えられない。
ヒカルに触れられ、まさぐられ、ヒカルしか知らない場所を抉られ、全身が痙攣しっぱなし。
「くぅっ……それはだめですっ。だって、すずかちゃんとしているのを中断してまで、先輩としてるんですからっ。先輩の母乳をたくさん出さないとっ！」
「ひいいんんっ♡」
「――先輩、なんです。そのだらしのない顔……。さっきから兄貴とエッチしてるくせに、もう嫌、だなんて。それ、ワガママじゃないですか？」

ともみの目の前に、すずかが現れる。
すずかの目は据わっていた。
「ひどいです、先輩っ。あたしがもらうはずだった精液まで、先輩の母乳に変えちゃうなんてっ」
「すずかちゃん、ごめんなさい。あ、あの時は本当に駄目だったの。おっぱいが張ってしまって……ひぁああんっ♡」
不意打ちなヒカルからの責めに、声が上擦った。
「……先輩、そんなに見せつけるなんてひどいっ」
「ゆ、許してすずかひゃ……んんんんん……っ♡」
さっきから母乳が出っぱなしの乳首をいっぺんに、すずかにしゃぶられてしまう。
「すずかちゃんっ♡♡」
ともみは仰け反り、再び母乳が噴射する。
すずかの細い喉が、しきりに動く。
「んっ……んんっ……♡　先輩の母乳って本当にいやらしい味……っ♡　チュパッ♡　チュピィッ♡」
「す、すずかちゃんの舌遣い、やらしぃぃ……っ♡」
唇の隙間からミルクの筋がこぼれるのも構わず、貪欲に啜られてしまう。



ビリビリと、快感の疼きが乳首を蕩けさせた。
「す、すずかちゃん、だめっ♡　歯を立てないで……っ♡　イクッ♡　イっひゃうぅうっ♡」
ともみは嗚咽混じりに、呆気なく果ててしまう。
「先輩、すずかちゃんでイったんですか？」
「ンンッッ♡　ヒカルくんっ、今は動かないでっ♡　い、イキすぎちゃってビクビクしちゃってるからぁっ♡」
兄妹に責められ、ともみは涙ぐんだ。
すると、すずかは自分の胸を右手で揉みしだき、左手で秘裂をまさぐる。
クチュクチュと粘り着くようないやらしい音を立てながら、物欲しげな眼差しを向けてくる。
「兄貴……っ♡　お願い……っ♡」
「そうだね、すずかちゃん」
ペニスを抜くと、支えを失ったともみはぐったりした。
ヒカルはギンギンになっている逸物にゴムをつける。
「兄貴、きてっ♡」
すずかは横臥の格好になると、エアロビクスのように大きく右足を持ち上げ、ヒカ

ルに本気汁まみれの秘処を見せつける。
焦らされたのがかなりつらかったらしく、いつもの強気な雰囲気はすっかり影を潜め、しおらしい。
「こ、今度こそ、あたしの中で果ててっ♡」
「任せて、すずかちゃん！」
ヒカルは、すずかの右足を抱きしめながら、挿入する。
泥濘（ぬかるみ）のように、とろとろに蕩けている膣穴に男根を埋めた。
「兄貴ぃ……いくぅぅっ♡♡」
奥を突けば、すずかは泣きじゃくりながら昇り詰めた。
陥没乳首もすっかりビンビン。
「すずかちゃん、いやらしい妹だっ」
「あああんっ、こんないやらしい妹を気持ちよくしてっ♡」
ヒカルは、すずかのおっぱいを握りしめながら腰を激しく打ちつけた。
すずかの秘処が貪欲にヒカルのペニスに吸いつき、奥へ奥へと引きずり込んでくる。
それは何度経験しても、決して慣れない感覚。
「ああっ♡　ひぃぃんっ♡　兄貴ぃっ、兄貴ぃっ♡　激しぃっ♡」
すずかは髪に砂の粒が張りつくのも構わず、乱れる。

すずかの乱れがひどくなれば、膣圧も高まった。
（すずかちゃんのあそこに搾り取られる！）
ヒカルは奥歯を噛みしめ、腰を叩きつける。火照った秘壺に根元を締めつけられ、蕩けるような甘美にペニスをさらされてしまう。
肛門を締めつけて、我慢しようとするが、
「兄貴、我慢しないでっ♡　あ、あたしだけがイってばっかりとか、そんな恥ずかしいままにしないでっ♡」
すずかが、涙ぐみながら請う。
グツグツと煮え滾ったものが、ペニスを包み込んだ。
「すずかちゃん！　出るよっ！」
「来てっ♡　兄貴、来てっ♡♡」
「ううううう!!」
ヒカルは、すずかと深い場所で交わったまま、子種を解き放った。
「イクッ♡　あああんっ♡　あ、兄貴のがあたしの中にぃぃっ……イクウウウウウウウッ♡♡」
実際はゴムごしだが、すずかは本当に中出しされているように幸せそうな恍惚の表情を見せた。

すずかの秘処が、ヒクヒクと悩ましく引き攣る。
「……あ、兄貴ぃ……んんっ……す、すごいぃ……っ♡」
すずかは、ハァハァと息を弾ませる。
「すずかちゃんもすごかったよ……。ともみ先輩、大丈夫ですか？」
ともみは気怠げに、こちらへ来る。
「え、ええ……っ♡　わたしもあなたのお陰でたくさんおっぱいを出すことができて……嬉しかったわ……っ♡」
ともみはヒカルに、しなだれかかってくる。
それを、ヒカルはやんわりと支えた。
「すずかちゃん、抜くよ？」
「え……ぁあ……っ♡」
ズルルッとペニスを抜く。コンドームの先っぽが、子種で膨らんでいる。
避妊具を外すと、「あーんして」とすずかに言う。
すずかが当たり前のように口を開ければ、ドロリとした精液を飲ませる。
「んん……あ、兄貴の精液ぃっ♡　あああんっ♡　あたしで気持ちよくなってくれた精液、美味しいぃ……っ♡」
ともみはその光景にごくりと生唾を呑めば、「す、すごい……っ♡」そう呟いた。

第六章　おっぱいナース～母乳ちゃんは看護したい。

「んんっ……♡」
（ヒカルくぅん……っ）
夜。ともみは自分の部屋で、彼のことを想う。
乱暴におっぱいを搾り、母乳を出してくれる逞しい手。
全身がしっとりと汗ばみ、息が弾んだ。
胸をこぼし、自分で揉んでみる。
「んん……っ♡」
背筋がゾクゾクするような震えが走った。
眉をひそめる。頬や耳が熱い。
ミルクが溜まると、おっぱいそのものが敏感になった。

乳首はビンビンに尖って、いやらしい。
しかしいくら自分の手で揉んでみても、一向に母乳は出てくれなかった。
もしかしたらヒカルの精液に慣れすぎてしまったのかもしれない。
キュンッ。下腹がいやらしく疼く。
「……っ♡」
ともみは眉をひそめ、下唇を噛んだ。
実はともみは、ヒカルに一つ嘘をついていた。
ヒカルには生まれた時から、おっぱいが出てしまう体質だと言っているのだけれど、それは嘘。
それは小学生にまで遡った——。

その日、ともみは学校帰りに近所の神社に寄っていた。
(おっぱいがこれ以上、大きくなりませんよーにっ!)
ティーシャツを押し上げて主張しているおっぱいを揺らしながら、神社でナムナムとお願いをする。
体育の授業ではこの重たいおっぱいが邪魔だし、水泳の時には男子にジロジロ見られてしまうし、こんなものいらなかった。

少し前から突然大きくなって、気付けばこんなにも……。
(よし! お願いしたし、塾に行こっ)
長い階段を下りようとしたその時。
「っ!?」
突然、強烈な尿意を覚えてしまう。
近くに友達の家やコンビニはない。
家までは遠い。小学生だ。知らない家にトイレを借りる勇気もない。
「ううううう~……。ど、どうしよぉ……」
半泣きになっていたともみだったが、その神社は人気がなかった。
そんなことを考えると同時に、『バチ当たり』、『高学年』、『クラス委員』——そんなことが頭の中で過ぎった。
しかし溢れ出す尿意には、理性も無力。
(す、少しだから……)
人気のない場所に向かうと、そこでこっそりとおしっこをした。
それから間もなく、おっぱいが出るようになってしまった。
さらに、ますますおっぱいは大きくなってしまう。
ともみは思い当たることがあって、再び神社に向かった。

そしていつかおしっこをした辺りを調べてみれば、ウシの形をした碑石を見つけたのだ。難しい言葉や漢字を使っていたから当時はよく分からなかったが、今ならはっきりと分かる。

ウシはこの神社に祀られた神様の眷属——使いだった。

そんなことがあった。

きっとバチが当たってしまったのだ。

でもそんな恥ずかしいことをヒカルには言えない。

ともみは目を閉じる。

(明日、学校でヒカルくんにまたお願いしよう……)

ともみが起床すると、身体の火照りはいくらか鎮まっていた。

しかし胸はやっぱり張ったままで、苦しい。

一刻も早くヒカルに会いたい。その一心で学校へ急ぐ。

「おはよう、ともみ会長」

「ともみ会長！　おはようございまーすっ！」

通学路に出ると、顔見知りの生徒から声をかけられる。

それに応じつつも、同時に胸にたくさんの視線を感じた。

子どもの頃はこれがすごく嫌で、人混みの中は走っていたけれど、今は平静を装える術を見つけていた。それは人の目ではなく、顔全体を見ること。そうすれば、胸をガン見していることなど気にならない。

校門を抜けて玄関へ。

上履きに履き替え、向かった先は一年生のクラス。

ともみが最近よく来てるから、そのクラスの人たちもいたって普通。

ただやっぱり男子たちは好奇心を抑えられず、ともみの胸をガン見して、他の女子がそれに気付いて怒っているけれど。

「ヒカルくんはまだ？」

「ああ、ヒカルなら、今日は休みっす。風邪だそうです。メッセージ来ましたよ」

男子生徒がスマホを見せてくれる。

たしかにそんな感じのメッセージのやりとりが行われている。

「そうなんだ」

「あの、なんなら俺でよければお力になりますよ！」

男子生徒が鼻息荒く言った。

「ありがとう。でも大丈夫よ？」

一年の教室をあとにした。
（風邪か……）
確かヒカルは一人暮らしのはず。
風邪で心が弱っている時は特別つらいだろう。
すずかは学校もあるし、すぐにヒカルの元へ、というわけにはいかないはず。
（よしっ）
ともみは小さく拳を握った。

カーテンごしに夕日の日射しが差し込む。
（つ、つらすぎる）
今朝起床するなり、頭の痛みとセキに襲われた。これくらいなら無理して学校へ——とも思ったが、つらすぎてとても行けそうになかった。
友人へ風邪で休むというメッセージを送り、病院に行って薬をもらい、重たい身体を引きずってベッドに飛び込む——それが午前中の話。
薬を飲んで休んで、今は全身汗だくになった気持ち悪さで、目が覚めたのだった。
気分は午前中と変わらないような、いくらかよくなったような。
よく分からない。

（しんどすぎ……）
喉が渇いたが、ベッドを出てキッチンまで行くのが面倒だった。
しかし喉が渇いて眠れない。
（……俺、このままひからびて死ぬのかな……）
悲観的になったその時、ピンポーンとチャイムが鳴った。
（こんな日にセールスかよっ）
ピンポーンという音が頭に響いて余計につらい。
（帰れ帰れ帰れ……！）
心の中でそう念じていると、スマホのバイブレーション。
スマホを取ると、『桜沢ともみ』の名前。すぐにメッセージを開く。
——家の前にいるんだけど、起きてる？　色々と買ってきたの。
（先輩！）
つらさも吹っ飛ぶ朗報。すぐにベッドから這い出ると、壁に手を突きながら玄関へ。
鍵を開け、扉を開けば、そこに制服姿のともみがいた。
大きな買い物袋を両手に持っている。
「ごめんね？　起こしちゃった？」
「いいえ。ちょうど起きてましたから……。すみません、こんな格好で……」

今のヒカルは、上下ヨレヨレのジャージ姿。
「病人がそんなこと気にしないの。ベッドで寝てて。喉は渇いてる？」
「は、はい……」
「水道水よりこっちの方がいいわ」
風邪の時、ご用達の清涼飲料水をコップに注いでくれる。
「持てる？」
「あ、はい……。大丈夫です。すみません……」
ヒカルはぐーっと一気飲みした。
「はぁ……っ。うまいっす」
「お腹は空いてる？」
「大丈夫です」
「最後に食べたのはいつ？」
「……たぶん、昨日の夜だと思います。ぜんぜんお腹が空かなくって」
「駄目じゃない。風邪にはまず栄養をつけないと。治るものも治らなくなるわよ？」
「……すみません」
「何か簡単に作るわね。キッチン借りても？」
「あ、でも……」

「遠慮しないで。ヒカルくんは寝てて」
やんわりとした口調だが、ともみには断固たる意思を感じ、「あ、はい……」とヒカルは引き下がった。

うとうとしてるヒカルだったが、とてもいい匂いに意識が覚醒する。すると、さっきまでちっともお腹が空かなかったのに、ぐっ……と腹の虫が鳴いたのだった。
（お腹空いた）
一日ベッドで唸って初めてのこと。
香りは醤油ベースで、もしかしたら鰹節も入ってるかもしれない。
耳を澄ますと、クツクツと何かが煮立つ音も。
トントン、と扉をノックされた。
「はいっ」
「ヒカルくん、起きてる？」
「起きてます」
扉が開くと、制服の上にエプロンを羽織ったともみが現れる。
ともみは、土鍋と取り皿などを乗せたプレートをサイドテーブルに置いた。
土鍋のフタを開けると、温かな湯気と一緒に美味しそうな香りが部屋中に広がった。

「どうぞ」
ともみは、おじやを取り皿に盛りつけると、箸と一緒に渡してくれる。
「ありがとうございます……っ」
ヒカルは、ともみの優しさに少し泣けた。
ともみはにこにこと微笑みながら、そんなヒカルを見守ってくれている。
ふーふーと息を吹いて冷まし、おじやをハフハフと食べた。
「どう？　味は分かる？」
「分かります」
お米を噛みしめると、じゅわっと甘いおじやのお汁が口の中いっぱいに広がる。
一度口に入れれば、夢中で掻き込んでいた。
「ヒカルくん、そんな慌てて食べなくても大丈夫よ？　ずっと一日食べてないから、お腹がビックリしちゃうし」
「は、はい」
それでもやっぱり、掻き込まずにはいられない。
「もう……っ」
苦笑いしたともみは、ティッシュを差し出してくれる。
「ありがとうございます。すごく美味しかったですっ。先輩って料理を作るのがお上手なんですね」

「ふふ。褒めてもこれ以上は何も出ないわよ？」
「いえ。色々とやって下さっただけで幸せですからっ」
「それじゃあ、薬を飲んで」
水と薬を渡される。薬を水で流し込んだ。
「それじゃ、眠って」
「すみません、先輩……。こんなに色々してもらっちゃって……」
「いいの。だっていつもわたしが、ヒカルくんにお願いしてばっかりなんだから。こういう時くらい、お礼をさせて」
ヒカルは目を閉じる。
お腹がいっぱいになったり、薬の効果も手伝って、あっという間に意識を手放した。

目が覚めると、もう午後十時だった。
眠りすぎたせいか、変な時間に目覚めてしまった。
（風呂で汗だけでも軽く流さないと……）
そんなことを考えながら、寝室を出る。
「先輩!?」

ソファーに座ったともみが、ノートを広げて宿題をしていた。
「起きた？」
「か、帰らなくて大丈夫なんですか!?」
「うん、家には連絡してあるから大丈夫……って、ヒカルくん！　ひどい汗じゃないっ！　すぐに拭かないと！」
「あ、は、はぃ……」
浴室に向かい、パジャマ代わりのジャージを脱がし、下着も脱がしてくれる。
「バスタオルはどこ？」
「脱衣場の棚にあります」
ともみが脱衣場の方へ向かってしばらくして、「お待たせっ」と、戻ってくる。
「え!?」
ヒカルは唖然としてしまう。ともみはなぜか、ナース姿だった。
ナースキャップに白のブラウスとスカート、そして白いストッキング。
「汗を拭くね」
「じ、自分でできますから」
「病人が遠慮しないで。それに、背中は一人じゃ拭きにくいでしょ？」
「……お願いします」

ともみが、胸の辺りからバスタオルで汗をぬぐってくれる。
「うっ」
タオルが乳首をかすめると、思わず声が漏れてしまう。
「大丈夫？」
「あ、はい。続けて下さい……っ」
バスタオルが、ヒカルの胸からお腹へと移動する。
（気持ちいい……っ）
ともみの手が優しく乳首を抓んできた。
「うう!?　ともみ、先輩!?」
ヒカルがびっくりすると、ともみはくすくすと笑う。
「乳首がツンと勃っちゃって……。本当にヒカルくんは気持ちいいみたいね」
「……あ、は、はぃ……うぐ!?」
「それに、こっちも」
ともみが優しくペニスに触れてきた。

乳首どころではない気持ちよさが、疼きとなってペニスを走り抜けた。
「このち×ぽがいつも、わたしを気持ちよくして、おっぱいが出るようにしてくれて

るのね。ありがとう……♡」

両手で棹を優しく包み込まれ、入念に磨かれる。気持ちいいのだが、不満は残る。

（もっと激しく扱いてくれればいいのにっ）

もどかしさに、腰がヒクヒクと小刻みに動いてしまう。

ともみが熱いため息をつく。

「ヒカルくんのち×ぽ、すごく硬くなっちゃってる……っ♡　ガチガチで、まるで鋼みたい……♡」

「ヘクシュッ！」

思わずくしゃみをしてしまう。

「ヒカルくん!?　平気!?」

「だ、大丈夫です。ただのくしゃみですから……」

「だめだめっ。治りかけが、またぶり返しちゃったら大変だもの……。だから、やっぱりこういう風にした方がいいわね」

「せ、先輩？」

ともみはおもむろにナース服の胸元をくつろげると、その豊満な胸を露わにする。

乳首がツンと勃っていた。

「せ、先輩――」

「こうすれば、身体が冷えないはずっ」

ともみが、抱きついてきたのだ。

ふわふわした胸が、硬い乳首が、ヒカルの胸板を押し潰す。

柔らかさだけではない。

じんわりと染みてくるともみの温もりが、堪らない。

「ど、どう？　温かい？」

ともみが、上目遣いに聞いてくる。

「温かいですっ。それに、先輩のおっぱいをすごく感じられます……」

「そう言ってもらえて、嬉しい♡　ヒカルくんに、早く元気になってほしいと思って、スマホでいろいろと検索したから♡」

「俺のために、ですか？」

そんなことを言われたら、どうしたって反応してしまう。

「あんっ♡」

ペニスにお尻を叩かれたともみが、身動ぐ。

「本当に元気なんだから……っ♡」

「す、すいません」

「謝らないで♡　それじゃあ、動くね？」

「動く？」
ヒカルが理解できないでいると、不意に身体を動かし始める。
ぷりぷりした胸が弾みながら、身体に吸いつく。
（最高すぎるっ！）
ともみのぷりぷりしたおっぱいが、気持ちいい。
「ひゃっ♡」
ともみがいきなり素っ頓狂な声を上げた。
「先輩、どうしました？」
「お、お尻に、あなたのち×ぽが……」
「えっと、どうにか位置をずらしますので……」
「う、ううん。平気よ……。わたしがやるって決めたんだから、それに、ち×ぽもしっかり綺麗にしなきゃいけないものね」
ともみは、さらに身体を動かす。

（ヒカルくんの身体、引き締まってる……っ♡）
勃起した胸を擦りつけるたび、背筋にビリビリと電流が閃く。
「あぁっ……ん♡　んっ……♡」

知らず知らずのうちに息が弾んだ。
（今日はヒカルくんの看病をするんだから、いやらしい気分になっちゃ駄目。ミルクを出したいって思っても、ちゃんと我慢しないとっ）
ともみは、お尻に密着する硬い感触に、「ひぃんっ♡」と声を上げてしまう。
振り返ると、力強く反り返ったペニス。
「こっちもしっかりと気持ちよく……いえっ、綺麗にしないとね……っ♡」
「先輩、無理しなくても……」
「無理なんてしてないわ」
ともみは、ヒカルの逸物とお尻を密着させる。
「ンン……ッ♡」
（どうしてこんなにち×ぽって熱いの……？）
鼓動が駆け足になってしまう。
ともみはペニスをお尻で押し潰す。
「ぐううっ!?」
「あ、ごめんなさいっ。痛かった……？」
「いえ、突然だったんでびっくりしただけです」
「そ、そう……」

（お尻の下で、ヒカルくんのち×ぽがビクンビクンって脈打ってる……っ）

ヒカルのペニスを押し潰したまま、お尻を動かして圧迫する。

「どう？　気持ちいい？」

「はい！　いいですっ！　先輩のお尻のスベスベした感触がすごくよくって……！」

と、その時、「あっ！」と、ともみは思わず声を上げてしまう。

「どうしたんですかっ!?」

「い、いえ……なんでもないわ……んんっ♡」

ともみは眉をひそめた。

今、ペニスがさらに大きく膨れたのだ。

先端部分のまるで鏃（やじり）のように笠を広げた部分が、お尻を引っ掻いた。

キュン……ッ。ペニスの気配に身体が発情して、下腹が切なく疼いてしまう。

「ふぁ……♡　ぁんっ♡」

（このままじゃおかしくなっちゃう……）

ともみは腰を持ち上げた。

お尻の圧迫から解放されたペニスが、荒っぽくしなりながら天井を向く。

「うぅ……先輩ぃ……っ」

ヒカルがまだやってほしいとそんな眼差しを投げかけてくる。

「ち、ち×ぽは、この辺りでいいわよね。それじゃ次は……あ、足をやるわね」

ともみはいきなり右足にしがみつく。

「う！」

太腿に胸を押し当てながら身体を前後に動かして、全身を使って拭かれる。

「んっ……♡　んぅ……っ♡」

ともみが熱心に動いていると、顔に熱く硬いものが当たった。

「っ！」

ペニスだった。青筋を立てて脈打つものが顔に当たったのだ。同時に、咽せてしまいそうなくらい濃厚なホルモン臭が、鼻腔になだれ込んでくる。

（あ、駄目……っ）

胸が内側から張り詰めて疼き、ともみは動けなくなってしまう。

（は、早く動かないとヒカルくんに変だって思われちゃう……）

しかしそんな心の動きを、ヒカルはお見通しだったらしい。

「先輩、おっぱい出そうなんですか？」

「ち、違うの。これは、あの……っ」

「遠慮しないで下さい。俺のを搾ってくれて大丈夫ですから」

「ううん、駄目。ヒカルくんは風邪なんだから……」

「風邪は先輩が作ってくれたおじやのお陰で、もう平気ですっ。それより、先輩につらい思いをさせたくないんですっ」
「ひ、ヒカルくん……っ♡」
と、ヒカルが身体を起こそうとする。
「駄目よ、ヒカルくん。いつもみたいにヒカルくんにばっかり、頑張ってもらうようなやり方じゃ……。今日はわたしがヒカルくんのナースなんだから。わたしにやらせて。ね？」
「え？」
「……身体が冷えちゃわないようにすぐに終わらせるから」
ともみは上半身を起こすと、ペニスを愛おしそうに撫でれば、スカートをまくり上げようとして動きを止めた。
「……ヒカルくん、そんなにじっと見ないで……♡　恥ずかしいから……っ♡」
「す、すみません！」
ヒカルは目を逸らす。
（……ヒカルくんったら、そんなに熱心にわたしを見て……♡）
改めてともみはスカートをまくり上げれば、白いストッキングを留めていたガーターベルトがのぞく。ゆっくりと腰を落とす。

クチュ。
「んんんっ♡♡」
ゆっくりと秘裂が広げられ、ヒカルのペニスが食い込んでくる。
「アアアッ……♡　ヒカルくん♡」
浴室に、ともみのあられもない声が反響した。
「風邪なのに、こんなにち×ぽが逞しいだなんて……っ」
「風邪なんて関係ないくらい先輩が素敵だからですっ」
「そ、そんなこと……っ♡」
そんな優しい言葉をかけられてしまうと、秘処が反応してきつく締めつけてしまう。
「ともみ先輩っ!?」
熱く逞しいものが、深い部分に達している。
溢れるラブジュースが潤滑油になって、深いところにまできていた。
「ヒカルくん……っ♡」
思わず下腹を撫でてしまう。確かにそこで、ヒカルを感じていた。
「ヒカルくん、動くね？」
「は、はぃ！」
腰を前後にそっと動かす。

「ンンンッ♡」
奥を突き上げられる快感に、全身に電流が走った。
意図せず締めつけが強くなり、足の指をぎゅっと丸めてしまう。
「……ヒカルくんが中にくるぅぅぅ……っ♡♡」
ともみは背筋を仰け反らせた。

「うう！」
柔らかな蜜肉に締めつけられる。肉棒に快感が走り、ヒカルは呻く。
苦しいのではない。気持ちいい。
ともみは腰をクネクネと淫らに動かしながら、ヒカルの男根を咥え込み続けてくれている。
胸がたぷんったぷんっと、ともみの動きに合わせて弾んだ。
激しい動きに、ナースキャップがずり落ちそうになるのも構わず、ともみはヒカルの男根に夢中だった。
「あんっ♡　ヒカルくんっ♡　ヒカルくぅんっ♡」
毛先を躍らせ、ともみは身悶える。
交わっている場所から、ヌチャヌチャとエッチな音がしていた。

「あ、あと、もうすぐだから♡　ヒカルくんの風邪を悪化させないように、ちゃんとするから……♡」
理性的な面を出しながらも、その顔は悦びに蕩けていた。
それがなおさらヒカルの劣情をかき立てる。貞淑なともみも、母乳が出したいあまり自分でペニスを呑み込んで悶えるともみも同じともみなのだ。
「あああんっ♡　ひ、ヒカルくん……っ♡　いきなりち×ぽをビンビン揺らさないでっ♡」
ヒカルは、さっきから挑発的に弾んでいるおっぱいを握りしめた。
「あああああんっ♡♡」
きつく秘処が締まった。
「先輩、イってくれたんですね」
「だ、だめっ♡　おっぱいをそんなにぐにゅぐにゅ揉まないで……っ♡　う、動けなくなっちゃう♡」
「先輩の身体を綺麗にしたいだけなんですっ。さっき俺にやってくれたことを返したいんですっ」
おっぱいを手の中で形が歪むほど握りしめながら、手の平で乳首を潰す。
「あああああっ♡　ひ、ヒカルくんったら、本当にやんちゃなんだからっ♡」

ともみは何かに突き動かされるように、腰を前後に動かす。
さっきの比ではない。
股間がもぎ取られそうになるくらい強く膣肉が吸いつきながら、ぬるぬるザラザラした膣壁に包み込まれ、扱かれる。こらえきれず、腰を突き上げてしまう。
「ンンンッ♡」
ヒカルの突き上げに合わせて、二つのおっぱいがぶつかり合って、ぴたんぴたんと音を立てた。
「だ、駄目だよ……♡　きょ、今日はわたしが最後まであなたを導くんだからっ♡」
ともみは今回は流されることなく、ヒカルを責め立ててくれる。
「せ、先輩……っ！」
ビクビクと、ペニスが切なく疼く。
「で、出るのねっ♡　だ、出してっ♡　わたしの中に、あなたの精液を……っ♡」
ともみが射精を促すように、膣圧をきつくする。
「ううう!!」
びゅるっ！　びゅるるっ！　どぴゅぅうっ！
「あああああ♡　きちゃうっ♡　ヒカルくんの精液、わたしの中にたくさん出て、イクウウウウッ♡♡」



ともみの嗚咽が反響する。
蜜孔が絶頂の痙攣を紡ぎつつ、ますます締めつけてきた。
精液を一滴残らず吸い尽くされてしまう。
「ひ、ヒカルくんの精液で、わたしのおっぱい出ちゃううっ♡」
ともみは自分の胸を搾りながら、仰け反る。
「ンンンンン……♡」
プシャアアアッ!!　威勢よく母乳が噴き出す。
「せ、先輩……っ！」
ヒカルは、こぼれる母乳をすべて口で受け止めた。
ほんのりと甘く、そして熱い。
「あああっ♡　あああんっ♡　出ちゃった……っ♡　あ、ありがとう、ヒカルくん……っ♡」
「いえ、俺は何もしてません……。それどころか、先輩のお陰で、すごく楽になった気分です。母乳って栄養満点じゃないですか。風邪の時にはこれ以上のものはありませんよ！」
「ヒカルくんってば……♡　さ。もうベッドに戻りましょう♡　ね？」
ともみに促され、立ち上がった。

翌朝、ヒカルが目覚めれば、昨日の不調が嘘みたいに消えていた。
（すげえ！　これも全部、先輩のおじやと母乳のお陰だっ！）
どうお礼をしたらいいだろうか。ともみのことだから、いつものお礼だと言って断ろうとするだろうが、どうにか感謝を伝えたい……。
と、ヒカルはいい匂いを嗅いだ。
（……味噌汁？）
近所で味噌汁を作っていて、その匂いが入ってきているのだろうか。
ヒカルは部屋を出る。
「っ!?」
「ヒカルくん、おはよう」
「お、おはようございま……って、先輩!?」
そこには制服の上からエプロンをしたともみ。
頬を思いきり抓った。痛い。
「……えーっと……？」
ヒカルは、頭を整理しようとする。
確か昨日お風呂から上がり寝入ったあと、ともみは帰ったはずだ。

「……せ、先輩はお帰りになったはずじゃ？」

ともみが、少し照れくさそうに言った。

「実は心配になっちゃってあれから戻ってきちゃった。だって、わたしと激しいエッチをしたせいでまた体調が悪化したらどうしようって不安になって……。ヒカルくんってば、カギ開けっ放しで寝ちゃうから。不用心でしょ？」

「つまり、先輩はここで一夜を？」

「うん。――さ、そんなことよりも朝ご飯ができたから、一緒に食べましょう」

食卓を見れば焼き魚に納豆、つけもの、玉子焼きに白いご飯などなど、豪勢な朝食が並んでいる。

「お口に合えばいいんだけど」

「ぜ、絶対合います！　合うに決まってます！」

「ふふ。それじゃ、座って」

（新婚さんみたいだ……）

ヒカルは感動しながら、席に着いた。

第七章　冬は温泉旅行～新婚さんみたいに先輩と……

冬。ヒカルは首をすくめながら、登校する。

校舎に入って初めて息を吐けた。

（こういう時は、温泉が最高だよなぁ）

そんなジジイ臭いことを考えてしまう。

というのも、昨日何気なく観たテレビで温泉特集をしていたのだ。

風情のある旅館。周りは自然で溢れ、鳥の声や川のせせらぎが、耳を慰める。

食事は、山海の珍味の数々。

そして天然温泉。そこで、ヒカルと一緒に入るのは……。

（先輩……！）

そんな妄想をしてみてもお金もないし、夢のまた夢。

「はぁ……」

ため息しか出ない。そんな感じで教室に到着して教科書の整理をしていると、教室の出入り口でともみを見かけた。

ともみは、小さく手を動かしてヒカルを呼んでいる。

他のクラスメートに気付かれないように向かう。

人気のない場所へ移動する。

「先輩、どうかされました？」

「今週末、予定はある？」

「いいえ。特に……」

「実はね、私の親戚がやっている旅館があるんだけど、一緒に行かない？　今はお客さんが少ないみたいで、よければって言って下さったんだけど」

「本当ですか!?　実は今日、先輩と温泉に行きたいなぁみたいなことを考えてたんです！　あくまで妄想レベルなんですけど……」

「ふふ。それならちょうどよかったわ。二人で楽しみましょう」

駅で待ち合わせることを決め、ともみと別れる。

（本当にともみ先輩と温泉旅行ができるなんて……）

飛び上がりたい気持ちを抑え、平常心で教室に戻った。

そして週末。ともみと一緒に特急電車や私鉄を乗り継ぎ、ようやくたどりついた頃には午後三時くらいになっていた。

駅を出ると、街中とは違い、空気が軽かった。

駅前は静かで誰もいない。空気が澄んでいるせいか、遠くの山まで見通せる。

山はすっかり雪化粧。

駅前のそこかしこで、除雪されたであろう雪が道の端に溜まっている。

「なんだか空気が綺麗な気がしますね」

ヒカルは深呼吸をする。

ともみは、うーんと大きく伸びをした。

「そうね。でもさすがに移動しすぎで肩凝っちゃった」

「俺もです。これからどうするんですか？」

「あのバスに乗るの」

タイミングよくやってきた赤いバスを、ともみが指さした。

「行きましょっ」

バスの行き先には『白山温泉（しらやまおんせん）行き』と書かれている。

山道をバスに揺られながら進むこと、二十分。
立派な門構えの前でバスは停まった。ともみと下車する。
「ここですか？」
「そうよ」
「なんだかすごい、ですね……」
こういう高級旅館に縁がないヒカルは気後れしてしまう。
それを察したともみが、「大丈夫」と笑いかけてくれる。
「お客さんはわたしたち以外、誰もいないから。だってすっごーく遠いし、今は雪も降ってるし」
「そうなんですね。こんなすごい旅館を俺たちが独占できちゃうなんて、すごく贅沢だ……」
「行きましょ」
ともみに続いて旅館に。着物姿の女将（おかみ）さんが出迎えてくれる。
「ともみちゃん。よく来たわね。お友達もようこそ」
ヒカルはガチガチに緊張しながら頭を下げた。
「お、お世話になります……っ」
「どうぞ」

女将さんに案内され、離れへ。
部屋に入ると、い草（くさ）のいい香りがした。
テーブルには、雪でできたウサギがお盆に載せられている。
「可愛い」
ともみは嬉しそうに雪ウサギを眺めた。
座椅子に座ると、女将さんにお茶を淹れてもらう。
「ともみちゃん。夕食は午後六時からで、温泉は室内風呂、それから本館の方に露天風呂があるから、お好きなのをどうぞ。どちらも温泉よ」
「ありがとう、おばさま」
「今は雪見風呂が最高だから、楽しんで」
女将さんは頭を下げて、部屋を出ていった。
ヒカルは部屋の丸い形の障子窓を開ける。
雪が再び降り始めたらしい。
白い綿雪が数えきれないほどたくさん、曇天の空から落ちてきていた。
手を伸ばして雪を手に取る。街みたいにすぐに溶けて消えず、形を残し続けた。
ベチョベチョもしておらず、さらさらのパウダースノー。
「旅行って感じですねっ」

「ふふ。感じ、じゃなくって本当に旅行なんだよ？」
「で、ですね。――あ、あの、ともみ先輩！」
「はい」
ともみがにっこりと微笑む。
ヒカルは、自分から声をかけておいて目を逸らしてしまう。
「もう、人を呼んだのに無言？」
「えっと、そうではなくって……。お風呂に入りませんか？」
ともみは少し目を伏せ、うなずく。
「……そうね。せっかくお風呂があるんだから」
（恥じらう先輩、可愛い）
ヒカルは、ドキドキしてしまう。
「先輩、おっぱい出そうなんですよね？」
「え！　ど、どうして……」
ともみは唖然とした。
「分かります。何度先輩がミルクを我慢してる顔を見てると思ってるんですか？　気を遣うなんて今さらですよ」
「でも……せっかくの旅行なのに……」

「いいんですっ。先輩に気持ちよくおっぱいを出してもらうのも俺の大切な役目ですし！　さあ、入りましょう！」
「……お願いします」
ともみは頬を染め、呟いた。
「あ、あの、ヒカルくん、先に入ってて？」
「分かりました」
きっと服を脱ぐ姿を見られたくないのだ。微笑ましくて、口元が緩んでしまう。
ヒカルはいそいそと服を脱ぎ捨て全裸になるとかけ湯をして、ヒノキで造られた浴槽に浸かった。
「はぁぁぁ～～～」
思わず間の抜けた声が出てしまう。
温泉としてイメージする硫黄臭さはないけれど、身体が芯から温まってくるような気がした。しばらく温泉のありがたみにひたっていると、扉が開いた。
「先輩！」
彼女はバスタオルを巻いて、胸を隠していた。
バスタオルの裾からはむちむちした足が伸びる。
「失礼します……」

「あ、はい、どうぞ……」
ともみは少し逡巡したような様子だったが、すぐにバスタオルを外すと、たぷんと肉感的なバストをこぼす。
かけ湯をして、浴槽に入った。
「はぁ……っ♡」
ともみは鼻にかかった艶めかしい声を上げた。
ヒカルはドキッとしてしまう。
「温泉、気持ちいいね」
「で、ですね」
ともみの限界まで膨らませた風船みたいにたわわなおっぱいが、湯面に浮いていた。
「ともみ先輩」
目で触ってもいいかと訴える。
「……う、うん」
ともみがおずおずとうなずくのを見届け、ヒカルはおっぱいに優しく触れる。
「ン……ッ♡」
ともみがピクンと肩を跳ねさせる。すでに乳首はツンと硬く尖っていた。
ヒカルはゆっくりと指先に力をかける。

「ぁああっ♡　ひ、ヒカルくん……っ♡」
モチモチして、指に吸いつく乳肌を手の中で楽しむ。
むにゅむにゅっと蕩けるような柔らかさの中に、指先をはね除けるような弾力感があって、いくら揉んでも飽きることがない。
甘い香りが鼻腔をくすぐった。温泉ではない。
（ともみ先輩の匂い……）
ともみは頬を染め、身動ぐ。
「ヒカルくぅん……っ♡」
ともみは鼻にかかった声を漏らした。
「気持ちいいですか？」
「う、うん……っ♡　あなたの手がすごく、気持ちいい……♡　でも恥ずかしい……っ♡　こ、こんなに念入りにおっぱいを揉んでもらいながら感じちゃってて……っ♡　お、おっぱいを出してもらうっていう目的があるのに……♡」
「これまでの経験だと先輩が気持ちよくなってくれると、よりおっぱいが出やすいので。だからどんどん感じて下さいねっ」
ともみは照れながら恥ずかしそうに言った。

「伊達にともみ先輩のおっぱい飲んでませんから」
ミルクがかなり溜まっているのか、おっぱいが下膨れている。
「だ、駄目……っ、そんな恥ずかしいこと言わないで……っ」
「ぜんぜん恥ずかしいことじゃないです。当たり前のことなんですから」
ともみが「ン……ッ♡」と声を上擦らせた。
「先輩？」
ともみの目が宙をさまよう。ヒカルが覗き込むと、「あ、当たってるわ……♡」そうともみはぽつりと言った。
「何がですか？」
すると、お湯の中でともみの手がそろりと動く。
「う……っ」
ペニスに触れられ、ヒカルは腰を引いてしまう。
「あぁっ♡　ヒカルくんのち×ぽだって、すごくパンパン……」
そのままともみの可憐な繊手で扱いてほしかったけれど、すぐに手を離してしまう。
残念だけど、いやらしいことをし続けているというのに、いつまでも初々しいのがともみでもある。
「わ、わたし、やっぱり……！」

ともみはいきなり立ち上がった。
「どうしたんですか!?」
「あ、あの……わたしのおっぱいを出してもらうためにあなたを誘ったわけじゃなくって……楽しんでほしくって……」
「俺は先輩と一緒にいられれば楽しいですから」
ともみは耳まで真っ赤にしている。
「分かりました。それじゃあ、お互いに顔を見なくてもいい方法で先輩のおっぱいを出せるようにしましょう！　それだったら、先輩も恥ずかしくないですよね？」
「そ、そんな方法、あるの？」
「あります！」
ヒカルは、ともみと一緒に浴槽から出た。そして、ヒカルは仰向けに寝そべった。
股間がビンッと力強くしなる。
「先輩。俺の顔にあそこを向ける格好で、俺のに先輩の顔が来るようにして下さい」
「え……」
「シックスナインっていう体勢です。これなら先輩も恥ずかしすぎて嫌になることはないですから」
「……そうかもしれないけど」

「来て下さい、先輩っ」
「……ヒカルくん」
ともみはヒカルに言われた通りの姿勢になりながら、ゆっくりとヒカルの上にのしかかってくる。
ともみの割れ目がすぐ間近に来た。
（いやらしいあそこ……っ）
ヒカルはごくりと生唾を呑み込んだ。
恥じらう彼女とは裏腹に、秘裂がヒクヒクと引き攣り、蜜を滲ませる。
「れろっ」
「ああぁっ♡」
ともみの肩がピクンと震えた。
口の中に甘い風味が広がっていく。
「先輩のあそこ、いやらしい味……っ」
「だ、駄目っ♡　そんなこと言わないでっ♡」
ともみは舌っ足らずな声を上げた。
「先輩もしゃぶって下さいっ」
「……わ、分かったわ」

ともみの息遣いを、ペニスに感じる。
ゾクゾクとした震えが身体を走り抜けていく。
「んん……っ」
ともみのしっとりとした唇が吸いついてきた。

男の人の匂いがしていた。ともみははしたなさを自覚しながら生唾を呑み込んだ。
すぐ間近に、青筋を立てて脈打つペニス。
「ぁあっ……んっ♡」
匂いを嗅ぐだけで、おっぱいがさらに張ってくる。
（あぁ、間近で見るととてもいやらしい形をしてるのね……）
まるで女性を突き殺してしまう武器のよう。
でも実際は真逆。
ともみは何度もこれで気持ちよくしてもらい、ミルクをたくさん出してもらった。
脈打つペニスを両手でそっと握った。
「う……！」
ヒカルが声を漏らすが、それは苦しいのではない。
（ちゃんとヒカルくんを気持ちよくするの……っ）

ともみは大きく口を開き、ペニスを口に含んだ。
「んんん……っ♡」
（おっきい……っ）
ともみは目を細めてしまう。口の中いっぱいにホルモン臭が満ちた。
硬く脈打ったペニスを唇で締めつけ、顔を上下に振る。
「ンヂュッ♡　ヂュパァッ♡　レロッ♡　レロォッ♡　ンフゥッ♡　ヒカルくん……っ♡　んんっ♡　ヒカルくんのち×ぽ、すごく太いぃ……っ♡」
ヒカルが気を遣ってくれたことが功を奏したのか、ともみは自分でもびっくりしてしまうほどの積極さで、ヒカルのペニスをしゃぶった。
その時、ともみは秘処をしゃぶられる感触に、ビクンッと過激に反応してしまう。
「ひゃん!?」
「先輩。ここ、感じますか？」
ヒカルが刺激してくるのは、秘芽。そこはもう何度もヒカルは刺激してるから、気持ちよくなる場所だって分かってるはずなのに。
「か、感じちゃうから……っ♡　ヒカルくん、い、イジワルしないで……っ♡」
下腹がキュンッと戦慄いてしまう。
「先輩のあそこ、キュンキュン反応してる……。感じてくれて嬉しいですっ」

「あああっ♡　い、いじめないでっ♡」
ヌプッ。
「ンンンンンン……っ♡♡」
舌が膣内に入ってきた瞬間、ともみは軽く昇り詰めてしまう。
全身を痙攣が襲った。
（ヒカルくんの舌が、私の中をまさぐる……っ）
ともみは涙目で身悶える。
一度絶頂して昂ぶる膣肉を、ほぐすように舌が暴れ回った。
滲んだ愛蜜をヂュルヂュルッと吸われてしまえば、「あああんっ♡」とあられもない声を抑えられない。
「先輩もしゃぶって下さい」
「んんっ……ヒカルくんが何もしなかったらできてたのにぃっ……♡」
そんな恨み言を漏らすものの、ヒカルにいじめられた身体は発情して胸の疼きも一層強くなった。
（すごくおっぱいが張っちゃってる……っ）
乳首もビンビンだ。ビクビクっと口の中でペニスが暴れた。
「ひ、ヒカルくん、出そうなのね」

「は、はぃ……！」
ヒカルが余裕のない声を上げた。
喉の奥を圧迫しているペニスが、切なげに戦慄く。
口を窄め、ペニスを搾り上げる。
「と、ともみ先輩……っ！」
（きてっ！）
ともみが求めたその時、ビュルルルウッと勢いよく子種がしぶく。
「ンンンンンン……!?」
ドロドロの子種。
噎せ返りそうなくらいの臭気を溜め込んだ精液が、なだれ込んでくる。
ヒカルの陰毛が顔にひっついてしまうのも構わず、しゃぶった。
（あぁっ……！　お腹が燃えちゃう……っ！）
「ヒカルくんの精液で、出ちゃう……っ♡♡」
プシャアアアアッ!!　勢いよく母乳を噴き出してしまう。
甘い香りが浴室に広がった。
「んん……っ♡」
ともみはまだ噴乳の余韻が残る胸をジクジクと疼かせ、ぐったりした。

ヒカルは、ともみがぐったりした様子に驚く。
「先輩！　大丈夫ですかっ!?」
「え、ええ……っ」
ともみは目元を紅潮させ、口の端からヒカルの精液が滲んでいた。
「ヒカルくん……。あ、ありがとう……。でも今は、ヒカルくんのち×ぽを直接相手をしてあげられなくて、ごめんなさい」
「謝らないで下さい。先輩に口でしてもらっただけですごく嬉しかったですし。……先輩、もう一度お風呂に入りましょう」
「うん」
ヒカルは、ともみに手を貸して起こした。

夕食を食べ終わると、くつろぐ。今ヒカルは一人。
ともみは、叔母でもある女将さんと話しに行った。
障子窓を開けて外を見ると、かなり雪が積もっている。
（ほんとうに静かだな……）
街とは違って、何の音もしない。

まるで、すべての音を雪が閉じ込めているみたいに静か。
そうかと言ってテレビをつける気にもなれない。
そこへ、ともみが戻ってきた。ともみはヒカル同様、浴衣姿。
色はヒカルが青で、ともみはピンク。それがまたともみによく似合っていた。
「おかえりなさい」
「ただいま。ね、外に出てみない？」
「外？　雪を見に、ですか？」
「ううん。おばさまから聞いたんだけど、秘密のお風呂があるみたいなの。さっき、わたしばかり満足してしまったから。ね？」
「気にしなくても大丈夫ですよ」
「探険がてら、どう？　おばさまからお風呂セットも借りちゃったし」
ともみは行く気満々らしい。
「分かりましたっ。お供しますっ。ところでその温泉の場所は？」
「道順は地図に書いてくれたの」
手書きの地図を見れば、山の中に入るらしい。
「行ってみましょう！」

早速、女将さんの手書きの地図を頼りに、真っ白な新雪の地面に靴の跡を点々と残しながら旅館の裏手にある山へ向かう。
山と言っても、道は開けているし、勾配も緩やか。
それに後ろを振り返れば、旅館の明かりもしっかりと見ることができた。
（これなら迷わないな）
二人は浴衣に上着を羽織っていた。
それでも、身体の芯から凍えてしまいそうなくらい寒い。
息を吐くだけで、真っ白に染まる。
ヒカルたちは面白がって息を吐き合った。
二人の白い息が混ざり合いながら、今もしんしんと雪が降り続ける雲へ吸い込まれていく。
「きゃっ」
「おっと、先輩っ」
雪に足を取られて倒れそうになるともみを支えた。
「あ、ありがとう」
「いいんです……」
浴衣ごしに、彼女の温かなぬくもりを感じる。

さらに少し襟元がはだけていて、青いブラジャーがのぞいている。
「さあ、行きましょう」
ヒカルはともみの手を引きながら地図を見る。
やがて、林の向こうから白い湯気が上がっているのを見つけた。
行ってみると、そこには脱衣場を兼ねた小屋、そして露天風呂があった。
「先輩、先に行ってますね」
ヒカルはさっさと服を脱いでしまうと、露天風呂へ続く扉を開けた。
「おぉ……！」
まさしくこれは、秘湯というやつではないか。
お風呂の周りには天然の岩が配置され、ザ・露天風呂という風情。
（普通のお湯、だな）
特に白く濁っているわけでもなく、澄んでいる。
（まあ温泉に浸かって悪いことはないかっ）
かけ湯をしてから浸かった。
「やっぱり温泉はいいなぁ」
「――お待たせ、ヒカルくん」
「先輩。すごく温かいですよっ！」

「失礼します」
ともみはかけ湯をして、ヒカルの隣に浸かった。
と、しばらくしてともみが自分の身体を抱きしめる。
「ね、ねえ……このお風呂、何か変じゃない、かな……？」
「変ですか？　いえ、普通のいい温泉ですよ？　――先輩。顔が赤いですけど、平気ですか？」
頬の赤みだけではない。
肩を大きく上下に揺らし、さっきからしきりに鼻にかかった声を漏らしている。
「もしかしてのぼせて……？」
ともみがヒカルを見つめた。
その瞳は艶めかしく潤んでいる。
「先輩――うわっ!?」
ともみがいきなり抱きついてきたのだ。
たわわな乳房が、ヒカルの胸板で潰れた。
「い、いきなりどうしたんですか？　あ、俺としてはすごく嬉しいんですが……」
ともみは執拗に胸を密着させる。
ともみは両手で、ヒカルの顔を挟んで、視線を絡める。

「先輩？　本当にどうしたんですか……？」
「ヒカルくんが欲しいのっ。すぐにそのち×ぽにむしゃぶりつきたいっ♡」
「おっぱいが出そうってことでしょうか？」
今すぐ？　ヒカルは混乱してしまう。
明らかにいつものともみではない。
ともみはヒカルに見せつけるように、舌なめずりをしてみせた。
「さあ、そこに腰かけて」
軽く胸を突かれ、ヒカルは温泉を囲んでいる岩に座る。
「ヒカルくんのち×ぽ、まだ大きくなってないじゃないっ♡」
ともみはほっぺを膨らませた。
「す、すみません。いきなりだったもので……」
「本当にしょうがないんだから」
目の前にいるのはともみなのに、まったく別人のよう。
「ううう……!?」
いきなりペニスを握られ、ヒカルは呻いた。
「ほら。わたしの手の中でどんどんち×ぽが大きくなってるっ♡　ほうら、ち×ぽが充血しちゃってる……♡　わたしのおま×こに早くぶち込みたいって思ってるんでし

ょ？」
（先輩どうしちゃったんですか!?）
困惑しながらも、ともみの責めをこらえきれず、ペニスはますます太くなる。
「あぁっ♡　すごくエッチになったわね、ヒカルくんっ♡　……ちゅっ♡」
ともみはペニスに口づけをしてくる。
「うう！」
（こ、こんな積極的な先輩も素敵だ!!　で、でもいきなりどうして……!?）
ともみが、淫らな眼差しを逸物に向ける。
「ピクピク震えちゃってる♡　すぐにしゃぶってあげるからねっ♡」
ともみは、アイスクリームを舐めるようにペニスをしゃぶってくる。
ともみらしからぬ積極的なフェラチオに、ゾクゾクしてしまう。
ペニスは、ともみの舌遣いを喜ぶようにビクンビクンと荒っぽく震えた。
「んちゅっ♡　ちゅぴぃっ♡　れろっ♡　んんぢゅぅぅっ♡　たくさん我慢汁が溢れて……ぢゅるるっ♡　裏筋を刺激してあげると、本当にエッチになるのねっ♡」
はしたないくらいの愛撫に、ヒカルは呻くことしかできない。
「ちゅぱぁっ♡　ちゅぷぅっ♡　れらぁっ♡」
まるで見せつけるみたいにともみは、激しいフェラチオをする。

唇や舌を忙しなく使いつつ、さらにともみは玉袋を握ってきた。
「先輩ぃぃ……!?」
「へえっ♡　ヒカルくんは玉袋が好きなのねっ♡　……それなら、舐めるのはこっちの方がいいかもっ♡」
ともみは普段の彼女なら絶対しないであろうこと——玉袋をしゃぶってくれる。
「ううう！　と、ともみ先輩っ！　それ、ヤバすぎますからぁっ!!」
「ふふっ♡　ほうら、あなたが感じるタマタマをわたしが舌でしゃぶってあげてるわよ？　ち×ぽがビクビクして、嬉し泣きしてるのがよく分かるっ♡」
さらにともみは玉舐めをしながら、ガチガチに強張ったペニスを扱き立ててくる。
「ヒカルくん、我慢しないでっ♡　ヒクヒクしちゃってるし、玉袋も硬く強張っちゃってるっ♡　もう出そうなんでしょ？」
「す、すみませんっ！　先輩ぃぃぃっ!!」
射精しようとした瞬間、ともみは顔を玉袋から離すと、先っぽを咥えた。
びゅうるるっ！　どぴゅっ！　びゅるぅっ！　びゅるるっ！
勢いよく放たれた子種を次々と飲み下してくれる。
「んんっ♡　んふぅっ♡　ぢゅぴぃっ♡　んぐっ♡　んぐぅっ♡」
喉を大きく揺らし、飲んでいく。

「んちゅっ……♡　はぁぁあ……っ♡」
ともみは悩ましいため息を漏らすと、胸からプシャアアッと勢いよく母乳を噴いた。
「んんんんんん……っ♡　や、やっぱりヒカルくんの精液を飲むとたくさんミルクが出せるから……ぁあんっ♡　すごく素敵ぃっ♡」
「先輩、な、なんだかすごく積極的ですね……？」
「わたしにだって、時々はこうして求めたいって日もあるんだから♡　ヒカルくんはこういうわたし、嫌ぃ？」
「まさか！」
「嬉しいっ♡　……ヒカルくんのち×ぽ、まだ精液を出し足りないみたいね」
ともみはヒカルの首に両腕を回すと、大股を広げて膝の上に乗っかった。
「先輩!?」
ふふ、とともみが妖しく笑う。
「今日のヒカルくんってば、驚いてばっかりっ♡　あなたもわたしに身をゆだねて♡一緒に気持ちよくなりましょ？」
ともみが胸を、顔に押しつけてくる。
少しの刺激を与えるだけで、プチャッと母乳がしぶく。



ヒカルはそれを浴びるように飲んだ。
（先輩の母乳、やっぱり美味しいっ）
ヒカルはともみのおっぱいに吸いつき、赤ん坊のようにおっぱいを揉んで授乳を促す。
「あああんっ♡　ひ、ヒカルくんがそんな風に悦んでくれて……んんっ♡　う、嬉しいぃ……っ♡　もっと飲んでっ♡　もっとぉっ♡」
ともみはヒカルに胸をしゃぶらせながら、腰を持ち上げ、男根を呑み込んだ。

ともみの秘処をかきわけ、男根が最奥にまで達する。
「あああああああン♡♡」
ズンッと突き立った男根の存在感に、ともみは背筋を弓反らせた。
ヒカルがいつものともみと違う、と驚くのも無理はない。
なにせ、一番驚いているのはともみ自身なのだから。
どうしてこんなにも積極的になって、普段絶対しないようなことをしているのか、ともみ自身も分からない。
でもとにかく、ヒカルのことが欲しかった。
ヒカルのすべての場所に触れたいと、強く熱望した。

「もっとおっぱい吸ってっ♡　わたしのあそこを突き上げてっ♡」
硬くゴツゴツした肉棒の感触に溺れながら、全身で感じる。
身体を大きく上下させるたび、胸がたぷぅんったぷぅんっと悩ましく上下に跳ねた。
ペニスが深い場所に来れば、全身に快感の電流が走り、「ひいいんっ♡」とあられもない声が出てしまう。
（すごくヒカルくんのち×ぽ、気持ちいい！）
その間もヒカルはおっぱいに夢中。
乳首をチュウチュウと吸い、いやらしく舌で弾き、母乳を促している。
「あああんっ♡　ヒカルくぅん、もっと飲んでっ♡　わたしのいやらしいミルクを飲んでっ♡」
母性愛が芽生える。
ヒカルは、ともみの期待に応えようとますます頬をへこませ吸いついてくれた。
「ンンンンン〜〜〜っ♡」
昇り詰めた。
しかしそんなことは関係ない。
絶頂感を引きずりながら、さらに腰を動かして、ヒカルのペニスを頬張った。
ヌチャ！　ズチュッ！　グチュッ！　ヌチャ！

糸を引くような音が、森閑とした世界に響き渡る。
「先輩！」
ヒカルもまた腰を突き上げてきた。
「はあぁぁんっ♡　んっ♡　んんっ♡　ひ、ヒカルくん、そうぅっ♡　もっと動かしてっ♡」
ともみは腰をクネクネ動かしながら、積極的にヒカルを受け入れる。
ヒカルのペニスが深い部分まで突き刺さり、そして引かれた。
広がっている笠肉に膣壁を抉られれば、腰がヒクヒクする。
普段ならそこですべて、ヒカルに身を任せていただろう。
でも今は自分から動きたくて仕方がない。
「ヒカルぅっ♡」
ともみは膣圧で、ヒカルのペニスを締めつけた。
「先輩ぃ!?」
ともみが腰を弾ませれば、蜜汁が泡立って淫靡な音を弾けさせる。
ヒカルの男根が柔肉と擦れ合うたび、背筋に快美電流が迸った。
その勢いのよさに、ズルッとペニスが抜けてしまう。
「あああんっ♡」

突然抜けてしまったので、ともみの秘処はペニスの形通りの穴がぽっかりと空いてしまう。

とろりと愛液が糸を引きながら垂れた。

「ひ、ヒカル……っ♡」

形の綺麗な桃尻をヒカルに向け、自らペニスを呑み込んだ。

「ンゥゥゥ……っ♡♡」

挿入と同時に、ともみは昇り詰めた。

ともみは胸を前後に揺らしながら、自ら腰をますます艶めかしく蠢かせる。

ヒカルの腰が、ともみのお尻を圧迫するたび、ぱちゅんぱちゅんと艶めかしい音を弾けさせた。

「イィッ♡　ヒカルがズンズン奥を突き上げてるぅっ♡　ンンゥゥッ♡」

ともみは声を弾ませ身をよじり、ますますヒカルのペニスを締めつけた。

「こういう先輩も好きです！」

口の周りをミルクだらけにしたヒカルはもう一度、自分から動く。

ともみのくびれ腰に手を回し、引きつけることでより一層密着感を深めた。

「ひいいいいいんんっ♡」

自分から動きたいと言っていたともみだったが、ヒカルに身を任せるように全身から力を抜く。

腰を動かせば、ともみのおっぱいは激しく前後に揺れる。

おっぱいを握りしめ、ともみの膣内を激しく貫いた。

「イクウゥゥゥッ♡」

ともみが再びおっぱいを噴き出す。

ミルクがお湯に広がり、あっという間にミルク風呂になる。

痙攣した柔肉が、ミチミチとペニスに馴染んだ。

熱いくらい火照った秘処。

滲んだ蜜があぶくを作りながらこぼれるのを横目に、ヒカルはますます腰を動かす。

「もっともっときてぇっ♡　わたしのあそこをとろとろに蕩けさせてっ♡　イきすぎてビクビクのあそこを、ヒカルの精液でグチョグチョにしてっ♡」

「と、ともみ先輩！」

ビクビクとペニスが戦慄く。

「きてっ♡　そのまま出してっ♡」

「ううううう！」

ヒカルは、ともみの膣内めがけ精液を迸らせた。

「ヒカルの精液、きてるっ♡　きてるうううっ♡　ンンンッ♡　い、イっちゃうぅっ♡　イクウウウウウウウ♡♡」

プッッシャアアアアアア!!

たっぷりのミルクが噴き出した。

「ん、ぅううん……っ♡　ぁあぁ……っ♡　ヒカル……今日のわたし、いつもと違うかもしれないけど、でも、ヒカルとのエッチ、気持ちよかった……♡」

「俺はいつも通り、気持ちよかったです……。先輩もたくさん出たみたいでよかった……っ」

ヒカルたちは繋がったまま、ともみのおっぱいで牛乳風呂になった温泉に浸かった。

ヒカルもともみも、心も身体もどちらもぽかぽかした状態で旅館に戻った。

ともみに聞いたが、やっぱり豹変した理由は分からないらしい。

自分でも自分が何をしているのか分からなかったが、とにかくヒカルが欲しくなった——と。

女将さんは帰りを待ってくれていたようで、お茶を振る舞ってくれた。

ともみがお手洗いに行っている時、女将さんがちょっといたずらっぽい笑みを浮かべ、ヒカルを見た。

「ヒカルくん、楽しめた?」

「あ、はい。とてもいい湯でした」

「あら、それだけ?」

「どういう意味ですか?」

「ここだけの話だけど……あれは、子宝の湯で、あそこに浸かった女性はとてもエッチに積極的に振る舞えるようになるの」

「ええ!?」

「普段すごく真面目なあの子が男の子と二人きりで来るなんてびっくりしてね。でもうまくはいかなかったのね」

女将は「残念」と言って、去っていった。

第八章　夏祭りの夜は～浴衣姿の先輩と妹を交互突きで

ヒカルが学校から帰ってくると、まるで見計らったようにケータイが鳴った。
相手は、すずか。
「もしもし、すずかちゃん？　どうしたの？」
「兄貴？　そろそろそっちに行こうかなって思って……。週末辺りどう？」
「連絡してくるの珍しいね。いつもいきなり来るのに」
「まあね。それで、行ってもいいの？」
「ごめん、その日は予定があって……」
「何？」
「が、学校の補習だよ。前回のテストで赤点取っちゃって」
「ええ！　一人暮らしだからって、ちょっとたるんでるんじゃない？」

「そ、そうだね……。ごめん。だからまた日を改めて、ね？」
「うん……。分かった」
すずかは、思いっきり不満そうな声で言った。
（よし！）
ヒカルは、心の中でガッツポーズを決めた。
すずかには申し訳ないが、その日はともみと夏祭りに行く。
話は数日前に遡る。

ヒカルは登校するなり、ともみの姿を探した。
ほうぼう色々な人に聞くと、図書室らしい。
なんでもともみは毎朝、図書室で自習をするのだとか。
（さすがは生徒会長……いや、ともみ先輩だ！）
廊下を早足で進みながら、図書室に入る。
ともみがいた。彼女以外、図書委員の姿もない。
「ヒカルくん、おはよう」
ヒカルが声をかけるよりも先に、ともみが気付いてくれた。
ヒカルはだらしない顔になっていることを自覚しつつ、「おはようございます！」

と言葉を返す。
「先輩、一人ですか？　図書委員の人は？」
「ふふ。朝なんてほとんど人は来ないもの。ヒカルくん、本を借りに来たの？」
「そうじゃなくって、先輩に用がありまして」
「何？」
「週末、予定などはありますでしょうか……？」
ともみは少し考える素振りを見せつつ、「ないわ」と言ってくれた。
「な、なら……俺と神社の夏祭りに行きませんか!?」
ともみは、笑顔でうなずいてくれた。
「行きましょう」
「やった！」
「ヒカルくん」
ともみは唇に人差し指を添えた。
ヒカルは慌てて声を落とす。
「す、すみません……。それじゃあ詳しいスケジュールはあとでまた……」
「うん。待ってるわ」

そんなことがあったのだ。
せっかく取りつけたともみとの約束。二人きりで楽しみたかった。
「そ、それじゃあ、き、切るね。またっ！」
ヒカルはすずかの気が変わらないうちに電話を切った。
「ふーっ……。なんとかうまくいった……！」
ヒカルは胸を撫で下ろした。

約束の当日。ヒカルは家で浮かれていた。
鼻歌を歌い、何度も鏡を覗き込んだ。
時計を見る。
（そろそろだ）
自然と鼓動が高鳴り、身体が火照ってくる。
（出るか）
浮かれる心を抑えようとするが、自然と早足になってしまう。
擦れ違う同年代はカップルだったり、友達同士だったり。
そんな人たちを横目に、
（やっぱりともみ先輩が一番だ！）

そんなことを思わずにはいられない。
人混みとは逆の方に進みながら向かった先は、駅前。
そこは人気がなく、閑散としている。
しかし、それだけ待ち合わせには都合がいい。
「先輩！」
ヒカルは大きく手を振った。
駅前にある謎のオブジェの前にいたともみが手を上げた。
（先輩、浴衣姿がすごく似合ってる！）
ともみはアサガオがちりばめられた青い浴衣に、ピンク色の手提げ袋を手にしている。もちろん、ともみの豊満なおっぱいは健在で、浴衣の胸元だけが分かりやすいくらい膨らんでいた。
「すみません！　待たせてしまって！」
「さっき来たところだから待ってないわ」
「先輩、浴衣、すごく可愛いですね」
ともみは頬を染める。
「あ、ありがとう……」
（付き合ってないけど、まるで恋人同士みたいだ!!）

二人で夜道を歩く。
「先輩はお祭り、好きですか？」
「うん。すっごく……。だから誘ってくれて嬉しいわ。生徒会のことばっかりで、実は誘われるまで夏祭りだって忘れてたから」
「そう言ってもらえると、誘った甲斐があるってものです」
おどけると、ともみは嬉しそうに笑ってくれた。
その時、きゅうっとお腹が鳴ってしまい、ヒカルははっとする。
ともみが気付いていないことを祈るが、
「ヒカルくん、いそごっ」
と、笑う。
「うう、先輩……」
「色々な食べ物が待ってるよ。お好み焼き、広島焼き、たこ焼き、綿アメ、イカ焼き、リンゴアメ、焼きそば、カルメ焼き、フランクフルト、それから……」
ともみは指折り数える。
「先輩、そんなに食べるんですか？」
「夏祭りを楽しむっていうのは、夜店を制覇するってことなのよ？」
「俺も頑張りますっ！」

「ヒカルくん、一緒に頑張りましょう」
「――あたしも頑張るっ」
「え？」
二人して顔を見合わせれば、そこにいたのは、
「すずかちゃん！」
暗がりから姿を現したのは、花火の柄の黄色い浴衣姿のすずかだった。
身長が高く、すらりとした体型だから、よく似合った。
「す、すずかちゃん？　どうしてここに？」
すずかは、やれやれという風に首を横に振った。
「テストの補習とか、そんな見え見えの嘘にダマされるわけ、ないでしょ？」
「……見え見えだなんて……」
「だから兄貴の部屋を張ってたの。そうしたら案の定……。そもそも補習に行くのにスキップするわけないし」
「う……」
ヒカルはがっくりとうな垂れてしまう。
一方、ともみは、「すずかちゃんも一緒で盛り上がるね」そう喜んでいた。
ともみがそんな様子だと、ヒカルは何も言えない。

「ともみ先輩、兄貴、行こっ」
ノリノリなすずかに引きずられるように神社へ向かった。

神社は人でごった返していた。
提灯や出店の明かりで眩しい。
人の話し声や出店の客引きの声、発電機の音なんかで賑やかだ。
気をつけてないと、すぐにはぐれてしまいそうな人の数。
ともみが不意に、ヒカルの右手を握った。
「あ……」
ひんやりして柔らかなともみの手の感触に、ドキッとしてしまう。
「せ、先輩、こんなところで……」
「違うよ。手を握っていれば、はぐれないでしょ。ヒカルくんは、すずかちゃんの手を握って」
「兄貴、よろしくー」
「よし、すずかちゃん！　はぐれるなよっ！」
ヒカルはやぶれかぶれになって、すずかの手を握り、歩き出した。
境内は、立錐の余地もないくらい混んでいる。

「先輩、どうしますっ!?」
「とりあえず空いてそうな屋台を当たりましょう」
「分かりました！　すずかちゃんもそれでいい？」
「任せる！」
ともみはうなずく。
「行きましょう！」

というわけで、ともみの先導で次々と空いてそうな屋台を巡った。
戦利品を抱え、ヒカルたちは人気のないご神木がある神社の裏手へ向かう。
「ど、どうにか買えましたね……」
ヒカルは、ぜぇぜぇと息を切らせた。
ともみが、ヒカルたちを見る。
「ひとまず何を買えたかとりあえず見てみましょ」
あんずアメ、チョコバナナ、イカ焼き、焼きトウモロコシ、えびせん、ベビーカステラ（三十個）などなど……。
「あ、あんまりいいものはありませんね」
定番のなさが悲しい。

しかしともみは明るい。
「でも美味しそう。みんな、食べましょう」
すずかもともみに続く。
「あたし、ベビーカステラ大好きですよっ」
ともみがヒカルの目の前に、ベビーカステラを差し出す。
「ヒカルくんもどうぞ」
「いただきます……」
「兄貴ってばっ。せっかくのお祭りなんだよ？　そんな暗くてどうするの？」
（いきなり割り込んできたくせに……）
そう思いながらも、明るく話すともみとすずかを見ているとヒカルも気分が持ち上がっていく。
ヒカルも会話に参加し、大いに盛り上がった。

食事を終えて、腹休めも終わった。
参道を見る。こちらにも伝わるくらい賑やかで、屋台や提灯の明かりが眩しく、熱気までこっちに伝わってくる。
「すずかちゃん、これからどうする？　今度こそ焼きそばとか買いに行く？」

ヒカルが言うと、すずかは肩をすくめた。
「あたしはどうでも。先輩が帰ってきてからにしよ」
ともみは今、お手洗いに行っている。
「先輩遅いな……」
「もー。兄貴ってば。女には色々あるんだから」
「じゃあ、すずかちゃんも一緒に見に行こうっ」
ヒカルは、すずかの答えも待たずトイレの方へ走った。
すぐ後ろで、「もうっ」とすずかのぼやきが聞こえても構わなかった。
トイレに到着する。
当然、神社の裏手で人気もない。
月明かりがあるから、辛うじて地面に足を取られずに済んだ。
「すずかちゃん、お願い」
「――せんぱーい！　兄貴が先輩のトイレが長いって心配してまーすっ！」
「すずかちゃん!?」
すずかの発言に戸惑っていると、女子トイレからひょこっと、ともみが顔を出す。
彼女は頬を染め、瞳を潤ませ、尋常ではない様子。
「ミルク、ですか？」

ヒカルが聞けば、ともみは小さくうなずいた。
「……ごめんなさい。ヒカルくん。お願いできる？」
「もちろん！　えっと、うちに行きますか？」
「間に合わない……と思う」
「兄貴、ここですればいいよ。みんな、お祭りに夢中なんだし。来てっ」
すずかに手を引かれ、さらにすずかはともみの手も引いて、女子トイレの個室に入った。
「せ、狭すぎない？」
ヒカルがぼやくが、すずかは「外でしたら、それこそどうなるか分からないじゃない」と言う。
（こういう場所だと、先輩の巨乳の存在感が一段とすごい……）
ヒカルは「いいですか？」とともみに確認を取る。
「うん。わたしもそれで……」
ともみの了解を取ると、ヒカルは「分かりました」とうなずいた。
すずかはノリノリだ。
「ふふ、先輩。あたしも協力しますね。ちょうど喉が渇いてたし」
「すずかちゃん、先輩は大変なんだよっ」

大丈夫だから、とともみは言った。
「ヒカルくんも、すずかちゃんも、わたしのおっぱいを飲んで……」
「じゃ、兄貴。先輩に精液飲ませてあげて」
「すずかちゃんが言わなくていいから」
ヒカルは二人に見守られながら、ベルトを外してズボンと下着を一緒に脱ぐ。
ペニスは半勃ち。
「先輩、一緒に舐めましょう」
(すずかちゃん、ナイス!)
一瞬驚いたともみだったが、すずかに促されて膝をつくと一緒になって、ヒカルのペニスに顔を寄せた。
「う……っ」
声が漏れるのを口を両手で押さえて、ギリギリ押し殺す。
「兄貴、それじゃいくよ?」
すずかが男根に顔を寄せ、れろっと舌を這わせてくる。
柔らかく温かな感触が、青筋を立てたペニスに走った。
「んちゅっ♡　ちゅぴぃっ♡　……先輩もして」
「あ、うん……。ヒカルくん、いくね?」

「お願いします」
ともみは、ともみらしい慎重さで先っぽにキスをする。
「……っ」
漏れそうになる声を押し殺す。
「んちゅっ♡　ちゅっ♡　んんっ♡　ちゅぴぃっ♡　れろっ♡」
口づけから始まったフェラチオは、少しずつ大胆になっていく。
きっと、すずかを真似しているのだろう。
ゾクゾクした疼きが、玉袋を直撃する。
「ううう……っ」
我慢しきれず、少し声が漏れた。
「ヒカルくん……気持ちいい?」
「は、はぃ……っ。もちろん……すずかちゃん!?」
思わず大きな声が出てしまう。
すずかが、玉袋を優しく手の平で包み込んだのだ。
「先輩、兄貴、ここもイイみたいですよ?　さあ、やってみて」
(す、すずかちゃん、どこでこんな妙技を!?)
すごく優しいわけでも、ぎゅっと握りしめるわけでもない。

心地いい触れ方で、睾丸を気持ちよくさせてくれる。
「……こ、ここが、ヒカルくんはいいの？」
「せ、先輩にしてもらえれば、もっとよくなるかも……」
「分かったわ」
意を決したともみが、左の玉袋に触れる。
最初に感じたのは、くすぐったさ。
しかしやんわり握られると、声が上擦ってしまう。
「せ、先輩の手、吸いついてきて気持ちいいです……っ」
「そ、そっか。なら、よかったわ」
ともみは玉袋をやんわりと揉みながら、さらに棹をフルートでも吹くみたいにしゃぶってくれる。
まるで子猫が一生懸命、お皿のミルクを舐めているみたいに。
「ちょっと兄貴。実の妹もしてあげてるんだから、何か言葉はないの？」
「すずかちゃんもうまいよ。どこでこんな技を知ったの？」
「バナナでイメージ練習♡」
誇らしげなすずかは、裏筋にキスをする。
「う！」

ペニスがビクンッとしなれば、我慢汁が玉袋の辺りにまで垂れてしまう。
ともみが熱く湿った吐息をこぼす。
「ひ、ヒカルくん……♡　すごくお汁が垂れてるね」
我慢汁が、ともみの右手を濡らしていた。
「すいません、先輩……っ」
「大丈夫……♡　れろっ♡　むちゅうっ♡　れらぁっ♡　ちゅぱっ♡」
溶けかけたアイスを慌ててしゃぶるように、ともみは口の周りを我慢汁まみれにしながら、ペニスに息を吐きかけた。
頬は紅潮し、涙ぐんでいる。
「ヒカルくんのち×ぽ、ヒクヒクして可愛い……っ♡　ちゃんとわたしたちが気持ちよくするからね」
ともみは、しきりに唇や舌を動かしてくれる。
そこで、すずかが提案する。
「ね、先輩。もっと兄貴が気持ちよくなること、やってみません？」
「もっと？　エッチをするってこと？」
「そうじゃなくって……こうするんですっ♡」
すずかが浴衣の胸元をはだけると、ブラに包まれたおっぱいを露わにした。

「すずかちゃん!?」
「なにびっくりしてるの？　これを期待してたくせにっ♡」
すずかはブラを取り払うと、たわわな蜜乳を肉棒の右の側面に押しつけた。
焼きたてのパンのようにふわふわして、ちゅちゅっと吸いついてくる乳肌の柔らかさに、腰がガクガクと震えてしまう。
「どう？　兄貴、いいもんでしょ？　先輩もしてあげて下さいっ♡」
「……うん」
ともみもすずか同様、胸をはだけると、フルカップブラを露わにした。
両腕を背中に回すとブラを外し、乳首の辺りに母乳を滲ませているおっぱいを剝き出しにする。
すずかが、うっとりした顔をする。
「先輩のおっぱい、やっぱりすっごい大きいですね♡　いつ見ても、そのいやらしい形がうらやましいですっ♡」
「い、言わないで、すずかちゃん……♡」
ともみは、恥じらうように身動ぐ。
「ヒカルくん、いくね？」
「はぃ……っ」

ともみが、すずかと同じようにおっぱいを両腕で挟んで強調すると、ヒカルのペニスに密着させてくれる。
（二人のおっぱいで、埋もれる！）
さらに二人のおっぱいが密着し合い、押し合いへし合いしつつ、ペニスを蕩けさせてくれる。
「ううう……！」
二人のマシュマロおっぱいに弄ばれ、ますます我慢汁がこぼれた。
（今すぐ腰を動かして、二人のおっぱいをめちゃくちゃにしたい！）
と、そんな兄の心の内を見抜いたのはすずか。
「兄貴、動いていいよ？」
「！」
ともみが、不思議そうな顔をする。
「動く？」
「先輩。兄貴、あたしたちのおっぱいに潰されて昂奮しすぎちゃったんです♡　今すぐ腰をめちゃくちゃに動かしたいんです♡」
「いいですか、先輩？」
「え、ええ♡　あなたが望んでいるなら……♡」

「それではお言葉に甘えます！」
ヒカルは腰を前後に動かし、笠肉で二人のおっぱいを引っ掻く。
「ああんっ♡　兄貴ぃっ♡」
「んんんっ♡　ヒカルくぅんっ♡」
二人は、ビクンッと身体を震わせた。
ペニスを動かせば、二人のおっぱいの表面にたぷったぷっと波紋が走る。
「兄貴のち×ぽに引っかかれて、ゾクゾクしちゃうっ♡」
「ヒカルくん、こんなに動いちゃうくらい気持ちよくなってくれて嬉しいぃっ♡」
「ううっ、二人とも！」
激しく腰を動かしていると、二人の乳圧をはね除けるようにペニスが二人のおっぱいが密着している部分から、ビィンッと力強くしなりながら飛び出した。
すずかもともみもそうするのが当然のように、パンパンにはちきれんばかりの亀頭冠に口づけをした。
快感電流が尿道を走り抜ける。
まるで二人がペニスを間に挟みながら、ディープキスをしているみたいだった。
「んちゅぅっ♡　兄貴のち×ぽ、いやらしい臭いっ♡　頭がクラクラしちゃうっ♡」
すずかが、目元を赤らめて身悶えれば、ともみもシナを作った。

「あぁあぁっ♡　ンチュパッ♡　チュパァッ♡　ヒカルくんのち×ぽ、ヒクヒクして可愛い♡　もっと気持ちよくなって♡」
二人の可愛らしい繊細な舌遣いに、腰が疼く。
ヒカルは腰を上下に動かす。
「二人とも、もっとしゃぶってっ」
強烈な排泄感が尿道を戦慄かせた。
「兄貴、出ちゃうんだっ♡　いやらしい精液をどぴゅどぴゅ、あたしたちにくれちゃうんだっ♡」
「す、すずかちゃん、ごめんなさいぃっ♡　この精液はわたしに譲ってっ♡　もうおっぱいがズキズキしちゃって仕方ないのっ♡」
ともみは、よがりながら声を上げる。
「出る……っ！」
ビクンビクンと、戦慄くペニスからおびただしい精液を撒き散らす。
びゅるぅっ！　どぴゅっ！　びゅるぅぅっ！　びゅくぅっ！
「ヒカルくん……っ♡♡」
すずかは、さすがにともみに譲ったらしい。
「んぢゅっ♡　んぐぐっ♡　ぢゅるぢゅる……っ♡」

ともみは、新鮮なミルクを夢中で飲んだ。
（先輩が俺の精液をすごい勢いで飲んでくれてる……）
嬉しいし、幸せだ。
「あ、ありがとう、ヒカルくん……っ♡　あなたのお陰で、またわたし、ちゃんとおっぱいが出せるぅ……♡」
ともみの鮮やかな乳首から、プシャアアアアッと勢いよく母乳が噴き出した。
「ああんっ♡　せ、先輩、ミルクを出しすぎなんだけどっ♡」
すずかはミルクまみれになりながら、幸せそうな顔をした。
「先輩のおっぱいなんて好きじゃないんですからぁ♡　――兄貴ぃっ♡」
射精直後で敏感になっているペニスが、すずかのおっぱいで圧迫される。
「うう!?」
「まだ兄貴のち×ぽ、こんなに硬いまま♡　やれるでしょ？」
「先輩はどうですか？」
「ちょっと兄貴！　あたしが欲しいんだけどっ？」
「わたしはたくさん精液を飲ませてもらったから、次はすずかちゃんを気持ちよくしてあげて♡」
すずかは濡れた眼差しを向ける。

「やっぱり先輩は人間ができてる♡　ね、兄貴っ♡」
「でも、ゴムが……」
「ちゃんと用意してるから♡」
すずかは、手提げ袋からコンドームを取り出す。
そしてヒカルのペニスにゴムをはめてくれた。
すずかは、フタを閉めたままの洋式トイレの便座に座り、浴衣の裾をまくり上げて、大股を広げる。すでに秘裂はぐっしょりと潤んでいた。
「兄貴、きてっ♡」
「よしっ」
ヒカルは覆い被さると、ペニスを挿入する。
ズンッと奥を突いた。
「あああああんっ♡♡」
すずかが上擦った声を上げると、ヒカルは慌てた。
「すずかちゃん、駄目だよ。し、静かに……っ」
「し、静かになんて無理だからぁっ♡」
「しょうがない妹だっ」
ヒカルは腰を打ちつけ、深い部分を杭打ちする。

「ンンンンン♡」
すずかは髪を振り乱す。
大きく腰を遣うたび、ぱちゅんぱちゅんと空気を孕んだ水音が立った。
「こんなに胸を大きくするなんて、やらしい妹だっ」
胸をむぎゅっと握りしめる。
「兄貴♡　おっぱいは出ないけど、兄貴に揉んでもらったらもっと大きくなる気がするからぁっ♡」
「そう言うなら……」
ヒカルは乳首をぎゅっと強く握りしめれば、すずかの伸びやかなスタイルがビクンッと震えた。
「ひいいいんっ♡」
乳首をイジメながら、腰を動かすことも忘れない。
すずかの秘裂からあふれる本気汁で、ヒカルの陰毛までべっちょりと汚れる。
引く時は抜けるギリギリに、押し込む時はすずかの恥骨を圧迫するように、すずかの膣内を蹂躙する。
「あ、兄貴のち×ぽが刺さるぅっ♡　ズンズンってすごぃっ♡　あたしのあそこ壊れちゃいそうなのに気持ちいい♡」

徐々にスピードを上げていく。
「兄貴すごぃっ♡　すごいぃっ♡」
すずかの言語力が退化する。それだけ快感に溺れているということだ。
揉みしだいた胸は汗でぬるぬるになり、ヒカルの手に心地よく吸いついて、馴染む。
まるでヒカルのために作られているみたいだった。激しい律動を見舞うたび、すずかは胸をぶるっぶるっと上下に弾ませながら身悶えた。
ぢゅっぷ！　ずっぷっ！　ぎゅっぷ！
性器同士を密着させたまま、膣壁を刮ぐように円を描く。
「あ、兄貴、それ本当にだめぇぇぇぇっ♡」
すずかが絶頂したのが、膣とペニスが擦れ合う感触で分かった。
柔らかな膣肉で、ぎゅっと締めつけられるだけではない。
奥へ吸い込まれる感触が、より深くなる。
「ううう！　す、すずかちゃん、その締めつけやばいからっ」
「あたしはやってないぃっ。兄貴があたしを気持ちよくするから、身体が勝手にどんどんエッチになってるだけっ♡」
すずかは大股に広げた両足を、きゅっと丸めた。
「……あ、兄貴、先輩がすごく見てるっ♡」

「えっ」
夢中だったところで目を向ければ、確かにともみはヒカルとすずかの激しいエッチを涙目で見守っていた。
「ああんっ♡　ちょ、ちょっといきなりち×ぽをビクンって動かすのなしだからぁっ♡」
すずかは身悶えながら抗議してくる。膣肉がぎゅっと収斂した。
すでに彼女の割れ目から溢れた体液で、玉袋までぐっちょりと濡れている。
実の妹の膣肉はますます熱く、妖しくうねり、蠢き、貪欲に精子をねだった。
ビクビクッとペニスが戦慄き、玉袋が疼く。
「すずかちゃん……っ」
射精の気配を意識しながらも、すぐには出すつもりはなく、引き攣る腰を打ちつける。
パンパンパンパン!!
「ああっ♡　はあぁっ♡　んんんっ♡　ひぁあっ♡」
愛蜜がプシャップシャッと飛び散った。
ヒカルは肛門を締めるが、
「あ、兄貴、もう、あたし……♡　兄貴、我慢しないでそのまま出してっ♡」

ともみがよがりながら、求めてくる。
「すずかちゃん、出すよっ！」
「きて……っ♡」
ゴムごしに子種汁を解き放った。
「あぁっ……♡　あたしの中に出てるぅぅっ♡♡　ンンンッ……イクゥッ♡　イっちゃうぅぅっ♡♡」
ともみは嗚咽混じりに、ビクビクと全身を痙攣させる。同時に、痙攣する膣肉にギュウギュウとペニスを締めつけられ、尿道に残る分まで搾り取られてしまう。
「す、すずかちゃん……あそこがすごく貪欲だねっ」
「んんっ♡　し、仕方ないでしょっ♡　中出しできない分、これくらい我慢してっ♡」
と、ヒカルは袖を引かれた。
振り向けば、ともみが袖を控えめに引っ張っていた。
「――ひ、ヒカルくん……」
（可愛い！）
今すぐ犯してほしいと顔に出ていた。
ヒカルはペニスを、すずかの膣内から抜いた。

「ひゃああんっ♡」
すずかが、ビクンと全身を戦慄かせた。
「それじゃあ、すずかちゃん。そこからどいて……」
「そ、そうしなくても大丈夫な方法があるから」
「え？」
「こうすればいいの。――先輩っ！」
すずかは、ともみに耳打ちする。
「で、でもそんなこと……っ」
躊躇（ためら）うともみの手を引くと、ともみはすずかと並び合うように二人で四つん這いになった。
浴衣の裾がまくれ、二人の尻肉がぴったりと密着している様が露わに。
（それに二人とも、肛門まで丸出しに……）
ヒカルはゴクッと生唾を呑んでしまう。
ともみがちらっと、ヒカルを見る。
「……ヒカルくん、お、お願い……♡」
すずかも、ヒカルに妖しい眼差しを向ける。
「あたしも一緒にお願い、兄貴っ♡」

「よし、二人ともヤるぞっ」
ヒカルはゴムを新しく替える。
「先輩、すみません。すずかちゃんともするので……」
「うん、もちろんっ♡」
失礼します、とペニスをともみの秘処へ埋める。
「アアッ♡　ひ、ヒカルくぅん……っ♡」
ともみは声を上擦らせ、身悶えた。
すると、挿入していないはずのすずかも「ンンッ♡」と上擦った声を上げた。
「あ、兄貴のち×ぽがともみ先輩のあそこに入ってるのが、あたしにも伝わってくるぅうっ♡」
ヒカルは腰をゆっくりと前後に動かす。
「あああっ♡　ひ、ヒカルくんっ♡」
「せ、先輩のあそこがヒクヒクしてるのも分かっちゃう……あむぅっ♡」
「ひいいいんっ♡　すずかちゃん……!?」
すずかに乳首をしゃぶられれば、プシャプシャッと勢いよく母乳が噴き出す。
それを、すずかが美味しそうに飲む。
膣圧が高まり、ギチギチッとペニスを締めつけられてしまう。



「ううう……と、ともみ先輩ぃっ！」
ともみの柔肉は愛蜜でぬるぬるしていて、悩ましく絡みついてくる。
奥歯を噛みしめながら、奥を突く。
「あああぁぁっ、す、すずかちゃん♡　お、お願い、許してっ♡　おっぱいゴクゴク飲んじゃラメェッ♡」
それでもすずかは夢中で、ともみの母乳を飲んでいた。
「すずかちゃん、ともみ先輩のエッチな母乳を飲んで、いやらしい赤ちゃんになっちゃったみたいですねっっ」
「あああぁん♡　ご、ごめんなさぃぃっ♡」
ともみの膣肉がざわざわと痙攣する。どうやら今ので達したらしい。
「あ、兄貴、あたしにもぉっ♡」
口の周りをミルクまみれにして、すずかがねだった。
「分かったっ」
ともみの膣内からペニスを抜くと、隣のすずかの膣内へ。
ズブズブッ！
「兄貴が戻ってきてくれたっ♡　ぁあああああんっ♡」
肉の輪っかが縮まり、もう逃がさないとばかりに咥えられた。

「すずかちゃん、さっきあれだけイったのに、まだこんなに締めつけてくれるんだっ」

ヒカルは呻きながらも、腰を大きく前後に動かす。

と、すずかと身体を重ねているともみの膣がヒクヒクとうねる。

「あぁっ♡　す、すずかちゃんの言う通りっ♡　ヒカルくんのち×ぽが動いてる感触、それを咥え込んでいるすずかちゃんのあそこのうねりが、伝わってきちゃう……っ♡　すずかちゃん♡」

「せ、先輩!?」

今度は、ともみがすずかのおっぱいに吸いつく。

「ひぃんっ♡　せ、先輩、あたしの乳首ナメナメしても母乳は出ません……♡」

「で、でもすずかちゃんの乳首がすごく痛そうなくらい尖ってるから、構って上げたいの♡」

「あああああんっ♡　甘噛みしないで♡」

すずかが、ともみの吸いつきに身悶えた。

「くっ……二人とも!」

そんな艶やかなやりとりを目の前でされたら、堪らない。

ヒカルは、すずかの子宮口を勢いよく突き上げた。

「あ、兄貴、今だめえっ♡」

しかしすぐに抜く。

次いで挿入したのは、ともみの膣内。

ねっちょりと本気汁にまみれた膣肉をほぐすように、抉った。

幹肉は絡みつく本気汁で、ドロドロになる。

ヒカルは、二人の膣内をリズミカルに交互に貫く。

「ああぁっ♡　ヒカルくんの深い場所に来てるぅっ♡　あああっ♡　ぬ、抜かないでっ♡」

「兄貴♡　いやあっ♡　まだあたしの膣内にいてっ♡」

二人の嬌声が絡み合う。

それが、ヒカルの昂奮をさらに掻き立てる。

パンパンパン！　女性トイレの個室で艶めかしい音が響く。

二人の秘処が隣り合っているせいで、ヌラーッと糸を引く蜜もおびただしい。

ともみとすずかは、まるでヒカルに見せつけようとするみたいに身を寄せ合う。その艶めかしい姿にちょうど、ともみに入れていたペニスがビクゥンッと力強く震えた。

「ふ、二人とも、もう!」

「ヒカルくん、わ、わたしたちに精液をちょうだいっ♡　わたしだけじゃなくって、

すずかちゃんにもっ♡」
「兄貴、独り占めはしないから……あたしたちに精液ちょうだいっ♡」
「ふ、二人とも……！」
ヒカルはコンドームを外すと同時に、怒張を二人の秘処めがけ解き放った。
ビュウルッ！　ビュブッ！　ビュバアッ！
二人の桃尻はみるみる、精液まみれになっていく。
「あああ♡　熱いぃぃぃいっ♡　イクッ♡　イっちゃうぅぅぅうっ♡♡　すずかちゃん、い、一緒に♡」
「と、ともみ先輩、あ、あたしぃ、も、もうぅぅうっ……イクウウウウッ♡♡」
プチャアアッ！
噴き出す母乳に、すずかは一生懸命に吸いつく。
「あぁぁぁ……♡　だ、だめっ♡　すずかちゃん、イってるのっ♡　今イっちゃってるのにぃっ♡　おっぱいゴクゴクしちゃダメェッ♡」
「あ、あたしもイってますからぁっ♡　先輩のおっぱい吸ってると、落ち着くんですぅっ♡　ンンン……♡」
すずかは幼児退行してしまったみたいに絶頂しながら、ともみの母乳を飲み続けた。
（すずかちゃん！　羨ましすぎる……！）

第九章　兄として〜妹ちゃんと恋人デートの予行演習

部活で疲れきって帰宅し、ベッドに制服のまま大の字になって寝ていると、スマホが鳴った。億劫だったが、ともみの可能性もある——と思って見ると、『すずかちゃん』と表示されていた。
出ないと、あとでうるさく言われるだろうからとすぐに出た。
「すずかちゃん、どうしたの？」
「兄貴、ちょっといい？」
すずかの声はいつものように自信に溢れたような調子ではなく、こちらを窺うようなものだった。
「……なにか悩み？」
「え、どうして分かっちゃったの!?」

「そりゃ兄妹だからね」
「ちょっと相談があってね……」
すずかが言うには、バスケ部の三年生に告白されたらしい。
一度は断ったものの、結構しつこかったらしく、最終的に再来週の土曜日にデートすることになったらしい。
バスケ部の三年生曰く、そのデートで自分がすずかの彼氏に相応しいかを決めてほしい、とのこと。
「ずいぶん、強引な人だね」
「まあでも先輩も悪い人じゃないから」
「で、相談ってなに？　デートには行くんでしょ？」
一瞬、自慢かと思ってしまう。
「あたし、デートするの初めてだから、兄貴に予行演習を手伝ってほしいの」
「……別に初めては悪いことじゃないよ？　その三年生にリードしてもらえば……」
「駄目。経験のない女だって思われると、嫌じゃん」
「すずかちゃんに告白するんだから、どんなことも可愛いって思ってくれるんじゃないかな」
「あたしが変な男に手籠めにされてもいいんだ、兄貴は」

すずかの声が、険しくなった。
「誰もそんなことは言ってないでしょ。……分かったよ。付き合うよ」
「それじゃ次の日曜日にね。あ、予行演習でもデートなんだから、ちゃんとルートとか決めておいて」
捲し立てられ、電話が切れる。
結局最終的には、いつもの強引で勝ち気なすずかだった。
（すずかちゃんとデートか……。ちゃんとしないと、あとですごい怒られそう）
しかし今は眠い。目を閉じた。

そして週末の日曜日を迎えた、待ち合わせ場所は駅前。
快晴で、絶好のデート日和。
（先輩との待ち合わせであれば、もっとよかったのに）
さすがに日曜日はかなりそこは賑やかで、ヒカル同様、デートらしい待ち合わせをしているカップルの姿が散見されていた。
（まあ、デートじゃなくって、妹のデートの予行演習だけど……）
「兄貴！」
すずかはキャップにティーシャツにジーンズ姿。

活動的なすずかにはその長身とも相俟って、すごく似合っていた。
「すずかちゃんっ！」
「じゃあ、今日はよろしくねっ」
「任せて。でもすずかちゃんも予行演習がしたいなんて緊張してるんだねっ」
「まあそんな感じ」
すずかは肩をすくめた。
（すずかちゃんも女の子らしいところがあるんだ）
「それじゃあ行く？」
「あ、その前に、臨場感を出すために、あたしは兄貴のことをヒカル先輩って呼ぶ。いい？」
「先輩？」
「相手は先輩だから、その準備」
「了解。俺はそのままでいいよね？」
「ええ。それじゃあ、行きましょう、せーんぱい♪」
すずかが無邪気に笑った。
思わずそれに見とれてしまう。
なにせすずかは素材がいい。

中学時代から告白されたという話はよく聞いた。なぜかヒカルに必ず報告してくれるのだ。そのたびに、ぱっとしない自分に落ち込んだ。
「将来はアイドルになって！」
そう親はよく言っていた。
無邪気ににこりと微笑めば、兄ではあるが、ドキッとしてしまう。
ヒカルが歩き出すと、すずかがぎゅっと手を握ってきた。
「すずかちゃん？」
「デートなんだから手くらいは繋ぐでしょ？」
「あ、ああ……。っていうか、本当にすずかちゃんデート初めてなの？　すっごく慣れてる気が……」
「そんなことないよー」
（俺にとって初めてのデートが妹ってことか……。悲しい）
しかしすずかのためにも頑張ろうと、スマホをチェックする。
すずかに言われた通り、事前にデートコースは決めておいた。
ともみと一緒に出かけるならどこに行くか、という視点で考えたのだ。

電車で一時間ほど行けば、海沿いの街に到着する。

まずは繁華街へ。
「すずかちゃん、どこかお店を覗く？」
「え！　何か買ってくれるの？」
「えーっと……それはまあ……あははは……そこはさ、妹として考えてくれると嬉しい……です」
「なーんだ」
すずかは肩をすくめた。ひとまず入ったのはスポーツショップ。
「いきなりスポーツショップなんて色気なくない？」
「でもこういう店好きだよね？　地元にいた時は――」
「ね、先輩。これは〝デート〟ですよ？」
「ごめん。でも気に入っていただけるかなーって」
「でも新作見たかったし、いいわ！」
というわけで結局、すずかはスキップしながら階段を上がっていく。
「やっぱり都会は、品数すごーいっ！」
きゃっきゃっと弾んだ声に苦笑いしながら、すずかについていく。

「欲しかった色のシューズ、買っちゃったっ！」

すずかは、ほくほく顔で店を出る。ヒカルの両手には買い物袋。
「先輩、荷物を持たせてしまってすみません」
「いや、平気だよっ」
（すずかちゃん、買いすぎだよ）
ただ、さすがに何もしないのは申し訳ないとお金を払おうとしたら、それは大丈夫と自分のおこづかいから出してくれたのは、すずかの良心か。
「それで先輩。次はどちらへ？　そろそろお昼ですけど」
「お店を選んであるから大丈夫」
「さすがは先輩♪」

ヒカルたちが向かったのは、繁華街から少し離れた場所にあるカフェ。
そこのテラス席で、コーヒーとサンドイッチなどの軽食を楽しんだ。
（これじゃあ全然物足りないな……）
そんなことを考えながらも、今日はすずかのためだとぐっと我慢する。
ここは食事の内容より雰囲気重視でいこうと思ったヒカルの戦略は、当たったらしく、楽しんでもらえたらしい。
「先輩、こんなお洒落なお店知ってたんですね。あたし、びっくりしちゃいました」

「あはは。そう言ってもらえてよかった。——ねえ、すずかちゃん。ここは素に戻って聞いてもいい？」
「いいよ。なに？」
すずかは、アイスティーを飲みながら言った。
「その先輩とは付き合うの？　それとも本当にデートで決めるの？」
「なんでそんなこと聞くの？」
「なんでって……」
「ふふ、兄貴、もしかして嫉妬？」
すずかは満更でもなさそうな顔をした。
「嫉妬じゃなくって心配なの。本当にその人はすずかちゃんを大切にしてくれるのかって……」
「兄貴。別に付き合うって決まったわけじゃないし、最初は断ったんだよ？　今回のデートも先輩が無理矢理言ったからだし。それに前にも言ったけど、先輩は変な人じゃないよ。うちのクラスにもバスケ部いるけど、先輩はすごくいい人だって感動してたし」
「そっか。それなら……安心、かな？　でも、すずかちゃん。そんな先輩から告白されて断るなんて、どんなタイプの人が好きなの？」

「あたしはすごく……素敵な人がタイプに決まってるじゃん」
「素敵な人って、アバウトじゃない？」
「あたしのことより、兄貴こそどうなの？」
「俺はひとまず部活を頑張るからいいんだよ。そのために関東まで来たんだし……」
ふうん、と相槌を打ったすずかは、意味ありげに笑った。
「なにさ」
「先輩とはどうなの？　告白された？」
「先輩とはそういう関係じゃないから」
「関係ないってことはないでしょ。精液飲ませたり、中出ししたりはするけど、付き合ってないってこと？」
「——すずかちゃん、さあ行こう。食事し終わったのに、いつまでも居座ってたんじゃお店に迷惑だしっ」
ヒカルは一気に捲し立てると、会計を済ませる。
「はいはい。……いつまでも誤魔化しきれないからねー」
すずかはそうぼそっと呟いた。

腹ごしらえしたあとは、海を一望できる公園に向かう。

休日ということもあって、やたらカップルがいる。
はたから見れば、ヒカルたちもカップルなのだろうが、兄妹なのでいたたまれない気分になった。
一方、すずかは、「すごいきれー！」と海の青さに感動していた。
このデートの予行演習を楽しんでくれているようで安心。
（考えてみれば、こうしてすずかちゃんと二人っきりで出かけるなんて、地元にいた頃にスーパーに行くくらいしかなかったっけ）
「先輩！　見て、カモメ！」
手すり近くまでカモメが飛んできて、ミャーミャーとナマイキそうな猫みたいな声で鳴く。
「さわれそーっ」
「すずかちゃん!?」
手すりに身を乗り出したすずかを、慌てて引き戻す。
「あー……。あともう少しだったのに……」
「いや、触れてると同時に、たぶん落ちてるよ」
手すりの下を見る。
波打ち際だから深さはないだろうが、ずぶ濡れになってしまう。

「あたしはそういうドジはしないから」
「でも見てるこっちはハラハラしてるから」
「ま、兄貴があたしみたいなことしたら、落ちそう」
やれやれ。
「んじゃ、この辺りを歩こうっ」
すずかと手を握り、一緒に歩く。
ヨットハーバーがあって、高級そうなヨットがずらずらと留められていた。
ただカモメにはただの休憩場にすぎず、マストに何羽も留まって翼を休めている。
気付くと、もう太陽が赤みを帯びて夕暮れ時になっていた。
「すずかちゃん、デートの予行演習はどうだった？」
「最高。まさか兄貴がここまでエスコートしてくれるとは、予想外だった。もしもの時に、あたしスケジュール組んでたし」
「信用ないなぁ」
ヒカルはがっくりとうな垂れた。あははは、とすずかが笑う。
「……それじゃあ、夕食にして帰ろう」
「それ飛ばして、別のことしよっ」
「飛ばす？」

「もう一つ」
すずかが指さしたその先にあるのは、古そうなラブホテル。
「俺たち未成年だし、追い返されるよ」
「平気。あたし、大人びてるしっ」
「そ、そういう問題かな」
そんなことを言いつつも、確かに、とも思った。
「それに、ネットで調べたけどあそこ、そういううるさいこと言わない場所なんだって」
「……そんなところまで調べてって……待って！　その先輩とそこまで行くつもり!?　恋人じゃないのにっ!?」
「もしもの時のことを考えておかないと。先輩モテるし、あたしの喘ぎとかフェラチオとか、色々なものが変だと引かれるでしょ？」
「そこまでする必要は……」
「行こう！」
ヒカルの言葉など無視して、すずかはどんどん進んでしまう。
そしてラブホテルへ。
ここからは受付の中はよく見えなかったが、呼び止められることもなかった。

「部屋は、どうする？」
「任せる」
「じゃあ……」
今の金で行ける部屋を選ぶ。妹と行くにしても緊張しつつ、部屋へ。
部屋に入ると、普通だった。
ホテルと聞いて思いつく部屋のサイズを、半分くらいにしたような広さ。
ベッドが部屋のほとんどを占め、申し訳程度にエアコンやテレビがある。
古い建物だからなのか、『エッチするための場所！』という印象がより強調されて見えた。
「シーツとかは綺麗だし、悪くないかも」
すずかは、部屋をしげしげと眺めながら呟く。
「すずかちゃん、これからどうするの？」
「決まってるじゃないですかぁっ♡　先輩、しよっ♡」
「まだデートの予行演習中なんだ……」
「ここからが本番だから」
すずかはにこっと微笑んだ。
「それじゃ、先輩。まずはシャワーを浴びましょ？」

「あ、うん。それじゃお先にどうぞ」
「そうじゃなくって、一緒にっ♡」
（注文が多い……）
「そ、そうだね。一緒に入ろうっ」
ヒカルは服を脱ぐ。
「ちょっと、自分ばっかりさっさと裸にならないでよ。あたしも脱がせて」
「ああ……。そっか」
「ちょっと色気出してよ、セ・ン・パ・イ♡」
仕切り直して、すずかのシャツに手をかけ、脱がせる。
するすると脱がせれば、黒いレースのハーフカップブラジャーがのぞく。
「っ！」
ただでさえ大きく形の綺麗なおっぱいが、上げて寄せてブラの効能とも相俟って、今にもこぼれてしまいそうだった。
くびれた腰に、なだらかなお腹、縦長のおへそ。
本当に綺麗だ。
「先輩、見とれるの早いですよ？」
「あ、う、うん」

すずかのにやにや顔から目を逸らし、片膝を折る。
そしてジーンズの留め金を外し、チャックを下ろす。
当然、現れたショーツもレース。すずかは下着姿になる。
「ありがと」
くるりと、すずかがヒカルにお尻を見せる。
（すずかちゃん……！）
ティーバックタイプのショーツだった。お尻の深い割れ目にショーツが食い込んで、ぷりんとした尻たぶがはみ出していた。
「先輩、下着もお願いしますね♡」
「ああうん……」
間の抜けた声が漏れてしまう。
ブラジャーのホックを外す。
と、すずかが不意にくるっと正面を向いた。
ツンと上向いた美巨乳が、ぷるんっと悩ましく弾む。
鮮やかな桃色の乳首は吸ってほしそうにツンと尖っていた。
（これで母乳が出ないのは惜しいっ！）
ショーツに目をやり、再び膝をついてショーツの両脇をつまんだ。

するするとショーツを下ろしていけば、肉厚の恥丘、そしてひっそりと走った縦のスジまでが露わになる。

「……んんっ♡　先輩♡」

吐息が当たってしまったのか、すずかが鼻にかかった声を漏らした。

（先輩って呼ばれるのいいな。本当に先輩後輩の関係みたいに思えてくる……）

「それじゃ、次は先輩の服を脱がしますね」

すずかがしおらしい口調で、ヒカルの服も脱がしてくれる。

お互いに生まれたての姿となると、手を繋ぎ合い、ガラス張り（マジックミラーではない）の浴室へ。

シャワーを出せば、あっという間にガラスが湯気で曇った。

「それじゃあ先輩、何をしてほしいですか？」

「……えーっと、身体を洗ってくれ」

「オッケー♡」

すずかは、自分の全身にボディソープを塗りたくる。

「いや、すずかちゃん。俺の身体を洗ってくれっていう意味で……」

と、すずかが抱きついてきた。

「う！」

形のいいおっぱいがヒカルの胸板でむにゅっと柔らかく潰れ、乳首が突き刺さる。

すずかと目が合う。

目元を赤らめた彼女は妖しく微笑むと、胸を擦りつけるように上半身で小さな円を描くように動かす。

「どうですか、先輩。気持ちいいですかー♡」

「き、気持ちいい……っ」

ビクンッと、ペニスが激しくしなった。すずかは、その長い足でペニスを跨ぐ。

まるで、そこをわざとよけるように、触れてはくれない。

「先輩。さすがはバスケ部の主将ですね。すごく身体が引き締まってますっ♡」

「す、すずかちゃんこそ、胸がぷりぷりしてて……気持ちいいよっ」

「本当ですかっ♡　ふふ♡　嬉しいですっ♡　あたし、胸には自信があるんですっ♡

先輩がこれまで付き合ってきた、どの女性にも負けない自信がっ♡」

小石のように硬くなった乳首で胸元を引っ掻かれてしまえば、背筋がゾクゾクしてくる。

（すずかちゃん、こんな大胆なことをその先輩にするつもり!?　だ、駄目だって！

こんなことしたら、すずかちゃんから離れられなくなっちゃうから！）

我慢汁が、糸を引きながら滴り落ちた。

「す、すずかちゃん……！　あ、あそこも、お願い……っ」
「あそこって、もしかしてここ、ですか？」
すずかがペニスを軽く爪弾けば、びっくんびっくんと陰茎が戦慄いた。
「そ、そう！」
「いいですよー♡　それじゃ、先輩、仰向けに寝てもらっていいですか♡」
すずかに言われた通り仰向けになれば、すずかは肉棒をヒカルのお腹側に倒した。
「うっ！」
次の瞬間。
（すずかちゃん!?）
両膝を突いたすずかは、ボディソープまみれの秘処に、ペニスを密着させたのだ。
ボディソープで泡のすべりは抜群という状況で、腰を前後に動かしながらペニスを割れ目に沿わせた。
温かく柔らかな膣肉の感触が、ねっとりと張りつく。
「これ、素股!?」
「素股？　あたしそういうこと分かりません♡　ただ先輩を気持ちよくしたい一心で……♡」
すずかは、さっきまでヒカルに思いっきり押しつけていた胸をぷるんぷるんと弾ま

せながら、ペニスを秘処へ密着させ、決して挿入しないまま擦ってきた。
「あぁっ♡　ゴリゴリしたチ×ポ……イィッ♡　んんん……っ♡　もう駄目っ♡　兄貴いいいいいいいいいいっ♡」
「あれ？　先輩呼びは、もう終わり？」
「んんっ♡　終わりぃっ♡」
と、すずかは不意に腰を持ち上げた。
ずっと抑えつけられていたペニスが、びくぅんと大きく跳ねる。
「そんなに不安そうに、ち×ぽをヒクヒクさせなくてもいいよ♡　ちゃんとこうすれば……♡」
すずかは、泡まみれの胸でペニスを挟んだ。
ふわふわして柔らかく、ほどよい弾力をたたえた美巨乳に包み込まれ、ペニスはたちまち我慢汁でぬるぬる。
すずかは、くんくんと匂いを嗅ぐ。
「ふふ♡　兄貴、ボディソープの匂いなんて消えちゃうくらい、オスのいやらしい匂いしてるぅっ♡　れろっ♡」
「う!!」
「れろっ♡　れろっ♡　ちゅっ♡　ちゅぴぃっ♡　アァッ……♡　兄貴のチ×ポ、し

ゃぶり応えあるぅっ♡　あむぅっ♡」

すずかは瞳を潤ませながら、ペニスを咥えた。

「ううう！」

ネトネトした口内の柔らかさと、バキュームのような吸いつきに、腰がガクガクしてしまう。

その間も幹部分に柔らかな乳肉が吸いつき、圧迫にさらされてしまう。

「すずかちゃん、パイズリしながら咥えるのすごいよ！」

「んっ♡　ぎゅぽぉっ♡　んぎゅっ♡　ぢゅるるるっ♡　ぐっぽっ♡　ぐっぽっ♡」

すずかは頬をへこませ、鼻の下を伸ばしつつ、丹念に吸いついてくる。

単に吸うだけでなく、舌先で鈴口を引っ掻き、射精を催促していた。

「すずかちゃん！」

ヒカルはたまらず、すずかの頭を摑むと思いっきりペニスで喉奥を突いてしまう。

「んぐぐぐっ♡」

吐き出してもおかしくない不意打ちの突き上げだったが、すずかはますます唇の輪っかを縮め、執拗に吸いつく。

ヒカルは腰で膣内をガンガンと突き上げ、奥歯を食いしめた。

「で、出るッ！」

「だ、出して、兄貴ぃっ♡　あたしのお口の中に、精液をどぴゅどぴゅって出してっ♡」

どぴゅっ！　びゅるるっ！　びゅっくっ！

すずかの口内めがけ、勢いよく子種を撒き散らす。

「んぐぐっ♡♡」

あまりの量の多さにすずかは目を白黒させたが、桜色の唇の端に精液を滲ませながらも、ごきゅごきゅと飲んでくれる。

射精直後のペニスは、ズキズキと疼く。

すずかはゆっくりと顔を持ち上げ、ペニスを吐き出した。

「兄貴♡　どう、あたしのフェラチオ♡」

「すごくよかったよ、すずかちゃんっ」

「それじゃ、兄貴……♡　外へ……♡」

「……我慢できないっ」

「え？　きゃっ♡」

ガラスに、すずかの上半身を押しつけた。

「あぁぁっ♡　兄貴ぃ……♡」

ペニスを秘処に押しつける。

そこはびっくりするくらい熱々で、色々な粘液がこぼれてグチョグチョ。
「ん……ッ♡」
すずかは、蜂腰をフリフリと揺らしながら身悶えた。
「だめっ♡　ゴムしてないのに……♡」
「その割にすずかちゃん、声が嬉しそうだけど？」
「そ、そんなこと……♡」
「でも、確かにゴムなしじゃ駄目だよね。じゃあ、これは？」
ヒカルは、ペニスで秘裂の表面を擦った。
「ひいいいいんっ♡」
すずかは両膝をガクガクと戦慄かせる。
軽く達したらしい。
「素股っていうのを、すずかちゃんにしっかり教えなきゃって思ってねっ」
すずかは腰が引けるが、ウエストをがっちり摑んだヒカルからは逃げられない。
彼女は上半身を前のめり――つまり、おっぱいをぐいぐいとガラスに押しつける格好になっていた。
（ガラスの向こうから鑑賞したいっ）
雫を滲ませる陰唇を、ペニスで引っ掻くように刺激する。

「ひいいいいいンンッ♡」
すずかは内股になる。腿の裏が、ピクピクと小刻みに戦慄く。
「すずかちゃん、おま×こがピクピクしちゃっていやらしいねっ」
「あたしは悪くないのっ♡　兄貴があたしを弄るからぁ♡」
雰囲気いっぱいによがった。
胎内で温められた蜜汁がペニスに染みるたび、ぞわぞわっとしてしまう。
ヒカルは、ますます腰を動かすことに熱中した。
ヌチャッ！　ズチュッ！　グチュッ！
「んんん♡　だ、駄目っ♡　は、入っちゃうっ♡　ゴムがないから、入ってきちゃいけないのにいぃ♡　ひいいいいンッ♡」
背徳感も合わさって、ヒカルは素股に熱中してしまう。
兄妹同士でこんなことをやってしまっている。
「ああぁっ♡　兄貴のち×ぽで感じちゃってるぅっ♡　ゴツゴツして、いやらしい形をしてるチ×ポ、はっきり感じすぎちゃうぅッ♡」
すずかは、自ら勃起した乳首をひんやりしたガラスに押しつけることに夢中になってしまっているようだ。
ガラスで乳首が押し潰されるたび、背筋がひくんっと引き攣るのが、ヒカルにはよ

く分かった。
陥没乳首でも感じられるらしい。
「どう、すずかちゃんっ」
「ねえ、もう焦らさないでっ」
「え、焦らしてなんていないよ？」
「兄貴が欲しいの！　わ、分かってるでしょ？」
「だからこうして気持ちを高めてるんだ……ううっ!?」
「兄貴は、こうした方がいいんじゃないっ？」
すずかは不意に肉付きのいい太腿で、ペニスを圧迫してきた。
圧迫しながら、すずかもまた前後に身体を揺する。
内股が我慢汁で汚れていくのも、構わない。
「い、イジワルして、ご、ごめん……っ！　悪気はなかったから！」
「兄貴はこれが好きなんだからし、てあげるからっ♡」
一音一音にしっかり力を入れ、訴える。
すずかの本性が勝ち気で、負けん気の強い子だということを忘れていた。
ビクビクと男根が戦慄く。
「が、我慢汁が湧き水みたいに溢れちゃってるっ♡　兄貴、このまま出してっ♡　あ、

あたしも……シンンンッ♡」
「ううう、出る！」
ヒカルが呻けば、すずかの太腿の締めつけも強まり、それに押し出されるようにビュルビュルッと勢いよく精液を解き放った。
ドロドロの子種が、ガラスにべっちょりと張りつく。
ペニスはビクッ……ビクッ……と、射精の余韻をたたえている。
「あぁ♡　んん……っ♡　兄貴と一緒にイけたぁっ♡」
「すずかちゃん！」
「ひゃっ!?」
ヒカルは、すずかをお姫様だっこした。
いきなりのことにびっくりしたすずかが、ヒカルの首に腕を回す。
「い、いきなり何!?」
そのままベッドに寝かせる。
「び、びっくり……」
「すずかちゃん、いくよっ」
「ん……っ♡」
すずかの上に跨がった。

「兄貴、これ、つけてぇ……♡」
すずかは、バッグからゴムを取り出す。
ヒカルはペニスにゴムをはめると、改めて正常位の体勢ですずかの秘処にペニスを押し当てた。
「あぁっ♡」
挿入される期待で、すずかの頬は染まった。
「いくよ、すずかちゃん！」
「兄貴、きてっ♡」
ズブッ♡　ズブ♡　ヌチュ♡　ヌチャ♡
「あああああんっ♡」
挿入の瞬間、豊満な胸がぶるんっと悩ましく跳ねた。
深い部分をコツンッと切っ先で突く。
「ンンンンン……♡」
すずかは柳眉をたわめ、頬を染めた。
「子宮が近いね、すずかちゃん。すっかり我慢できない子になっちゃってたんだね」
「そ、そう♡」
「う⁉」

ヒカルの腰に、すずかの両足が巻きつき、締めつけられた。
すずかが涙目で訴えてくる。
「兄貴、動いてぇっ♡」
「分かった！」
新鮮な気持ちになりながら、ヒカルはすずかのおっぱいを握りしめ、腰を前後に動かす。
「ぁあああっ♡　はああっ♡　イィッ♡　兄貴が奥に当たってるっ♡　あたしの子宮、兄貴のち×ぽが欲しいって下りてるぅぅ♡」
腰を挟んでいるすずかの両足に、ますます力がこもった。
それだけではない。
愛蜜で、ぬちょぬちょに濡れている媚肉まで強くペニスを咥え込んでくる。
（さっき出してなかったら、すぐに搾り取られてたかも……）
しかし、ヒカルに胸を撫で下ろしている暇はない。
ぐにゅぐにゅと蠢く無数のヒダに刺激され、またも第二射がそれほど遠くはないことは感じていた。
少しでも遅らさなければ。
ヒカルはすずかの胸に顔を埋めると、右胸の陥没乳首を甘噛みし、引っ張り出す。

「ヒイイイインンッ♡」
パンパンパン！
腰を叩きつければ、溢れるラブジュースでベッドのシーツがまるで失禁でもしたみたいにグチョグチョに汚れてしまう。
「あ、兄貴ぃっ♡」
すずかは、艶やかな黒髪を振り乱す。
ヒカルの背中に、すべすべした両腕を伸ばし、爪を立ててきた。
「すずかちゃん、そのままでいて」
「え？」
「いくよっ！」
ヒカルは、すずかのお尻をむんずと握ると、勢いよく立ち上がった。
「なになに、それ、ぁああ♡　いきなりぃいいいいっ♡」
すずかの声が、切なく上擦った。
予想外の動きで、昇り詰めてしまったらしい。
立ち上がると、さっきよりも深度が増した状態で、子宮口を切っ先で感じた。
「それだめぇっ♡　すごひぃいいいぃ♡」
ひぃっひぃっ……と、すずかは上擦った呼吸を繰り返す。

「すずかちゃんが気持ちよくなるんだったら、何度でも突いてあげる！　それに、こんなことだって……」
さらに乳首を甘噛みし、舌で転がす。
すずかは怒濤の快感に上半身を逃がそうとするが、ヒカルはそうはさせまいとベッドのスプリングを利用して、ズンズンッとリズミカルな律動を見舞う。
「やばい♡　やばいからぁっ♡　それ、そんなにズンズン刺さないでっ♡　気持ちよすぎるから♡　バウンドらめぇっ♡」
すずかは身体の不安定さを嫌い、ますますヒカルに齧りつく。
「もっと気持ちよくするぞ！」
「許して♡　あぁん♡　あ、兄貴、分かってるでしょ♡　も、もう何度もイき続けちゃってるから♡　あたしのおま×こ、兄貴のち×ぽの形になっちゃってるからっ♡」
「何度もイって！　何度でもイかせてあげるからっ！」
「あああああ、イクッ♡　だめだめえっ♡　イクウウウウウウウウ♡」
すずかは泣きべそみたいな声を上げながら、絶頂してしまう。
同時にヒカルも果てた。
ビュルビュルッ！
ゴムごしでもすずかの胎内にぶちまければ、すずかは背筋を仰け反らせる。

「あああっ♡　出てるっ♡　あたしのおま×こに、兄貴の精液すごいぃっ♡」
ヒカルは、すずかをゆっくりとベッドへ寝かせた。
ズルッとペニスが抜けるが、まだそれは元気なまま。
「あ、兄貴……もう……♡」
「すずかちゃんはそのまま寝てていいからっ」
ヒカルは脱力し、ビクビクと身体のそこかしこを痙攣させているすずかをうつぶせの格好にさせれば、お尻を高く持ち上げさせた。
秘穴はヒカルのペニスの形通りに、ぽっかりと口を開けている。
「いくよ」
「も、もう許して……♡」
すずかは、もぞもぞと身体を揺するように逃げようとするが、無理だ。
ヒカルは新しいコンドームを着け直すと、すずかのくびれ腰をつかみ、ペニスを挿入する。
ぶぢゅぶぢゅっ！
「あああ……んっ♡」
すずかは悩ましい声混じりに、お尻をぷりぷりと揺らす。
お尻の穴が、ヒクヒクと震えている。

「ああ、また奥ぅっ♡　兄貴、い、イってるからっ♡」
すずかはしきりに、逆ハート形で引き締まったお尻を揺らす。
無自覚の動きかもしれないが、それでもオスを誘う魅惑がある。
パチン！　すずかのお尻を軽く叩けば、彼女の肩がピクンと跳ねた。
「ひぃんっ♡　な、なにして……♡」
（すずかちゃんの声、そんなに嫌がってないな）
じんわりと白いお尻が赤らんだ。
「すずかちゃん、弄められて喜んでる？」
「そ、そんなわけ……ひゃあんっ♡」
もう一度叩くと、すずかはやっぱり過剰な反応を見せた。
叩く力は弱いはずなのに、すずかはまるで甘えるような声を上げる。
「兄貴、やめてぇ♡　お尻叩かないでっ♡」
すずかは首だけを後ろに向けて訴えるが、本気で嫌がっているようにはとても見えない。
ヒカルはペニスで秘処を攪拌する。
「あああっ♡　そ、それがイィッ♡　ち×ぽでグチョグチョに掻き混ぜられるのが、お尻を叩かれるよりいいぃ……ひいいんっ♡」

ヒカルは、すずかのお尻を叩きながら腰を前後に動かす。
「ああんっ♡　やめてっ♡　お、お尻叩かれながら、あそこを穿られちゃうとどっちで感じてるか分からなくなっちゃうぅぅっ♡」
すずかは胸をたぷんたぷんと前後に動かし、煩悶する。
繋がった部分からこぼれた愛蜜が泡立ち、ギュッポギュッポと艶めかしい音を立てた。
パチン！　パチン！
ヒカルは桃尻を叩きつつ、さらに速度を増して、すずかの秘処を掻き混ぜる。
お尻を叩けば叩くほど、膣内の心地よさがゴムごしにも伝わってきた。
「ああ♡　んぅう♡　はあっ♡　ああっ♡　やばいやばいぃっ♡　ンンンンン……ッ♡」
ビクビクとペニスが戦慄く。
ヒカルは肛門をぎゅっと締めて食い止めようとするが、我慢も限界だった。
「すずかちゃん……！」
ヒカルは激しい抽送を繰り出す。最終的には勃起を根元まで押し込んだまま、子宮口をスリコギでゴリゴリするように腰を回す。
「で、出るっ！」

ビュルルウッ！　ドピュッ！　ビュプッ！
「あああ……い、イクゥッ♡　イクウウウッ♡♡」
ベッドのスプリングをギシギシ軋ませながら、すずかは髪を振り乱してよがり果てた。
（す、吸い尽くされる……っ）
これまでで一番の膣の吸引力に、背筋がゾクゾクしてしまう。
「ふぁあ……♡」
すずかはぐったりして、ベッドに倒れこんだ。
「すずかちゃん、大丈夫!?」
「らめ……っ♡」
すずかは目の焦点が合わず、ろれつが回っていない。
「すずかちゃん、すごくよかった。見て。こんなにたくさん出せたよ」
すずかに、精液の溜まった二つのコンドームを差し出す。
「……もう先輩とはデートしない……♡　だ、だって兄貴だけで充分だから♡」
すずかはコンドームを口に咥え、精液を味わいながら呟いた。



第十章　催眠術～陥没ちゃんは兄と付き合いたい。

「ふむふむ……催眠術、かぁ」

つい先日、テレビでやっていた世界のビックリ人間という番組の中で、被験者を自由自在に扱う催眠術師が出てきたのだ。

子どもの頃にも人を意のままに操る催眠術には憧れていて、密かに練習したものだったが、いつの間にか忘れていた。

それが先日のテレビで再燃して、ネット検索している。

と、不思議なサイトを見つけたのだ。

それはおそらく、個人サイト。

黒をバックに、文字が真っ赤で不気味なもの。

普段ならすぐに『戻る』を押しているところだが、トップサイトに気になる文字を

見つけたのだ。
『催眠術を使いたい方、五分でできます!!』――。
馬鹿なと思いつつ、目が離せなくなる。
（五分……）

数日後、ピンポーンとインターホンが鳴った。
「兄貴、来たわよ」
「すずかちゃん、いらっしゃい！」
すずかは、ヒカルが「じゃあ入って」と言った時には、もう部屋の中に入ってしまっていた。
いつものことだから特に気にせず、迎え入れる。
「はい、すずかちゃんっ」
チョコのお菓子、そして紅茶の入ったカップを差し出す。
「あ、ありがとう……」
すずかは訝しそうな顔をする。
「ねえ、これに毒とか入ってないよね？」
「入ってないって。ささ、食べて飲んで、くつろいで！」

「う、うん……」
すずかは恐る恐るという感じでお菓子を食べ、紅茶を飲んだ。
「どう？」
「……お、おいしいけど。――ねえ、あたしに何か頼み事があるんでしょ。気持ち悪いから普通にして」
「分かる!?」
すずかは思いっきりため息をつく。
「分かるっていうか、いつもと違いすぎ」
ヒカルは、すずかを拝むように手を合わせた。
「すずかちゃん、催眠術の実験に付き合って」
「はあ？」
「催眠術の実験！　頼む！」
「何かと思えば……」
やれやれと、すずかはため息をつく。
「……だめ？」
「いいよ」
「マジ!?」

「ダメって言っても、どうせもういいって言うまで、お願いし続けるんだから」
「話が早くて助かるよ！　今日の夕飯もおごっちゃうから！」
「で、今度はどんな催眠術をかけるつもりなわけ？　また外国の誰それとかいうわけの分からないうさんくさい超能力者の？」
「今回は自信があるから！　……じゃあ、目を閉じて」
すずかは、大人しく目を閉じてくれる。
「痛いのはやめてよ」
「大丈夫だから、リラックスして。そして俺の声に耳を澄ませて、集中して……」
すずかはすっかり集中しているようだ。
（よし、手応えはまずまず……）
「目の前には、草原が見えます。すずかちゃんは誰もいない草原の真ん中にいます。気分はどう？」
「……気持ちいい」
「青空が広がっていて、胸が清々しい気分ですね。どこまでも行けそうな気がしますね」
「……はぃ」
「俺の声が聞こえますか？　まるで頭の中に染みるように聞こえますか？」

「よく、聞こえます……っ」
すずかの声はぼんやりしている。
「すずかちゃんは俺の言葉に絶対服従、いいですね？」
「あたしは、あなたに絶対服従……です」
「よろしい。これからすずかちゃんは、俺のことを『お兄ちゃん』と呼ぶこと。しおらしく、優しい、俺のことを慕う可愛い可愛い妹になること。分かった？」
「はい……。あたしはお兄ちゃんと呼ぶ。そしてしおらしく、優しい、お兄ちゃんのことを慕う可愛い可愛い妹になると誓います」
「よっしゃ！」
思わずガッツポーズしてしまう。
「それじゃあ、目を開けて」
「お兄ちゃん！」
目を開けるなり、笑顔のすずかが胸に飛び込んでくる。
「おー。よしよしっ」
ヒカルは、すずかの頭を優しく撫でた。
「お兄ちゃん、だーいすき！」
「っ！」

胸を突く一言だった。
「……すずかちゃん、もう一度言ってくれる？」
「お兄ちゃん、だーいすきっ！」
「お兄ちゃんも、すずかちゃんのこと、大好きだぞーっ！」
ぎゅーっと抱きしめる。
「お、お兄ちゃん、苦しいよぉ」
「ごめんごめん！　つい、感動して……」
（催眠術万歳!!）
ヒカルは心の中で快哉を叫んだ。

すずかは、ヒカルがあのテレビ番組に影響されるのは百も承知だった。
あれを見たヒカルが、催眠術に関してサイトを検索するだろうことも。
だからヒカルが好きそうなサイトを想像して、うさんくさいサイトをすずかが自作したのだった。
絶対にヒカルは、ここに記載されている方法をすずかに試さずにはいられないだろう。
小学生の頃の夏休み、一日中催眠術実験に付き合わされた時みたいに。

この話をすると、みんな口々に「大変だったね」とか「変なお兄ちゃん」などと言ったが、すずかは幸せだった。
大好きな兄と一緒にいられるのだから。
もちろんヒカルに対しては「まだ終わらないの？」とか「あたし、暇じゃないんだからっ」と憎まれ口を叩いていたけれど。
（ほんとうに兄貴ってば、子どもの時から一緒なんだから……）
呆れてしまったが、それが微笑ましい。
（でも今回の兄貴は年相応に成長しちゃって、変態性が出ちゃってるのが……なにが『お兄ちゃん』、よ……。そんな言い方、素面（しらふ）じゃ恥ずかしすぎて無理だから！）
頭の中では冷静に振る舞いながら、
「お兄ちゃん♪」
と、現実世界では言う。
（頭が痛くなりそう……）

「よーし、すずかちゃん！」
「はい、お兄ちゃん♪」
すずかが笑顔で応じる。

（うーん。まさかここまでうまくいくとは思わなかったな……。でも俺はすずかちゃんに催眠術をかけて何がしたかったんだ？）

自問するが、特に答えは思いつかない。

目の前には、従順なすずか。

正直、しおらしく『お兄ちゃん』と言ってもらえれば、それで充分だったわけで。

（いや。でもこんな機会、そうそうないし……）

「よ、よし！　すずかちゃん！　料理をしてくれ！　は、裸エプロンで！」

「はい、お兄ちゃん♡」

「本当にしてくれるの!?」

「だって、お兄ちゃんがしてほしいんでしょ♡」

「も、もちろん……！」

ヒカルは大きくうなずく。

「んっしょ、んっしょ……」

すずかは、その場でどんどん服を脱ぎ始めた。

「すずかちゃん、これ」

ヒカルにできるのは、エプロンを手渡すことくらい。

なんだか心が痛くなって、後ろを向く。

衣擦れの音が、ごそごそと聞こえる。

なぜか緊張してくる。

「できたよ、お兄ちゃん♡」

振り返るとそこには、頬を赤らめたすずかが。

「すずかちゃん！」

「へ、変、かな？」

「そんなことないよ！　最高だよ！」

股間がウズウズと疼いてくる。

「それじゃあ、料理するね♡」

すずかはキッチンに向かう。

「!!」

ドキッとした。

無防備な背中、無防備なお尻。

すべてが目に飛び込んできたのだ。

「ふんふ～ん♪」

すずかは鼻歌を歌いながら、冷蔵庫から具材を取り出し始める。

（俺のために手料理を振る舞おうとしてくれてる……。すずかちゃん！　俺は今、感

動している！　……催眠術のお陰だけど）

（まったく。料理を作らせるにしても裸エプロン？　催眠術をかけた挙げ句、させるのがこんなことなんて呆れちゃう……。ってか、冷蔵庫にろくなものがないじゃない。ちゃんと栄養を取ってるの？　風邪引いたらどうするのよっ、もう）

すずかは心の中で愚痴りながら、卵と砂糖を使って玉子焼きを作る。

「っ！」

と、不意にお尻に生まれた感触に、びくっとしてしまう。

震える手で火を止めると、引き攣り気味な笑みを浮かべながら振り返った。

すると、ヒカルがいつの間にか露わにした股間を、お尻の右のほっぺに密着させていたのだ。

ペニスはすでに我慢汁でぐっちょりと濡れそぼっている。

「お、お兄ちゃん？」

「ごめん、すずかちゃん。でもすずかちゃんがお尻を振ってたから、欲しくなっちゃったんだ！」

（ち×ぽ、熱い……っ）

ビクビクと戦慄く逸物を、ぐいぐいっと執拗に擦りつけられる。

ぞわぞわっと、全身に鳥肌が立った。

「お、お兄ちゃん……♡　だ、駄目……♡」

「駄目じゃない。これは大切なことをしてるんだからっ」

ペニスを押しつけ擦りつけ、我慢汁を塗りたくられてしまう。

身体の芯が火照ってくる。

（馬鹿兄貴、何してくれてるのよっ）

しかしヒカルに対しては、

「お、お兄ちゃんのち×ぽ、熱いよ……っ♡」

舌っ足らずに呟き、身を捩った。

（兄貴のち×ぽのいやらしい匂い……）

自然と小鼻を膨らませた。

瞬間、クチュッと粘り着くような音が響けば、ヒカルが右手の人差し指と中指を、秘処へ埋めてきた。

「お、お兄ちゃん、だ、だめ……っ♡」

（なに勝手に入れてるの!?　料理しろって言ったの、そっちでしょ!?）

「すずかちゃん。俺の言うことに意識を集中させて……。いい？　すずかちゃんのあそこはどんどん俺の指に馴染んで、気持ちよくなっちゃう。もっともっとってせがむ

ようになっちゃうっ」

（なに、都合のいい催眠術をかけようとしてるのよ……！）

素面だったら、キレていたかもしれない。

しかしあくまで、今はヒカルに付き合っているのだ。

「お兄ちゃん、き、気持ちいいよっ♡　お兄ちゃんの指が、あたしの中をぐちゅぐちゅ掻き混ぜてるっ♡」

ヒカルの指をきゅっと咥え込む。

確かに言葉は演技だ。

しかし今感じている肉悦は間違いなく、現実。

「あああっ♡　お兄ちゃん……っ♡」

（兄貴、やる気満々すぎじゃないっ!?　ち×ぽも心なしいつもより大きいみたいだし。ああぁっ、やばすぎなんだけどっ。身体がジンジン火照っちゃう！）

「あああっ♡　はあっ♡　んん……っ♡」

すずかは湿った息遣いを弾ませた。

「すずかちゃん。我慢しないで。もっと声を上げて」

と、不意にヒカルがGスポットをまさぐってきた。

「ンンン……♡」

目の中で火花が散り、危うくバランスを崩しかけてしまう。

慌ててシンクに両手をつき、お尻を突き出す格好になりながら、辛くも危機を脱した。

「お兄ちゃん、イクウウウッ♡」

プシャアッ！

（あぁ、うそぉっ……。潮、吹いちゃった……っ）

すずかは、はぁはぁと肩を大きく上下させた。

（すずかちゃんが素直だと、こっちもやる気が出るな！）

いつものすずかが、嫌なわけではない。

すずかが昔は『お兄ちゃん』と言っていたことを思い出して、ノスタルジックな気持ちになっていた。

現在は『兄貴』で、すずかの性格とも相俟ってツンツンしているし。

でも、今は親しみを込めて『お兄ちゃん』と呼ばれている。

これだけで、ヒカルとしては最高なのだ。

「すずかちゃん、潮を吹いちゃうなんていやらしい子だ」

「はぁ……ぁあっ……ご、ごめんなさい、お兄ちゃん……♡」

「指を抜くよ」
「ヒィィンッ♡」
すずかの背筋に力がこもった。
「見て、すずかちゃん」
ヒカルは、すずかの愛蜜でぐっちょりと濡れそぼった指先を見せつける。
「いやあぁ……っ♡」
すずかは、恥ずかしそうに耳まで真っ赤にして顔を背けてしまう。
「駄目だよ、すずかちゃん。ちゃんと見て」
「……っ」
すずかは、恐る恐る振り向く。
これも催眠術があればこそ。
「はぁ……♡」
すずかはそっと息を吐く。
「見て。本気汁でべっちょり濡れちゃってる。すずかちゃんがすごく感じてくれた証拠だよ?」
「あ、あたし、いやらしっ♡」
「そう。でも悪いことじゃないから。だって、すずかちゃんはお兄ちゃんの指で気持ちよくなってくれたんだから。――すずかちゃん、こっちを向いて。シンクに背中をもたれかけさせて……」
涙ぐんだすずかは、しおらしく言われた通りにする。
いつものすずかであれば、もどかしくなって、「早くしてっ」と言っているところだろう。
(やっぱり新鮮だ)
「すずかちゃん、セックスしてほしい?」
「う、うん♡　お兄ちゃんとセックスしたいっ♡」
ヒカルは早速ゴムをつけ、ビンビンに勃起しているペニスを突きつけた。
「いくよ、すずかちゃん」
「来て、お兄ちゃん……っ♡」
とろとろに蕩けた秘裂を、押し広げるようにペニスを挿入する。
グチュグヂュ!
「あああああああんっ♡♡」
すずかは、ビクビクと全身を戦慄かせた。
愛蜜まみれの膣壁がきゅっと締まって、貪欲にペニスに吸いつく。
「すずかちゃん。奥まで入ったよ。どう?」

すずかは目元を赤らめながら、肩で息をする。
「……す、すっごいっ♡　やっぱりお兄ちゃんのち×ぽ、すごいよぉ……♡　あ、あたしの奥を押し上げてるぅ……♡」
すずかは嗚咽混じりに言った。
それが、よりヒカルの劣情を煽った。
（こんなにお淑やかなすずかちゃんを前に、欲情しちゃうなんて！）
ヒカルは腰を引く。

「ひいいいいいいんんっ♡」
ゴムごしにもヒカルのペニスのゴツゴツした質感を味わえる。
ヒカルは最初から激しい速度で腰を打ちつけてくる。
ぶぢゅっ！　ぢゅぶっ！　ぬちゅっ！　ぐちゅっ！
奥を突き上げられるたび、柳腰にビリビリと甘い電流が弾け、
「お、お兄ちゃん……♡♡」
舌足らずな声を止められない。抽送のたび、愛蜜が飛沫となってこぼれた。
（兄貴、そんなに『お兄ちゃん』って呼ばれるのが好きなわけ!?　ただの呼び方だけでこんなに変わっちゃうとか……!!）

すずかは、ヒカルにぎゅっと抱きつく。
自分でも、膣穴の締めつけがきつくなるのを意識していた。
「すずかちゃんのあそこ、本当にいやらしいよ！　お兄ちゃんを気持ちよくするためにウネウネ動いちゃってるんだからっ！」
「お、お兄ちゃん、そんなこと言わないでぇっ♡　あああんっ♡　は、恥ずかしいっ♡」
（兄貴、馬鹿じゃない!?　どうしてそんな恥ずかしいことが言えるわけ!?）
「すずかちゃん、気持ちいい!?」
子宮口を切っ先でゴリゴリと抉られる。
「お兄ちゃん、そ、そこすごぃッ♡」
（ぜ、絶対にそんなことないから！　いい歳して『お兄ちゃん』呼びを強要する兄とか、キモすぎるし、気持ちよくなってあげてるだけっ。あたしは催眠術になんてかかってないんだから！）
しかし、ヒカルはさらに陥没乳首に吸いつく。
巧みな舌技と慣れた力加減で両方とも勃起させてしまう。
（あたしの乳首、兄貴にメロメロになっちゃってるっ）
「あああ♡　いくううっ♡」

陥没して過敏になった乳首を責められてしまえば、頭が真っ白になり、ビクビクと全身を痙攣させ、呆気なく果ててしまう。

「ひあぁぁぁぁ……♡」

すずかは柳眉をたわめ、ひいひい……と呼吸を引き攣らせた。

不意に、ヒカルはぴたっと腰の動きを止めてしまう。

「お兄ちゃん!?」

(兄貴、どういうつもり!?)

すると、ヒカルがにやにやしていた。

「もっとすずかちゃんが気持ちよくなる方法を考えたんだ。いつもはしてくれないこと……」

と、ヒカルは繋がったままの格好で、不意に仰向けに寝そべった。

「ああ♡　深いぃぃっ♡」

すずかは、いきなりの騎乗位に黒髪を乱れさせながら、仰け反った。

丸太のようにも感じるくらい太く硬いペニスで、すずかの秘処は広げられている。

草むらがないからこそ、秘裂の生々しい姿が丸見えだ。

「お兄ちゃん、こ、これ……♡」

(こんなことするなんて、どういうつもりなの!?)

すずかは心の中で反発する。

最初こそヒカルを手玉にとってやろうとウソ催眠術に乗っていたはずなのに、どうしてこんなことになってしまったのか。

「すずかちゃん、動いて」

「え……っ」

「すずかちゃんに動いてほしい気分なんだ」

(何が気分、よ！　いつもはできないくせにこんなことをさせようだなんて！　ああもうっ。その余裕ぶった顔が悔しいのっ！)

それでもすずかは、ヒカルを想っている。

だからこそ、わざわざ催眠術実験に従ったのだ。

だから表面上はヒカルに反発していても、心の深い部分で従ってしまう。

「あ♡　ん……っ♡」

すずかは秘処を掻き混ぜられるたびに湧きあがる愉悦の電流に、全身に鳥肌が立った。腰をクネクネとさせるたびに、繋がっている場所から、ぢゅぽぢゅぽっと卑猥な音がこぼれてしまう。

「そうだよ、すずかちゃん。その調子！」

ヒカルがさらにけしかける。

（人の気も知らないで……！）

と、次の瞬間、パチン！という音が弾けた。

「はあぁぁんっ♡」

すずかは、あられもない声を上げてしまう。

「お兄ちゃん、お尻、叩かないでっ♡」

そう。今、ヒカルが右手でお尻を張ったのだ。

「すずかちゃん、もっと大きく腰を動かしてくれなきゃお兄ちゃん、気持ちよくなれないぞっ」

（本当に鬼畜！　催眠術をかけてやりたかったことって、こんなわけの分からないことだったの!?）

パチン！

「あああああんっ♡」

すずかは、ビクンッと全身を引き攣らせた。

全身が、ヒカルを受け入れることで敏感になりすぎている。

痛いはずの刺激にも、快感を覚えてしまう。

「すずかちゃん、休んじゃだめだぞ」

ヒカルのペニスが、胎内でびくびくっと震える。

叩かれたお尻が、ジンジンと疼く。

痛いと思うほどの強さではないことが余計に、身体を火照らせている。

「すずかちゃん、早くお兄ちゃんにご奉仕をするんだっ！」

パチン！　パチン！

「ひぁっ♡　ああっ♡　ぅぅぅんっ♡　ひぃンッ♡」

ヒカルは面白がって、左右のお尻をリズミカルに叩いてくる。

「すずかちゃん、お兄ちゃんが望んでいるんだよっ？」

そんな調子に乗りまくった言葉まで。

「お兄ちゃん♡　お、お尻、叩かないで……っ♡」

「お兄ちゃんの言うことを聞けないんだったら、おしおきだっ。さあ、お兄ちゃんの言う通りにするんだよ、すずかちゃんっ」

すずかは下唇を噛んだ。

（も、もう無理……っ）

すずかは吊り目で、ヒカルを見た。

「兄貴……っ」

「すずかちゃん、兄貴じゃなくって、お兄ちゃん。あれ、催眠術の効きが弱くなっちゃったのかな？」

そんなとぼけたことを呟いて、首を傾げる。

ヒカルは妹の変化に少し戸惑う。

「すずかちゃん、兄貴じゃなくって、お兄ちゃん、だよ」

「……さいよ」

「え？」

「いいかげんにしなさいよ……っ！」

突然すずかが激昂すると同時に、腰を持ち上げれば、愛液まみれのペニスがビィンと弾けるように露わになった。

「すずかちゃん……!?」

「人がかかったフリをしてあげてることにつけ込んで、調子に乗ってくれるじゃないっ！」

「かかったフリ……？」

「そうよ。兄貴をからかったのっ！」

「からかったって……エッチしてるけど!?」

「そ、それはどうでもいいでしょ!? 兄貴をびっくりさせようとしたの！」

「び、びっくりした……」

「調子に乗ってお尻まで叩く始末だし……」

「う……。そ、それは……」

「兄貴の変態性が露わになって……。あんなことをしたいって願望があるとか、キモすぎっ！」

「ご、ごめん、すずかちゃん。あれは、調子に乗ってしまっただけで……う!?」

「なお悪いわよ！」

すずかにいきなり股間を蹴られ、びくっとしてしまう。

蹴る力は弱いが、今の状況ではつらい。

「すずかちゃん……」

寒々しい視線を向けられる。

「こんなにち×ぽを大きくしといてなにが調子に乗って、よっ」

「でもすずかちゃんも喜んで……ううう！　す、すずかちゃん……け、蹴らないで……っ」

ヒカルは呻いてしまう。

「そんなに動いてほしいなら、兄貴が動きなさいよっ……ンンッ♡」

再びすずかはペニスを呑み込めば、グチュグチュと淫らな音が弾ける。

「ん……っ♡　あぁ♡　謝りながら大きくするとか……ぁあっ♡」

「すずかちゃん、何するの？」
「こうするのっ！」
「うおお!?」
すずかは、玉袋を揉みしだいてきた。
温かくぬるぬるした媚肉に締めつけられながら、玉袋を揉まれる。
未知の感覚に、性感帯がショートしてしまいそうだ。
「ううううう！　それ禁止、反則だよ……っ！」
ヒカルは呻く。
「ほら、腰を叩きつけなさいよ♡　あ、あたしを気持ちよくするのっ♡」
すずかは命令しつつ、玉袋を揉んでくる。
その揉み方もイタキモチイイという、具合を心得たもの。
「すずかちゃん！」
ペニスで膣内を掻き混ぜる。
「ひいいいんっ♡♡」
これまでとは違う締めつけに襲われた。
「すずかちゃん、今イって……うう!?」
すずかに、またも玉袋を揉み出しだかれる。

「早く腰を動かすのっ♡　あたしがイったとかどうでもいいことを言ってないで、あたしを気持ちよくするのっ♡」
「わ、分かった……！」
ヒカルはすずかに言われるがまま、腰を突き上げた。
「あぁっ♡　ふぁっ♡　イィッ♡　や、やればできるじゃんっ♡　そうっ♡　兄貴、もっと腰を振ってぇっ♡　アアアアンンッ♡」
すずかは骨抜きにされ、蕩けた顔をさらす。
（今だっ！）
一瞬の隙を突き、ヒカルは体勢を変え、正常位に持っていく。
「兄貴ぃ♡♡」
「すずかちゃんは、俺のち×ぽが欲しいんだろ！」
ヒカルは激しい抽送を見舞う。
「あああっ♡　らめっ♡　激しいっ♡　壊れちゃう♡　ば、馬鹿兄貴のち×ぽで子宮口をズンズン突かれるのイィッ♡♡」
愛液が糸を引きながら、あぶくを滲ませた。
ゴムが擦り切れんばかりの激しい杭打ち。
すずかは耳を真っ赤にさせ、涙の粒を目の端に浮かべた。

「アアアアッ♡　イクウウッ♡　兄貴のち×ぽでイク――」
瞬間、ヒカルは腰を動かすのをやめた。
「ひゃああっ!?」
すずかは信じられないとでも言わんばかりに、目を瞠った。
「な、なんで!?」
すずかは自分で腰を動かして絶頂まで昇り詰めようとするが、ヒカルが腰を押さえて叶わない。
「兄貴ぃ!!　な、何してるの!?」
「動いてほしいなら、心の底から『お兄ちゃん』って言うんだ。催眠術じゃないっ。心の底から！」
「……だ、誰がそんなこと……っ」
「だったら……」
ヒカルがペニスを抜こうとする。
「だめえっ！」
すずかは膣穴を締め、抜くのを食い止めた。
「すずかちゃん、お願い。一度でいいからっ」
「お兄ちゃん……お兄ちゃんが大好きぃっ！　だ、だからち×ぽを動かして！　あた

しをイかせてっ！」
「合格」
「あああああんっ♡♡」
すずかは頬を染め、悦に入った顔を見せてくれる。
ヒカルは男根で膣壁を抉った。
ヒカル自身も、ラストスパートめがけひた走った。
「あああっ♡　お、お兄ちゃん♡　お兄ちゃん、激しいっ♡　う、嬉しいぃっ♡　とろけちゃう♡」
すずかのねっとりとした膣肉がペニスに吸いつき、奥まで引きずられた。
（く、食いちぎられそうだ！　こんなに激しくすずかちゃんが求めてくれるなんて初めてかも!!）
「お、お兄ちゃん……♡　あたし、も、もう……もう……!!」
「すずかちゃん、イけ！　お兄ちゃんと同時にイくんだっ!!」
ヒカルが射精すると同時に、
「イクイクッ♡　イっちゃうううう♡　ひいいいいいんっ♡　お兄ちゃん好き好きぃっ♡　イクの止まらないぃぃ♡　何度もイクウウッ♡♡」
すずかは嗚咽を漏らし、ビクビクと身体のあちこちを痙攣させる。

「し、搾られる……！」

ヒカルは呻き、すずかの膣内の吸引力にゾクゾクしてしまう。

一滴残らず、ゴムの中に解き放った。

中に出してこそいないが、すずかは膣内でびゅるっびゅるっと勢いよく射精する感触と、熱気を感じているはずだ。

「あぁ……♡　お兄ちゃん……っ♡」

「すずかちゃんには催眠術なんてかける必要なかったね。こんなにもお淑やかで、お兄ちゃんのことが大好きなんだからねっ」

ヒカルは、夢見心地になっているすずかの頭を優しく撫でた。

（了）



美少女文庫
FRANCE SHOIN

母乳ちゃんは射したい。
先輩と妹、ミルクハーレム

著者／上原りょう（うえはら・りょう）
原作・挿絵／ひつじたかこ
発行所／株式会社フランス書院
〒102-0072　東京都千代田区飯田橋 3-3-1
電話（営業）03-5226-5744
（編集）03-5226-5741
URL https://www.bishojobunko.jp

印刷／誠宏印刷
製本／若林製本工場

ISBN978-4-8296-2145-5 C0193
©Ryoh Uehara, Takako Hitsuji. Printed in Japan.
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、
たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。
落丁・乱丁本は当社営業部宛にお送りください。お取替えいたします。
定価・発行日はカバーに表示してあります。

美少女文庫
FRANCE SHOIN



◆◇◆ 好評発売中！◆◇◆

美少女文庫
FRANCE SHOIN



◆◇◆ 好評発売中！◆◇◆

美少女文庫
FRANCE SHOIN



◆◇◆ 好評発売中！◆◇◆